

業務資料 16022

油料作物（落花生、ひま、ひまわり、胡麻、  
油やし、菜種）の現状とその将来性について

1968. 1. 31.

海外移住事業団



国際協力事業団

受入 月日 '84. 9. 13	000
登録No. 14833	84.2
	EM.

## ま え が き

この資料は、油料作物（落花生、ひま、ひまわり、胡麻、油やし、なたね）の世界市場における現状とその将来性を知るため、KK富士経済に委託し調査したものである。

これら農産物は、海外移住事業団の関係している移住地でとりあげようとしているもので、これについて世界の需給状況を知ることは作物の開発導入上意義あるものと思われる。

又現地で販売するにあたり、参考になると思料し、別添により世界並びに中南米の主要取扱業者を集録した。業務上の資とされたい。

JICA LIBRARY



1009115[5]

1 9 6 8 . 1 . 3 1

海外移住事業団業務才2部長

白 石 健 次

# は し が き

この報告書は海外移住事業団の御依頼により、落花生、ひまわり、ひま、ゴマ、油やし、なたね、以上6品目の油料作物に関する営農方針立案の基礎となる事項を、世界市場の立場から調査した結果を総合したものであります。落花生、ひまわり、ひま、ゴマ、油やし、なたね、それぞれの油脂原料（種子）としての生産および貿易事情ならびに油脂の需給動向を報告しております。

なお、種子の主要輸入国たるヨーロッパ諸国の植物油脂関係業者および南米諸国の油脂業者リストを別冊に収載しました。

次の各章に分けて報告致します。

才 一 章	概 況
才 二 章	世界の生産状況
才 三 章	世界の流通事情
才 四 章	消費状況
才 五 章	南米の輸出事情
才 六 章	総 括

昭和43年1月

株式会社 富士 経 済

# 目 次

## 才一章 概 況

才一節 油料作物の生産と輸出入事情	1
才二節 油料作物と油脂の輸出統計	5
1) 落花生(殻付)および落花生油	5
2) ひまわりおよびひまわり油	6
3) ひま、およびひまし油	6
4) ゴマおよびゴマ油	7
5) パーム核およびパーム	7
6) パーム油	8
7) なたね及びなたね油	8

## 才二章 世界の生産状況

才一節 生産推移と主要生産国の最近の状況	9
1) 世界の油脂生産高推移	9
2) 落 花 生	12
3) ひ ま わ り	15
4) ひ ま	19
5) 胡 麻	24
6) 油 や し	27
7) な た ね	33
才二節 今後の生産見通し	37
1) 落 花 生	37
2) ひ ま わ り	37
3) ひ ま	38
4) 胡 麻	38

5) 油	やし	-----	38
6) な	たね	-----	38
才三章 世界の流通状況 -----			39
才一節 国別、品目別国内消費および輸出入統計 -----			39
1) 落	花生	-----	39
2) ひ	まわり	-----	42
3) ひ	ま	-----	44
4) 胡	麻	-----	46
5) 油	やし (やし核)	-----	48
6) な	たね	-----	50
才二節 主要輸出国の輸出事情および今後の見通し -----			52
1) 落	花生	-----	52
2) ひ	まわり	-----	55
3) ひ	ま	-----	57
4) 胡	麻	-----	61
5) 油	やし (やし核)	-----	62
6) な	たね	-----	64
才三節 主要輸入国の輸入事情および今後の見通し -----			65
1) 落	花生	-----	65
2) ひ	まわり	-----	66
3) ひ	ま	-----	67
4) 胡	麻	-----	67
5) 油	やし (やし核)	-----	68
6) な	たね	-----	68

才四章	消費状況	70
才一節	消費統計	70
1)	油脂生産推移	70
2)	国別油脂消費統計	81
才二節	主要消費国の最近の消費動向	91
1)	米 国	91
2)	英 国	94
3)	E E C	96
4)	ソ 連	102
5)	日 本	104
6)	ブ ラ ジ ル	105
才三節	主要消費国の原料輸入事情	107
才四節	主要消費国の品目別油脂供給量と種子輸入状況	108
才五章	南米の輸出事情	113
才一節	南米の種子生産状況	113
才二節	品目別輸出状況	118
1)	落 花 生	118
2)	ひ ま わ り	120
3)	ひ ま	121
4)	胡 麻	126
5)	油 や し (やし核)	127
6)	な た ね	127
才三節	国別油脂、種子の輸出入状況	128
1)	アルゼンチン	128
2)	ブ ラ ジ ル	128
3)	コ ロ ン ビ ア	128

4) チリ	-----	129
5) ベネズエラ	-----	129
6) エクアドル	-----	130
7) ウルグアイ	-----	131
才四節 生産、輸出入統計	-----	131
1) アルゼンチンのひまわりの生産量	-----	131
2) アルゼンチンの落花生の生産量	-----	132
3) アルゼンチンの植物性油脂輸出実績	-----	133
4) ブラジルの種子生産量	-----	134
才6章 総括	-----	135
才一節 種子の需給事情	-----	135
才二節 種子および油脂の生産状況	-----	137
才三節 種子および油脂の輸出推移	-----	139
才四節 種子の生産と貿易	-----	143
才五節 輸出国と輸入国の関係	-----	143
1) 落花生	-----	144
2) ひまわり	-----	145
3) ひま	-----	146
4) ゴマ	-----	147
5) やし核	-----	148
6) なたね	-----	149
才六節 油脂の生産傾向と種子の輸入	-----	150
才七節 南米の輸出相手国	-----	151
才八節 所見	-----	152
〔参考資料〕	-----	154



# 第一章 概 要

## 第一節 油料作物の生産と輸出入事情

調査対象油料作物6品目（落花生、ひまわり、ひま、ゴマ、油ヤシ、なたね）のそれぞれ主要生産国、主要輸出国、主要輸入国を一覧すれば次表のとおりである。

これらの油料作物は、おおむね、いわゆる後進農業国が主要生産国となっており、搾油工場の設備が遅れている国および油脂の保管設備が遅れている国などが、主要輸出国となつているようにみられる。また主要輸入国はその多くが、国土面積が小さく、先進工業国として発達している国々で、ヨーロッパ諸国、日本などがこれにあたる。

品目別に概観すれば、落花生はアジア、アフリカ、米国、南米と世界的に生産されているが、栽培量の約3分の1は、種子として直接食用に供せられる。油脂用として輸出している国は主として、前英領、前仏領のアフリカ諸国でこれを輸入している国は、ヨーロッパ諸国である。種子の貿易量は、生産量の約10%と推定される。

ひまわりは東欧共産圏諸国が主要生産国でその生産量の97~98%は国内消費され、貿易に回されている量はわずかに2~3%である。これらの輸入国も、ほとんど東欧共産圏であつた。しかし最近は米国でも国産の増加がみられる一方、日本の需要量が高まるなど、その市場構成に変化がみられる。

ひまはアジアおよび中南米で主として生産されているが、世界第1位、

品目別主要生産国、主要輸出国、主要輸入国の一覧

	落花生	ひまわり	ひま	ゴマ	油ヤシ	なたね
主要生産国	インド	ソ連	ブラジル	インド	ナイジェリア	インド
	中共	アルゼンチン	インド	中共	コンゴ	中共
	ナイジェリア	ルーマニア	タイ	スーダン	ダホメー	パキスタン
	米 国	ブルガリア	米 国	メキシコ	シエラレオネ	カナダ
	セネガル	ユーゴ	エクアドル	ビルマ	インドネシア	ポーランド
ブラジル	トルコ	タンザニア	コロンビア	マラヤ	フランス	
主要輸出国	ナイジェリア	ブルガリア	タイ	スーダン	ナイジェリア	フランス
	セネガル	ソ連	エクアドル	ナイジェリア	ダホメー	カナダ
	スーダン	ハンガリー	タンザニア	エチオピア	シエラレオネ	スウェーデン
	ニジェール	フランス	中共	タンザニア	インドネシア	デンマーク
	南アフリカ	ルーマニア	パラグアイ	ニカラグア	アンゴラ	オランダ
		タンザニア	エチオピア		東カメルーン	
主要輸入国	フランス	東ドイツ	日 本	日 本	英 国	日 本
	英 国	イタリア	西ドイツ	イタリア	オランダ	イタリア
	イタリア	チェコ	フランス	ベネズエラ	西ドイツ	アルジェリア
	スイス	西ドイツ	英 国	米 国	フランス	西ドイツ
	西ドイツ	オーストリア	イタリア	ベルギー	日 本	英 国
	ベルギー	米 国			ベルギー	フランス

2位の生産国であるブラジル、インド両国が種子の輸出を禁止しているため、世界の貿易量も減少傾向にあつた。しかし66年には中共の大巾な輸出増加によつて、輸出量は前年よりも50%も増大し、中共は一躍、世界の最大の輸出国となつた。一方輸入国は減少気味で、66年には日本、英国、西ドイツ、フランス、イタリアの5カ国で輸入量の95%を占め、50年代の主要輸入国であつた米国、ソ連両国の輸入量は最近3年間1,000トン以下となつている。米国はひまし油の輸入、ソ連は種子の国内生産が増大している。

ゴマは生産量の約10%が輸出されているが、ゴマ油の貿易量はほとんどない。主要生産国であるインド、中共、メキシコ、ビルマなどの輸出量は少なく、スーダン、ナイジコリアなど主としてアフリカ諸国が主要輸出国となつている。主要輸入国は日本、イタリア、ベネズエラの3カ国で、世界貿易量の50%以上を占めている。日本は輸入量の半分を直接種子として供用しているが、イタリアでは食用油には5%のゴマ油が含まれていることが法律によつて定められているため、油脂の使用量が高い。

ヤシ (Copra) は東南アジアで大規模に生産されているが、油ヤシ (Parlm, Parlm Kernal) は、主としてアフリカが産地となつており、生産量の80%近くが貿易されている。そのうちのさらに70%近くがナイジェリア一カ国で輸出されて、ナイジェリアへの原料供給依存度は非常に高い。これは近年コンゴが国内搾油産業の発達によつて種子の輸出から油の輸出にウエイトを移行していることによる。またナイジェリアでも搾油工場が稼働をはじめ66年には油の輸出をはじめている。主要輸入国はヨーロッパ諸国および日本である。

なたねはアジアおよびヨーロッパ諸国とカナダが主要生産国で生産量は

年々増大している。生産量の約 8 % が輸出されているが、世界貿易量の 50 % はカナダに依存している。次いでフランス、デンマークなどが主要輸出国となつているが、カナダは日本、フランスはアルジェリアとイタリア、デンマークはオーストリアとイタリアなどを主要相手国としており、これら日本およびヨーロッパが主要輸入国となつている。

原料種子ではひまわり、落花生、なたね、ひまの増産が目立ち、ゴマ、油ヤシはほぼ横バイである。一方貿易量は落花生が横バイ、油ヤシ、ゴマは減少傾向であつて、ひまわり、なたねに増加傾向がみられる。ひまは中共の動向如何にかかつていゝる。これらのことからヨーロッパでは、ますます大豆となたねに依存度が高くなるという見方がされている。

油脂の生産推移をみると、ひまわり油の増加が最も顕著で、次いでなたね油、ひまわり油も増産傾向にある。しかし落花生油、ゴマ油の伸び率は鈍く、過去 9 ~ 10 年間に 10 ~ 15 % 程度伸びたにすぎず、ヤシ核油は全く横バイである。

次に 1967 年 6 月 7 日から 9 日までブリュッセルで開かれた第 45 回国際搾油業者年次大会において、会長の Charles de Boinville 氏が報告した世界の油脂事情の回顧と展望から、最近の種子および油脂の貿易統計を抜萃した。

第二節 油料作物と油脂の輸出統計

1) 落花生(殻付)および落花生油

(単位 千トン)

輸 出 国	種 子				油 脂			
	1963	1964	1965	1966	1963	1964	1965	1966
ナイジェリア	624	553	520	582	70	81	92	105
前仏領赤道および 西アフリカ	354	389	357	440	107	136	151	159
ス ー ダ ン	116	152	122	100	—	1	1	—
中 共	8	36	48	62	3	6	6	27
米 国	16	39	78	60	4	37	28	8
その他前英領西ア フリカ	43	31	34	35	3	9	12	22
前英領東・中央ア フリカ	84	32	29	34	—	—	—	—
タ イ	13	11	17	20	1	—	1	1
ポルトガル領ア フリカ	34	32	20	15	4	6	9	4
南 ア 連 邦	75	73	19	15	11	11	7	5
ブ ラ ジ ル	15	—	18	12	8	—	—	—
その他 アフリカ諸国	19	16	16	11	—	—	—	—
メ キ シ コ	13	8	7	7	—	—	—	—
インドネシア	4	1	3	7	—	—	—	—
イ ン ド	33	29	—	—	82	59	—	—
アルゼンチン	—	—	—	—	36	1	62	82
そ の 他	7	12	11	11	1	1	1	—
合 計	1458	1414	1299	1411	330	348	370	417

2) ひまわりおよびひまわり油

(単位 千トン)

輸 出 国	種 子				油 脂			
	1963	1964	1965	1966	1963	1964	1965	1966
東欧(ソ連を含有)	105	68	82	137	208	173	187	278
前英領東アフリカ	8	12	8	6	—	—	—	—
南ア連邦	3	4	2	1	1	—	1	—
アルゼンチン	—	—	—	—	4	—	35	77
そ の 他	16	27	22	21	3	1	—	1
合 計	132	111	114	165	216	174	223	356

3) ひまおよびひまし油

(単位 千トン)

輸 出 国	種 子				油 脂			
	1963	1964	1965	1966	1963	1964	1965	1966
中 共	9	12	15	58	—	—	—	2
タ イ	40	36	28	46	—	—	—	—
前英領東アフリカ	38	21	16	25	—	—	—	—
その他、アメリカ	38	38	34	17	—	—	1	—
エチオピア	8	6	5	6	—	—	—	—
ポルトガル領アフリカ	3	3	2	3	1	—	—	—
前仏領アフリカ	3	2	2	1	—	—	—	—
ブラジル	—	—	—	—	77	111	140	90
インド	—	—	—	—	39	25	12	1
そ の 他	19	16	11	15	2	4	2	1
合 計	158	134	113	171	119	140	155	94

## 4) ゴマおよびゴマ油

(単位 千トン)

輸 出 国	種 子				油 脂			
	1963	1964	1965	1966	1963	1964	1965	1966
ス ー ダ ン	70	101	69	65	1	1	1	1
その他アフリカ諸国	26	31	27	26	—	—	—	—
ナイジェリア	16	18	21	25	—	—	—	—
ニカラガ	6	6	6	5	—	—	—	—
中 共	2	1	4	3	—	—	—	—
メキシコ	23	2	—	1	—	—	—	—
そ の 他	20	14	16	15	—	—	—	—
合 計	163	173	143	140	1	1	1	1

## 5) パーム核およびパーム核油

(単位 千トン)

輸 出 国	種 子				油 脂			
	1963	1964	1965	1966	1963	1964	1965	1966
ナイジェリア	405	400	422	400	3	1	1	333
前仏領赤道西アフリカ	127	123	90	68	1	1	20	18
その他前英領西アフリカ	56	56	52	52	—	—	—	—
インドネシア	31	33	27	30	—	—	—	—
ポルトガル領アフリカ	34	30	27	24	2	2	1	1
マ ラ ヤ	16	12	13	15	—	—	—	—
リベリア	7	7	10	9	—	—	—	—
コンゴ(キンシャサ)	3	1	—	—	32	46	33	32
そ の 他	3	7	9	5	4	2	3	3
合 計	682	669	650	603	42	52	58	87

## 6) パーム油

(単位 千トン)

輸 出 国	油 脂			
	1963	1964	1965	1966
マラヤ	108	126	140	178
ナイジェリア	128	136	152	146
インドネシア	110	133	126	135
コンゴ(キンシャサ)	143	128	82	84
ポルトガル領アフリカ 前仏領赤道 西アフリカ	18	19	16	15
その他の	14	17	18	15
そ の 他	9	11	13	14
合 計	530	570	547	587

## 7) なたねおよびなたね油(カラシを含む)

(単位 千トン)

輸 出 国	種 子				油 脂			
	1963	1964	1965	1966	1963	1964	1965	1966
カナダ	162	99	275	354	—	—	—	—
フランス	60	112	122	116	6	11	31	41
東 欧	20	2	35	71	4	2	4	23
デンマーク	51	56	44	41	—	—	—	—
中 国	1	—	6	33	—	—	4	33
スウェーデン	30	48	73	17	19	9	16	14
そ の 他	11	22	14	19	—	—	1	1
合 計	335	339	569	651	29	22	56	112



## 第二章 世界の生産状況

### 第一節 生産推移と主要生産国の最近の状況

#### 1) 世界の油脂生産高推移

調査対象品目を含めて、世界の主要植物油生産高推移をみると、第1表のようになっている。

数量的にいえば、1959年以降増産率の大きいのは食用油のカテゴリーである。1959-65年の増産率は約20%に達する。植物油の中で最もウェイトが大きいのは大豆油で、1960-64年についてみると、食用油全体の約4分の1を占めていた。1962年には大巾な増産となつたものの、その後の推移は緩慢になつている。落花生油は食用油では大豆にほぼ比肩するだけのウェイトをもっており、1959年以降の増産推移はほぼ大豆油と同じである。生産が急激に伸びたのは1965年で、記録的水準に達したが、その後生産はやや後退している模様である。1965年に生産が大きく伸びたものは、このほかにひまわり油となたね油がある。とくにひまわり油の場合には、ソ連の増産が大きく寄与して30%余の増産率を記録した。この結果、ひまわり油は世界で3番目に大きな食用油になつている。

油糧作物の収穫高推移を、調査対象品目にしぼつて世界的にみたのが第2表である。

(第1表) 世界の主要植物油生産高推移

(単位:千トン)

	1959	1960	1961	1962	1963	1964	1965	1966	1967 (予報)
食									
大豆用油	3,334	3,208	3,660	4,020	4,195	4,270	4,500	4,960	5,380
落花生油	2,778	2,543	3,183	3,736	3,686	3,820	3,892	3,115	3,155
ひまわり油	1,883	1,633	2,725	2,855	2,985	3,078	3,392	2,795	3,100
緑実油	1,819	1,991	1,990	2,172	2,087	1,967	2,606	2,695	2,550
なたね油	1,136	1,109	2,305	2,430	2,490	2,610	2,715	1,490	1,585
オリーブ油	1,125	1,245	1,971	1,996	1,190	1,230	1,665	1,330	1,420
胡麻油	539	524	1,178	1,300	1,300	1,064	1,387	1,980	615
工業用									
コヤシ油	1,749	2,041	2,077	2,325	2,420	2,435	2,360	2,475	2,400
ヤシ油	682	700	1,410	2,029	2,118	2,129	2,154	1,410	1,420
ヤシ核	425	417	682	1,650	1,390	1,400	1,704	415	425
工業用									
亜麻仁油	1,012	898	1,110	1,080	1,150	1,190	1,150	1,210	1,060
ひまわり油	218	221	923	901	1,024	973	959	295	330
桐油	117	106	265	225	235	259	282	109	147

(出所) 下段はCommonwealth Economic Committee, Vegetable Oils and Oilseeds, 上段は米国農務省の発表数字

(注) 下段の数字については: 油糧作物の収穫高から種子、直接食用などに消費される数量を控除したものを油脂相当量に換算したものである。

上段の数字については: 米国の油脂生産高の推定は、生産された油脂と輸出された油料種子に相当する油脂を含む。その他の諸国では、種々の油糧種子の生産高に通常の搾油歩留率をかけて算出したもの。

○印は調査対象品目

(第2表) 世界の調査対象油料作物の収穫高推移

(単位:千トン)

	1958	1959	1960	1961	1962	1963	1964	1965	1966
	-59	-60	-61	-62	-63	-64	-65	-66	-67
落花生	13,404	12,271	13,591	13,905	14,339	14,775	16,250	15,380	16,110
なたね	3,606	3,521	3,740	3,949	4,126	3,378	4,403		
ひまわり	5,977	5,188	5,929	6,896	6,820	6,435	8,565	8,075	9,080
胡麻	1,497	1,455	1,329	1,472	1,535	1,535	1,635	1,560	1,630
油やし	682	700	682	650	696	698	704		
ひま	510	516	573	526	549	594	673	774	645
						606	660		

(出所) Common Wealth Economic Committee, Vegetable Oils and Oilseeds

上段数字は落花生 = (Oil World, May, 26, 1967)

ひまわり = (Oil World, Apr, 14, 1967)

胡麻 = (Oil World, March, 31, 1967)

ひま = (Foreign Agriculture Circular

Feb, 1967)

## 2) 落花生

落花生は大豆に次いで、食用植物油源としては2番目に重要な油料作物である。熱帯および亜熱帯地域に広く栽培され、また地中海性の温暖な気候に恵まれた地域でも栽培されている。落花生は搾油用に用いられるだけでなく、直接に消費される。全世界の収穫量(生産量)の約3分の1は直接的消費に使用されていると推定されるが、この直接消費比率は国によつて異なる。搾油かすは動物用の飼料として好適である。から付き落花生の平均商業的搾油率は、近代的技術を採用すれば47%に達することも可能であるが、落花生を油脂に換算する場合には一般に45%の搾油率が用いられる。落花生油はマーガリンや合成料理用ヘットの製造に用いられるが、料理用あるいはサラダ・オイルとして直接に消費される例も多い。

1964-65年シーズン(8月から翌年7月まで)の世界の落花生生産高は、むき落花生で1,470万トンから1,620万トンに増加した。増産のほとんどはインドであるが、アルゼンチン、ブラジル、ビルマ、中共、インドネシア、セネガルなどでも増産を記録した。しかし、世界的な落花生の増産も1965年の世界貿易量の拡大には結びつかなかつた。それはナイジェリア、西アフリカ、スーダンなどの主要輸出国の輸出が減少したうゑに、インドおよび南連邦の輸出が急減したからである。1965-66シーズンにはガンビア、ナイジェリア、ニジェール、セネガル、米国では落花生の収穫が多かつたが、インドの大巾な減産によつて世界の生産量は減少した。なお66年は生産貿易とも64年の水準に回復したもようである。

主要生産国別の落花生の生産推移は第3表の通りである。

(第3表) 主要生産国の落花生生産高推移

(単位: 殻なし落花生、千トン)

	1958 -59	1959 -60	1960 -61	1961 -62	1962 -63	1963 -64	1964 -65	1965 -66	1966 -67
インド	4,966	4,489	4,736	4,915	4,745	5,215	5,888	4,022	5,000
中 共	2,760	(2,230)	(2,230)	(2,130)	(2,350)	(2,500)	(2,700)	2,800	2,750
ナイジェリア*	762	636	884	979	1,245	1,142	985	1,418	1,370
米 国	810	709	796	778	808	881	952	1,081	1,094
セネガル*	664	707	800	888	746	798	863	984	720
ブラジル	352	402	575	638	594	470	743	782	710
アルゼンチン	237	206	262	426	307	333	439	411	334
ビルマ	284	270	366	387	423	337	345	288	409
インドネシア	325	358	360	355	367	384	350	515	...
スーダン	186	183	189	147	225	289	280	305	320
南アフリカ	179	197	253	173	262	202	183	192	220
ニジェール	165	103	148	150	202	163	152	223	274
ウガンダ*	160	150	160	150	160	160	160	160	...
日 本	82	93	125	140	141	152	131	143	159
台 湾	95	95	101	103	94	142	129	126	121
タイ	119	122	149	106	109	91	116	121	125
オートボルタ	49	95	93	108	111	111	118	127	...
チャド	(110)	(110)	(120)	130	140	(150)	(140)		
コンゴ(レオポルドビル)	166	171	(172)	(130)	(120)	110	100	100	...
合 計	13,404	12,271	13,591	13,905	14,339	14,775	16,250	15,380	16,110
						14,674	16,244		

\* 商業生産のみ

(出所) Commonwealth Economic Committee, Vegetable Oils  
and Oilseeds

上段数字はOil World, May, 26, 1967)

英連邦圏の主要生産国はインド、ナイジェリア、ウガンダの3カ国である。それ以外の主要生産国はアフリカに多い。とくに輸出が多い主要生産国はセネガル、ニジェール、マリ、スーダンであるが、セネガルは伝統的にフランスの需要量の大部分を供給してきた。セネガルの商業的生産量の約半分はナッツとして、半分は落花生油として輸出されている。近代的な搾油産業も存在する。直接的食用および種子用のナッツ生産量は約5万トンである。ニジェールでは商業的生産量はセネガルに比べると、はるかに小さいが、自給自足生産量は相当ある。搾油産業も漸次発達しつつある。

オートボルダの生産は、ほとんどが国内消費向けであつて、商業生産は少ない。同じように、チャドおよび中部アフリカ共和国の生産もほとんどすべてが国内消費向けのものである。

スーダンの落花生の生産量は近年大巾に増加しており、輸出も非常に多い。南アフリカの生産量は1962-63年をピークに再び減少してきた。ヨンゴ(レオポールドビル)の落花生生産は主として国内消費用であるが、独立以後大巾な減産傾向を辿っている。

中共はインドに次ぐ世界第2位の落花生生産国であるが、世界市場に対する供給国としての重要性は小さい。ここ数年間、公式の生産統計は全く発表されていない。食用に直接消費される量が多く、多くのアジア諸国では生産量の多くが直接に食用に消費されている。しかし、ビルマでは搾油向け消費が可成り多い。アジアのほとんどの国では、落花生の生産は一般に上昇傾向にあり、とくに日本、カンボジア、ベトナム、台湾でこうした傾向が強い。

西半球における主要生産国である米国では、耕作地の割当制によつて作

地面積はほとんど変っていないが、収穫量は近年大巾に増加している。エーカー当りの収穫量が多く、1958年から1964年にかけて約33%も伸びている。米国では生産量の大部分は直接食用に供されるが、ピーナツ・バターの製造に使用されているが、近年に至つては搾油向けに回される量も多くなつており、またナツツや落花生油の輸出も増加している。1965-66年シーズンの暫定統計によると、生産は約112万トンと史上最高の収穫量に達する見込みである。

南米の主要生産国はブラジルとアルゼンチンで、この両国では落花生の栽培がますます重要になつてきている。いずれも生産量の大部分を搾油に向け、落花生油を輸出しているが、アルゼンチンではとくに1964-65年シーズンの生産量が伸びている。

### 3) ひまわり

ひまわりは油糧作物として、夏季に暑い気候の地域で栽培されている。ひまわりの種子はそのまま食用にもなるが、大半は食用油の生産に使用されている。食用油のうちでも、高級品は食卓用あるいは料理用に直接使用され、またマーガリンや合成料理用ヘツトの製造に用いられる。低級品は乾燥油として、あるいは石けんに使われる。ひまわりの種子の含油率は、10年ぐらい前までは20~32%であつたが、ソ連および東欧における品種の改良によつて、含油率は近年に至つて40%、あるいはそれ以上に高まつてきた。現在では世界の生産量の約80%は高含油率の品種とみられる。しかし、ひまわりの種子を油脂に換算する等価比率としては一般に35%という平均値が用いられているようである。

ひまわり(種子)の主要国別生産推移は、第4表の通りである。

(第4表) 主要国のひまわり生産量推移

(単位:千トン)

	1958	1959	1960	1961	1962	1963	1964	1965	1966
	-59	-60	-61	-62	-63	-64	-65	-66	-67
ソ 連	4,552	2,971	3,904	4,678	4,795	4,285	6,058	5,413	6,140
アルゼンチン	381	789	576	846	462	460	757	782	900 ~925
ルーマニア	282	522	513	474	449	506	518	564	671
ブルガリア	218	276	338	296	357	336	337	365	380
ユ ー ゴ	78	112	97	115	161	231	260	265	270
トルコ	93	126	121	95	60	87	163	160	210
ハンガリー	98	113	67	104	132	127	112	73	101
南アフリカ	98	88	109	95	97	77	73	100	...
チリ	54	50	31	32	40	45	47	50	...
ウルグアイ	47	71	96	81	87	63	39	99	...
全 世 界	5,977	5,188	5,929	6,896	6,820	6,435	8,565	8,075	9,080 ~9,105

(出所) Commonwealth Economic Committee, Vegetable Oils and Oilseeds

上段数字はOil World, Apr, 14, 1967



ひまわり（種子）の全世界生産量は1964-65年シーズンに前年比約30%増加して、827万トンとこれまでの最高水準に達した。これは主としてソ連の生産量が590万トンと記録的な水準に達したからであるが、このほかにもアルゼンチン、トルコ、ルーマニア、ユーゴなどの生産増加も寄与している。ここ10年間の推移をみても、ソ連および東欧諸国ではひまわりの栽培が大きく伸びており、ユーゴを含めてこれら共産圏諸国が全世界のひまわり（種子）生産量に占めるシェアは、1964-65年に約85%になつている。これに対して、ソ連に次ぐ世界第2位の生産国、アルゼンチンでは生産量の変動が激しいが、大きく伸びてはいない。1965-66年には、ソ連が多少減産になることによつて、世界の生産量は減少するとみられる。

ひまわりは、その主要生産国における主要食用植物油になつている。世界第1位の座を占めるソ連では、1954-55年に比較して、1964-65年の生産量は2倍以上になつており、1960-61年から1964-65年の期間についてみると、全世界の生産量に占めるソ連のシェアは69%に達している。ソ連では食用植物油としては綿実油も大きなウエイトを占めているが、ひまわり油に対する依存度が非常に高い。ソ連ではひまわりの栽培が大いに奨励されており、栽培面積も逐年増加し、1964-65年には1,139万エーカーになつている。1963-64年には、早ばつと夏季の異常な高温によつて生産量は50万トンの減産になつたが、1964-65年には作付面積が54万エーカー増加し、またエーカー当りの収穫量が30%余伸びて、約1,160ポンドの記録を出したこともあつて、生産量が590万トンの史上最高水準に達したものである。1965-66年の生産量は、作付が5%増加したにもかかわらず、540万トン程度に減少した模様である。

ひまわり（種子）は東欧においても主要油糧作物となつている。ブルガリアでは、生産量は1959-60年以降高水準を維持しており、ユーゴの生産量は1961-62年から1964-65年にかけて2倍以上になつている。ルーマニアでは1959-60年に、前年比2倍近くも生産量が増加したが、それ以後に弱含みの横バイといった推移を辿つている。

ハンガリアでは動物性油脂の供給が増加したために、1950年代初期に比べると生産量は少なくなつており、1962-63年以後減産傾向になつている。1965-66年シーズンについてみると、ユーゴ、ハンガリアでは減産、ルーマニア、ブルガリアでは増産となつている。

中近東ではトルコがひまわりを相当生産している。1961-62年から1963-64年までの3年間は、ベストの流行で減産が続いたが、1963-64年に回復し、1964-65年には前年比倍増の生産で史上最高水準に達した。

アルゼンチンは世界第2位のひまわり生産国であるが、シーズンによつて生産量の変動が大きい。1962-63年と1963-64年の2シーズンは、作付および収穫ともに減少したが、当局が1964-65年産のひまわりについて、支持価格をキンタル当り1,100ペソから1,400ペソに引き上げを発表したため、作付面積は1964-65年に290万エーカーに増加した（前年度は215万エーカー）。シーズン後期に早ばつに見舞われたが、エーカー当りの収穫量は増加し、生産量は74万5,000トンと1961-62年以来の最高水準に達した。1965-66年には作付面積も300万エーカーに増加し、洪水による被害もあつたが生産量は若干伸びた。

南米では、チリとウルグアイでもひまわりが栽培されている。チリでは

1960-61年と1961-62年が不作であつたが、それ以後増産傾向を示している。これに対してウルグアイでは1963-64年が不作であつたが、64-65年の生産はいつそう減少した。このため、ウルグアイは1965年に食用油を輸入しなければならなかつた。

アフリカでは主要ひまわり生産国は南アフリカであるが、近年減産傾向を辿っている。ほとんどが搾油用で、種子としては輸出していない。

#### 4) ひ ま

ひまは熱帯および亜熱帯地域に広く野生しているが、主要生産国では作物として栽培されている。ひまの実の含油率には差があるが、搾油率では重量で平均約45%になつている。ひまし油は高級潤滑油、石けん、塗料、ワニス、レジン、プラスチック、ナイロン、その他の工業製品、繊維染料などに用いられるほか、医療用にも使われている。しかし、もつとも重要な用途は、現在ではプラスチック、ナイロン、それに塗料用であろう。フランスおよびブラジルではナイロン11の生産に大量のひまし油が使われている。脱水ひまし油はすぐれた乾燥剤で、桐油に匹敵する。搾油かすは今まではもつばら肥料に使われてきたが、ブラジルで解毒実験が成功したので、家畜や家禽用の飼料にも安全に利用できるよつた。

世界のひま生産量は、過去10年間に40%伸びたが、1964-65年には主としてブラジルの生産量が30%ほど増加したこともあつて、66万トンとこれまでの最高を記録した。

米国農務省の推定では64年の生産量は史上最高で、81~82万トンとかなりのくいちがいがあるが、ひまの生産統計は、多くの生産国については信頼できる公武統計がないので正確に生産量を推定することが非常に困難であるという事情から、生産量を表示するものというより、一般的な

(第5表) 主要国のひま生産量推移

(単位:千トン)

	1958 -59	1959 -60	1960 -61	1961 -62	1962 -63	1963 -64	1964 -65	1965 -66	1966 -67
ブラジル	171	178	221	205	223 221	328 236	396 305	352	230
ソ連					32	36	54	63	72
インド	110	113	105	107	108 99	100 101	101 99	107	70
タイ	28	34	42	32	43 42	52 52	39 44	14	29
米 国	18	11	14	12	15 15	29 29	27 36	26	22
エクアドル	18	17	19	20	22 23	22 24	26 28	17	13
タンザニア	18	14	18	11	14 13	27 27	14 14	9	15
エチオピア	13	15	17	10	10 10	10 10	11 10	11	—
ルーマニア	15	16	26	20	11 11	14 14	13 13	—	—
バラグアイ	17	18	19	18	14 14	11 12	12 (15)	14	13
全 世 界	510	516	573	526	613 549	763 606	808 660	695	573

(出所) Commonwealth Economic Committee, Vegetable Oils and Oilseeds

上段数字は Foreign Agriculture Circular U.S.D.A

生産の推移を示すものとみななければならない。

しかし、1964年に最高記録を示したものの1965年にはブラジルの減産によつて、ここ数年来はじめて生産は減少し、1966年には中共およびソ連の増産によつて、再び増勢に転じた。これら生産の推定は、大抵の場合、輸出の数字に基いている。

世界第1位のひま生産国はブラジルであるが、その生産量は近年増加傾向をたどり、作付面積も相当に拡大し、1964年には天候条件が非常に良好であつたために新記録を樹立した。公式の収穫推計では30万5,000トンとなつているが、業界筋では実際の収穫量はこれより多いとみている。しかし65年には減産、さらに66年には北東部における降雨量が多かつたことおよびサンパウロ、パラナ地方の常備労働者並びに移住収穫労働者に対する他の作物（とくに大豆）の生産者側からの競争の結果、大巾に減少した。67年には前年の減産した水準からやや回復するものとみられるが65年の水準を越えることはないであろう。ブラジルではひまの生産量は全量が国内の製油工場で搾油される。ひまし油の国内消費量は年間2万トン程度で、ほとんどが輸出されている。

インドは世界で2番目の主要ひま生産国であるが、近年の収穫量はあまりふるわない。とくに1965-66年は、前年の水準よりも3分の1以上減少するという大減産であつた。これは作付面積の減少（1964-65年は110万エーカー、1965-66年は90万エーカー）と時期遅れの雨量不足が原因であつた。66-67年は10万トン台になるであろうとみこまれている。しかし、インドでは他の作物と混播しているひまが相当あり、この生産量については報告がなされていないので、実際の生産量は第5表の公式報告（政府推定）の数字より大きいと考えられ、少なくとも25%は高いものと業界筋は推定している。ひまの輸出は1951年以来禁止されており、全量がひまし油の原料とされている。かつてはひまし

油の全量が輸出され60年には6万トンを記録したが、その後国内需要が急増し66年には1,000トン程度にまで輸出は減少した。インドでは石けん、潤滑油などの工業用途の他に、食用油としても混合して用いることが増大している。これは、インドにおける食用油の価格がきわめて高いためとされているが、このひまし油の国内需要の増大によつて、ひまし油の価格も1964年の15.0セントから、65年17.6、66年には21.2セント（いずれもポンド当り、F.O.B. ボンベイ）とけたはずれに急騰した。

世界第3位の生産国はタイである。1963年にはこれまでの最高の生産を記録したが、64年には若干減産、65年には大減産となつた。この理由は63年の豊作以来価格が安くなつたためとされている。66年には前年よりは増産とみられるが、ピーク時の生産量にははるかに及ばない。収穫量は全量が輸出されているが、製油工場の建設が国内で進められている。

公式記録では、米國が第4位の生産国であるが、近年ソ連、中共の生産量が急激に増加し、66年にはソ連が7万2,000トンで既にインド、タイを押さえて第2位、中共も5万トン以上でインドに次ぐ生産国であると推定されている。ソ連の公式生産統計はここ数年間発表されていないが、66年には推定7万2,000トンに達し前年から1.4%増、栽培面積は過去3カ年間約42万エーカーを維持している。ソ連のひまし生産量は国内の必要量を充足し、輸入の必要性がなくなるものとみられている。また国内に溶剤による抽出プラントを建設し、ひまし搾油の歩留りを引上げる計画であると伝えられる。

中共の生産についても公式の数字は利用できないが、1964・65年

と輸出が増加し、66年には4万5,000トンの輸出が推定されることから、生産も伸びているのではないかとみられる。

米国は第4位の生産国であつたが、ソ連、中共などの進出によつて、66年には2万トン強で6位となつている。栽培地はほとんどテキサス州の高原地方で65年には5万エーカーであつたものが、66年には約4万2,000エーカーとなつている。生産量は全量国内で搾油されているが、米国は最大のひまし油輸入国、その大部分をブラジルから輸入している。

以上の国に次ぐ生産国は南米のエクアドル、パラグアイ及びアフリカのタンザニア、北米のメキシコなどでいずれも1万トン台の生産である。

エクアドルは政府の生産拡大策もあつて64年まで着実に増産を続けてきたが、65、66年と減産した。この減産はひまに代る綿花やコーヒーの方が農民にとって有利な作物となつたためである。全量が輸出に向けられているが国内搾油工場も建設されている。

パラグアイも全量を輸出しており、1950年代より飛躍的に生産量は伸びたものの、ここ数年は1万トンから1万5千トンの間を増減しており、目立つた動きはない。

アフリカでは多くの国が比較的少量のひまを換金作物として栽培している。タンザニアはアフリカ第1の生産国で、全量を輸出してきたが、現在搾油工場の建設が進められており、これが完成すれば国内のひま生産量は全量がひまし油に加工されることになる。

ひまはエチオピア原産の植物で、この地方の品種は品質の良い種を多量

に産出するが、増産奨励を農民に対してほとんど行なっていない。ほとんど全部が野性種から採取されており、耕地に植付けたものからではない。

スーダンでひまの栽培が行なわれるようになつたのは、比較的最近のことであるが、将来の見通しは明るいと思われる。

欧州では、ひまの生産はほとんど東欧、とくにルーマニアに集中しており、その他ユーゴで少量生産されている。

メキシコでは、ひまの栽培拡大にほとんど関心がなく、過去3年間9千トン前後となつている。収穫物に対する保証価格がなく、ひまを栽培しても利益がないという主張がある。

## 5) 胡 麻

胡麻は一年生の植物で、熱帯、亜熱帯および温帯地域に広く生育している。胡麻が栽培されているのは、機械による収穫が困難であるところから、小農制の農業国に限られている。胡麻は土壌が不毛であつても生育するので、比較的やせた土地で栽培される例が多い。胡麻はアジアおよびアフリカでは広く菓子や料理の香味料として使用され、もつばら直接消費用に栽培している国もある。高品質の胡麻油はオリーブ油とほとんど同じような目的に使われ、また医薬用に利用されることもある。西欧諸国では、料理用ヘット、マーガリン、サラダ・オイルの製造にも使われている。胡麻の含油率は約50%であるが、商業的搾油率は搾油方法の能率によつて35~50%となつている。胡麻の種類は白ゴマ、黒ゴマ、金ゴマなどあるが白ゴマの含油率が最も高く(55%)最も上等とされている。

全世界の胡麻生産量は、1963-64年には前年比ほぼ横進いであつたが、1964-65年シーズン(7月から翌年6月まで)は大巾に増加



して、160万トンと新記録を達成した。これは1954-55年以來の最高水準である。主要生産国のほとんど、とくにインド、中共、スーダン、ビルマなどの生産増加が大きく寄与している。しかし、メキシコ、トルコ、ギリシャなどは減産となった。

主要生産国の胡麻生産量推移はオ6表のようになっている。

〔オ6表〕 主要生産国別胡麻生産量推移

(単位：千トン)

	1958 — 59	1959 — 60	1960 — 61	1961 — 62	1962 — 63	1963 — 64	1964 — 65	1965 — 66	1966 — 67
インド	499	364	313	366	464 457	439 432	493 459	407	450
中共州	340	380	350	320	330 335	315 335	290 360	325	310
スーダン	152	176	125	228	142 140	174 171	184 198	149	160
メキシコ	115	123	127	144	156 153	169 167	172 158	180	190
ビルマ	52	66	64	75	85 84	54 52	100 70	62	...
コロンビア	21	18	20	22	20 21	35 34	49 (48)	71	...
エチオピア	32	36	37	30	33 33	30 33	33 (33)	33	33
トルコ	47	46	43	43	41 40	40 39	34 33	34	32
ベネズエラ	19	16	24	28	28 30	31 46	47 46	54	65
パキスタン	34	34	31	37	35 34	34 33	32 31	32	...
ウガンダ	33	30	(29)	(32)	28 (28)	30 (30)	30 (30)	30	...
ナイジェリア	16	21	28	21	21 21	20 20	24 24	24	16
エジプト	14	15	15	10	17 17	26 25	23 23	22	...
タイ	17	17	18	12	16 16	16 16	13 17	17	...
全世界	1,497	1,455	1,329	1,472	1,535 1,509	1,535 1,532	1,635 1,633	1,560	1,630

※ 推定値

(出所) Commonwealth Economic Committee,

Vegetable Oils and Oilseeds

上段数字は Oil world March 31, 1967

世界才1位の胡麻生産国はインドである。胡麻はインドでは重要な油料作物であるが、一般に他の油料作物には不適なやせた土地で栽培されているので、エーカー当りの収穫量は比較的少ない。しかし、インド政府当局では相当大掛りな胡麻栽培の拡張を計画している模様である。1964年-65年の収穫高は、作付面積が増加したこと、天候が良好であったことから、1958-59年以来最高の実績を挙げた。生産高の約20%は直接に食料として消費され、残りは胡麻油の製造に使用され、油として国内で消費されている。

中共の生産高については近年公式の数字が発表されていないが、中共がインドに次ぐ大手の胡麻生産国であることは間違いないようである。近年中共の胡麻生産量は横這いを続けていたようであるが、1964-65年には若干の増産になったものと思われる。

アジアでは中共に次いでビルマが主要な胡麻生産国である。1963-64年には不作であったが、1964-65年には相当の増産になった。中共においてもビルマにおいても、胡麻は一部が直接に消費されるが、ほとんどは食用油として消費されている。タイ、エジプト、トルコなど他のアジアおよび中近東諸国では主として直接に食用に供するために、胡麻を栽培している。トルコでは生産量の一部が胡麻油に振り向けられている。

世界才3位の胡麻生産国は、アフリカの Sudan である。Sudan では直接食用消費と輸出向けに栽培されている。Sudan は世界最大の胡麻輸出国である。生産量は1964-65年に再び増加した。エチオピアの生産量も可成りあるが、アフリカではこのほかにエジプト、オートボルタ、チャド、中央アフリカ共和国、ソマリア、コンゴ（レオポールドビル）などでも胡麻が栽培されている。エチオピアとエジプトは可成りの輸出をする年もあるが、それ以外の国では主として国内消費向けに栽培しているに過ぎない。

パキスタンの胡麻栽培量は、ほとんどが国内で消費されている。生産量

は1961-62年をピークに減少傾向を辿っている。しかし、作付面積はそれほど少なくなっていない。

ナイジェリアでは胡麻は輸出向けに栽培されているが、1964-65年の生産量はこゝ4年間の最高を記録した。タンザニア、タンガニカでは生産量はほとんど国内で消費されている。

西半球では、胡麻が栽培されているのは主として中米と南米北部である。主要生産国はメキシコで、収穫量は全般に増加している。しかし、1964-65年には農民が小麦やとうもろこしの栽培に切替えて、胡麻の作付面積を少なくしたので、胡麻の生産量は減少した。生産のほとんど全量は搾油用である。ニカラグアでは主として輸出向けに胡麻を栽培しているが綿花の作付面積が増加したことに反比例して、胡麻の生産量は減少している。しかし、コロンビアとベネズエラでは価格の騰貴が生産を剌戟しており、とくにコロンビアでは1964-65年の生産量はこれまでにない増産になった模様である。

欧州では胡麻が相当量生産されているのはギリシャだけであるが、1963-64年には可成りの増産になったにもかかわらず、1964-65年には逆に減産になった。

#### 6) 油 や し

アフリカ産油やし (*Elaeis guineensis*) は西アフリカ原産と考えられているが、西アフリカではガンビアからアンゴラにかけての沿岸に巾200~300マイルのベルト状に生育している。しかし、やしは東南アジアでも大規模に、商業的に栽培されている。油やしの実は3つの部分から成っている。即ち、外側の果肉(中果皮)、核殻(内果皮)、それに核(仁ともいう)がそれである。やし油は中果皮から抽出されるが、やし核

油（パーム核油）は内果皮を除去した後、核から抽出される。天然のアフリカのやし林では、もっとも一般的にみられるやしの実はデュラと呼ばれる種類のもの、中果皮は薄く、内果皮は厚く、核は大きい。マラヤおよびインドネシアでは、一般に栽培されているやしはデリと呼ばれる種類のものであるが、起原的にはデュラ種である。果実は大きく、西アフリカ産のデュラに比べると中果皮の割合ははるかに高い。内果皮の薄いテネラはアフリカ産デュラまたはデリ・デュラを内果皮の少ないピンフェラとかけ合わせてつくられる。大規模なやし農園で植樹または植替えを行なう場合には、一般にテネラ種のやしが使われている。やし油の抽出はやしの栽培場所で行なわなければならないが、世界のやし核の商業的供給は、そのほとんどが英国、その他の西欧輸入国で加工されている。近代的な欧州の工場におけるやし核からの商業的抽油率は一般に46～48%である。やし油とやし核油は成分や性質が非常に異なるが、最終的用途が同じである場合もある。やし核油は「硬質」でココやし油に似ており、食用油脂および石けんの製造に広く使われている。やし油は主として食用油脂の製造に使われている。石けんの製造のような工業用に使われる割合は小さくなっている。

油やしは樹木の作物であるため、その収穫量は年によって大きな変動はなく、また短期に大巾な増産を計ることはできない。反対に果実の収穫を怠らない限り、すぐに減産になることはない。それにもかかわらず、有利な気候条件にある近代的農園に植樹し、適当に栽培すれば、エーカー当りの収穫量は他の油料作物より高い（やし油で1.5トンを超える）非常に有利な作物である。

世界のやし油およびやし核生産量は1963年に増加したが、この傾向は1964年にも続いた。しかし、この傾向はやし核にみられるところで

やし油はほとんど変動がなかった。

主要国別のやし核およびやし油の商業的生産推移は、オ7表の通りである。

〔オ7表〕 主要国のやし核、やし油の商業的生産量推移

(単位:千トン)

	1958	1959	1960	1961	1962	1963	1964
やし核							
ナイジェリア	455	427	422	430	358	414	401
コンゴ(レオポルドビル)	142	59	(140)	(125)	(115)	(90)	(120)
ダホメー	59	43	60	48	43	50	55
シエラ・レオネ	55	58	56	60	43	53	53
インドネシア	35	33	32	34	32	32	34
マラヤ	18	19	24	24	28	30	30
メキシコ	21	23	22	22	22	(24)	(25)
アンゴラ	13	7	9	16	17	21	20
トーゴ	13	9	15	12	11	14	15
東カメルーン	14	22	15	15	12	15	14
全世界	929	905	888	877	789	824	836
やし油							
コンゴ(レオポルドビル)	222	241	(230)	(220)	(225)	(220)	(205)
インドネシア	145	135	139	143	139	146	158
ナイジェリア	177	183	182	164	121	140	139
マラヤ	70	72	90	93	106	124	120
全世界	668	682	700	682	650	696	698

- (注) 1. 商業的仕入れが不明の場合には輸出統計に基づいて推計
2. やし油の項におけるナイジェリアの数字は、上段がプランテーションの生産量、下段が零細生産者からの仕入量を示す。
3. やし核生産量の公式数字は、1960年以前はアフリカ諸国の生産報告が内輸であったために、輸出より少ない結果になっている。

(出所) Commonwealth Economic Commission,  
Vegetable Oils and Oilseeds

1964年にやし核の生産が伸びたのは、主としてコンゴの生産が増加したためであるが、ダホメー、象牙海岸、インドネシアの増産も寄与している。やし油の生産量は、インドネシア、その他の国で増産になった反面コンゴおよびマラヤでは可成りの減産になったため、全体としては全年比微増にとどまった。1965年については、やし核の生産はナイジェリアの増産によって相当大巾に伸びたが、やし油の生産はマラヤおよびナイジェリアでの増産がコンゴでの減産によって相殺され、ほとんど変化がなかった。

ナイジェリアでは、やし核およびやし油は東部、西部および中西部ナイジェリアで生産されている。やし核はこれら3地域全体にみられるが、やし油の商業的仕入れはほとんど東部ナイジェリアで行なわれている。生産量の大部分は野生樹または半栽培樹によるもので、プランテーションによるものは少ない。商業的に生産されるやし油は、一部が国内で石けん製造用に使われるほかは、ほとんど輸出されている。しかし、商業的生産のほかは、自家消費されるやし油の生産は多量で、かつ増加傾向を辿っている模様である。近年、政府の買入れが減少しているのは、一部は少なくとも国内消費需要の伸びによるものとみられる。やし核の買入れは過去10年

間減少傾向を辿っているが、これは価格が下がっているからだけでなく、やしの実を収集し、破砕するのは伝統的に婦人労働者がこれを担当していたが、こうした労働力の供給が減少しているからである。現在のところ、やし核は大量に輸出されているが、これを加工する工場の建設が進められており、数年後にはやし核は全部国内で搾油されることになるものとみられる。やし油およびやし核の生産者価格は1964年に引上げられた。特等やし油はトン当たり41ポンドから42ポンドに、やし核は同じく27ポンドから28ポンドになったが、いずれも生産は減少している。しかし、1965年には価格が据置かれたにもかかわらず、暫定統計によると、やし核は44万9,000トンに、やし油は16万4,200トンに増産となっている。

過去10年間、油やしの生産がもっとも急激に増加したのはマラヤで、1957年から1964年までの間に生産は倍増している。生産はほとんどすべてエステート（農園）によるものであるが、零細栽培業者の計画も最近スタートした。作付面積は、とくに1962年から1964年にかけて大巾に増加したが、さらに栽培面積は大きくなる。やし油の生産が大部分で、やし核の生産は比較的少なく、エーカー当りの平均収穫高は1964年に2,076ポンドとなっている。しかし、エーカー当りの収穫高が1.5トンの新しいやし樹が植えられ、これが実を結ぶようになれば、この単位収穫高は増加するだろう。1964年にマラヤのやし油生産量が減少したのは自然的な要因によるものではなく、大手のエステートの1つでストライキが長びいたためである。1965年にはマラヤのやし油は増産になり、生産量は14万6,000トンに達した模様である。

コンゴの油やし生産量については、1959年以来公式の推定は行なわれていないが、政治的、経済的、軍事的な混乱によって、生産は減少し、とくにやし核の生産は減少した。コンゴの油やし産業は一般に高度の発展

を遂げており、大規模なプランテーションが近代的な製油工場に原料を供給する体制がとられている。また半野生やし林でとれるやしの実の処理も行なわれている。やし核搾油工場にも大きいものがある。全般的にみて、コンゴのやし油生産量は1963年まではどうやら維持されてきたが、1964年にはいくつかの主要な油やし地域が反乱軍の手に落ちたため、生産は可成り大巾に減少したものとみられる。やし核の生産は、収集および破砕に大量の労働力を必要とするため、どのくらい労働者を集められるかに左右される。従って、やし油に比べると、やし核油は値段も安いこともあって、減産の度合いは大きかった。しかし、輸出統計から判断すると、1964年にはやし核の生産はかなり回復した模様である。1965年の生産量はいずれも減少しているとみられる。

1964年のやし油生産状況における1つの際立った特徴は、インドネシアの生産量が1957年以来の最高水準を記録したことである。インドネシアでは、戦後政治的不安もあって、エステートの植替え、あるいは維持が十分に行なわれず、そのため生産は減少気味であった。

旧フランス領西アフリカでも若干の商業的やし核生産が行なわれており、ダホメーが主要生産国になっている。しかし、やし油の商業生産量は少ない。自家消費率が高いからである。やし核の搾油が行なわれているのは東カメルーン（生産物の一部は輸出している）とダホメー（ここでは1965年から大きな搾油工場が操業している）だけである。ダホメーでは、1964年にはやし油およびやし核油のいずれもが増産になった。

旧スペイン領では、アンゴラの生産が近年やし油、やし核油ともに増加している。



中南米では唯一の主要生産国はメキシコである。しかし、やし油（これについては生産統計は発表されていない）およびやし核油は全部国内で消費されている。このほかコスタリカの生産はここ数年間かなり伸びてきているようである。アフリカ種の油やしはブラジルでも生育しており、生産量の詳細は不明であるが、1963年のやし油とやし核油の合計生産量は5,300トン程度とみられる。パナマ、エクアドル、ベネズエラ、コロンビアなどにも小規模なプランテーションが存在するが、これらの国々の生産量はいずれも小さい。しかし、コロンビアでは急ビッチの増産が見込まれている。

#### 7) な た ね

油料作物としてのなたねの栽培は、ほとんどアジアおよび欧州の温帯地域に限られている。なたねは伝統的に、西欧のもっとも重要な油料作物であるが、潤滑油および灯油に鉱物油が使われるようになるにつれて、欧州での栽培は1860年以来急減した。才2次世界大戦後は、いくつかの欧州諸国で何らかの国家の保護政策が加えられ、なたねの栽培は恒常的に行なわれるようになっていく。なたねの主要栽培国は、欧州ではフランス、ドイツ、スウェーデン、デンマーク、ポーランドである。なたね油は主として食用に使われているが、北米では若干の偏見がみられる。商業的搾油率は、たとえばデンマークの例にみると、近代工場では40%にもなるが、インドではそれより低率で、平均33%である。

1964～65年の世界のなたね生産量は、カナダ、西欧諸国、インドでの増産によって440万トンという記録的水準に達した。しかし、1965～66年にはさらに増産になり、全世界で490万トンと前年の記録を更新することになる模様である。

主要生産国別のなたね生産量推移は、才8表の通りである。

〔才8表〕 主要国別なたね生産量推移

(単位：千トン)

	1958 - 59	1959 - 60	1960 - 61	1961 - 62	1962 - 63	1963 - 64	1964 - 65
インド	1,026	1,046	1,326	1,325	1,274	888	1,353
中 共	1,065	(935)	(885)	(835)	(950)	(1,020)	(1,100)
パキスタン	333	318	308	305	357	297	302
カナダ	173	79	248	250	131	187	295
ポーランド	79	129	144	253	355	223	264
フランス	193	129	82	105	156	131	234
スウェーデン※	130	178	54	116	142	101	176
東ドイツ	126	186	180	171	163	126	173
日 本	263	258	259	271	243	107	132
西ドイツ	57	57	68	73	114	94	107
チ リ	18	33	35	28	50	50	56
デンマーク	8	11	13	27	51	26	50
チ エ コ	47	72	54	83	51	40	45
全 世 界	3,606	3,521	3,740	3,949	4,126	3,378	4,403

※：水分18%を含む

(出所) Commonwealth Economic Committee,  
Vegetable Oils and Oilseeds

最大のなたね生産国はインドで、1963-64年の不作を除けば、毎年豊作を続けている。1964-65年の生産量は約140万トンで、これまでの最高である。インドでは、パキスタンと同じように、なたねは搾

油用（食用油）で、外国に輸出されることはない。全部国内消費用である。

これに対して、カナダではもっぱら輸出向けになたねを栽培しており、国内で搾油用に使われるのは生産量の一部に過ぎない。輸出価格の騰貴に刺戟されて、なたねの作付面積は1962-63年37.1万エーカー、63-64年47.8万エーカー、64-65年79.1万エーカーと大巾に増加している。64-65年の実績は、1960-61年の76.3万エーカーの記録を上回るものである。生産量はエーカー当りの収穫が上昇したこともあって、29万5,000トンの新記録をたてた。1964年後半から植物油および油料作物の需給状態が逼迫し、価格も強含みで推移したために、取引も活潑に行なわれ、シーズン末の在庫は非常に少なかった。

1965年の作柄については、作付面積が143.5万エーカーと大巾に増加し、生産量は実に50万4,000トンに達した。

中共は世界才2位のなたね生産国とみられるが、ここ数年間公式の収穫推定量は全く発表されていない。1960-61年と1961-62年には不作であったが、1963-64年、1964-65年には回復した模様である。中共では生産量のほとんど全ては国内搾油用で、輸出は非常に少ない。

アジアでは、このほかのなたね主要生産国は日本であるが、生産は減少傾向を辿っている。

西欧では、作付面積の減少と霜の被害が重なって、1963-64年の生産量は25%と大巾に減少したが、1964-65年には天候に恵まれて、生産量も著しく回復した。フランス、西ドイツ、スウェーデンなど西欧の主要なたね栽培国では、なたね価格は公式に支持されており、これが長

期的に生産の刺激要因になっていることは間違いない。さらに、デンマークと西ドイツでは、マーガリン業界は最低量のなたね油を使うことを義務づけられている。1964-65年に作付面積が上げられたのはフランス、西ドイツ、スウェーデン、デンマークである。天候も良好で、とくにフランスではキンタル当り80フランの支持価格もあって、前年比79%アップの増産を記録した。西ドイツでは支持価格はメートル、トン当り660マルクに定められているが、生産量は作付面積の増加も反映して伸びた。しかし、1962-63年の水準を上回ることではできなかった。スウェーデンの1964-65年の生産量は、1959-60年の水準に匹敵するもので、前年比では74%の増産に当たる。1964-65年産のなたねについては、支持価格がキンタル当り80クローネに引下げられ、これが作付面積の増加にブレーキをかけたものの、前年度の14万エーカーから20万エーカーに大巾な伸びを記録した。

スウェーデン、デンマーク、フランスなどは収穫量が多い年にはなたねの輸出国になるが、ドイツは一般になたねを輸入し、なたね油を輸出している。1965-66年の西欧の主要国の生産量は、西ドイツ10万5,000トン、フランス33万3,000トン、スウェーデン20万7,000トン、デンマーク4万9,000トンと、総体的に大巾に増加している。

東欧ではポーランドが主要なたね生産国で、生産量は近年急激に増加している。1963-64年には減産になったが、1964-65年には可成り回復し、1965-66年には一躍49万6,000トンの生産記録をたてた。東ドイツおよびチェッコでも1964-65年には増産を記録している。

中南米では、チリの生産量が着実に増加しており、国内で搾油用に使わ

れている。このほかアルゼンチン、メキシコなどでも少量の生産が行なわれている。

## 才二節 今後の生産見通し

### 1) 落花生

落花生の生産は、世界的にみて1966年、67年と横這いの水準を続けており、作付面積からみても今後それ程大きな変化はないものとみられる。

しかし、個別にみて作付面積が最近増加傾向を辿っているのはインド、ビルマ、中共、インドネシア、アルゼンチン、セネガルなど、横這いとみられるのはナイジェリア、ブラジル、米国などである。

### 2) ひまわり

ひまわりは1964年以後かなり増産になっており、1967年の予測生産量は64年比35%程度の伸びを記録するとみられる。これは今までの新記録であるが、ソ連における作付面積と歩留りの増加による大豊作が大きく影響している。アルゼンチン、チリー、ウルグアイ、南アフリカなどでも相当の増産が期待されている。

作付面積の推移をみると、伸び率が大きいのはソ連、ルーマニアなどで、アルゼンチンは1963年に相当大巾に減少したが、その後再び増加している。チリー、ウルグアイなどは長期的に減少傾向を辿っている。

### 3) ひま

ひまの生産は世界的にみて、1964年をピークに減少気味の横這い傾向を辿っている。しかし、ブラジルではひまし油は重要な輸出品目であって、今後も着実に増産を続けるものとみられる。タイの生産も伸びている。その他の国については、ほぼ横這いの生産傾向が予想される。

### 4) 胡麻

胡麻の生産は1961年以後一貫して増産傾向を辿っていたが、1966年に減産になった。しかし、1967年にはインド、スーダン、メキシコなどの増産によって再び記録を更新するものとみられる。作付面積は世界的に増加の一途を辿っており、インド、ビルマ、メキシコ、スーダン、ベネズエラなどはその傾向が強い。反面、中共、トルコ、タイなどは減少傾向にある。

### 5) 油やし

やし核についてみても、世界的な生産量は1961年以後余り変動はない。やし核は、主要生産国の中ではコンゴ(レオポールドビル)を除いて、ほとんど全量を輸出しており、少なくとも商業生産量は輸入国側におけるコブラあるいはココやしとの代替需要の関係などで決まってくる。今後の生産量の推移は、現地における搾油産業の発達、特惠問題のゆくえんなどによって左右されるであろうが、当面それほど大きな変化は生じないとみられる。

### 6) なたね

なたねの世界生産量は1963年を底に、急ピッチで伸びてきている。1966年には水分不足のためにインドのなたね生産は大減産になったが、67年には回復が期待されている。なたねは近年比較的高価で、需要が旺盛であるため、カナダ、フランス、スウェーデン、デンマーク、西ドイツなど主要輸出国は、なたねの栽培にいっそう力を入れるものとみられる。

作付面積をみると、カナダ、デンマーク、チリー、中共、ポーランドなどが過去10年間に大巾に増加している。パキスタン、フランス、日本、東ドイツなどでは減少傾向がみられる。

### 第三章 世界の流通状況

#### 第一節 国別、品目別国内消費、輸出入統計

##### 1) 落花生

##### ① 主要国別国内消費<sup>※</sup>および輸出統計<sup>※※</sup>

※ 国内消費は(生産-輸出)によって推定した(以下同じ)。

※※ 数量単位は殻なし重量千トン。

〔落花生主要生産国〕

	1958	1959	1960	1961	1962	1963	1964
(インド)							
生産	4,966	4,489	4,736	4,915	4,745	5,133	6,078
輸出	2	18	24	21	25	22	20
国内消費	4,964	4,471	4,712	4,894	4,720	5,111	6,058
(中 共)							
生産	2,760	2,230	2,230	2,130	2,350	2,500	2,700
輸出	65	49	19	4	4	6	25
国内消費	2,695	2,181	2,211	2,126	2,346	2,494	2,675
(ナイジェリア)							
生産	762	636	884	979	1,245	1,124	970
輸出	359	348	232	336	371	430	381
国内消費	403	288	652	643	874	694	589
(米 国)							
生産	810	709	796	778	808	903	984
輸出	9	16	18	13	6	12	27
国内消費	801	693	778	765	802	891	957
(セネガル)							
生産	664	707	800	888	746	780	849
輸出	227	198	174	186	190	141	147
国内消費	437	509	626	702	556	639	702

※ 1958 - 1960の3年間はマリ共和国の分が合算されている。



〔主要輸出国〕

	1958,	1959,	1960,	1961,	1962,	1963,	1964,	1965,	1966,
ナイジェリア	513	497	332	494	530	624 614	553 544	520	582
セネガル	324	283	249	266	272	201	210		
スーダン	61	64	66	84	118	116 116	152 153	122	100
ニジェール	86	52	50	66	71	90	91		
南アフリカ	25	41	46	65	49	75 74	73 71	119	15
世界計	1359	1238	1029	1308	1390	1458	1411	1299	1411

注) 重量単位は殻つき重量千トン。

殻なし重量は殻つき重量の70%。

※ 1958-1960の3年間の数字にはマリ共和国の分が含まれている。

(上段数字は1967, 国際搾油業者大会における報告)

② 主要国別輸入統計

	1958,	1959,	1960,	1961,	1962,	1963,	1964,
フランス	405	414	433	487	454	528	433
英国	210	232	132	163	212	195	147
イタリア	87	102	56	72	80	175	128
スイス	89	66	51	89	73	65	75
西ドイツ	95	71	56	82	109	28	46
ベルギー	57	67	25	59	74	61	72
ポルトガル	37	37	37	49	38	76	56
世界計	1,272	1,260	1,014	1,275	1,372	1,428	1,315

注) 重量単位は殻つき重量千トン。

2) ひまわり

① 主要国別国内消費および輸出統計(単位:千トン)

{ 主要生産国 }

	1958	1959	1960	1961	1962	1963	1964
(ソ連)							
生産	4552	2971	3904	4678	4719	4217	5895
輸出	45	61	73	83	107	97	107
国内消費	4507	2910	3851	4595	4612	4120	5788
(アルゼンチン)							
生産	381	789	576	846	455	453	745
輸出	-	-	-	-	-	-	-
国内消費	381	789	576	846	455	453	745
(ルーマニア)							
生産	282	522	513	474	443	498	510
輸出	-	-	20	45	10	10	10
国内消費	282	522	493	429	433	488	500
(ブルガリア)							
生産	218	276	338	296	348	331	332
輸出	7	47	81	43	91	32	110
国内消費	211	219	257	253	257	299	222
(ユーゴ)							
生産	78	112	97	115	158	227	256
輸出	-	4	3	1	1	2	5
国内消費	78	108	94	114	157	225	251

〔主要輸出国〕

	1958	1959	1960	1961	1962	1963	1964	1965	1966	1967
ブルガリア	7	47	81	43	11	32	110	91.5	100	100
ソ 連	45	61	73	83	107	97	107	83.7	100	250
ハンガリー	10	8	8	6	15	16	14	10.4	13.7	15.0
フランス	-	-	-	-	-	1	14	—	—	—
ルーマニア	-	-	20	45	10	10	10	35	60	70
タンザニア	12	6	12	11	12	7	10	6.9	6.5	8.0
ユ ー ゴ	-	4	3	1	1	2	5	8.9	5	8
世界計	95	174	221	202	254	180	201	253.5	306.0	475.0

(65~67年はOil World Apr 14, 1967)

② 主要国別輸入統計

(単位：千トン)

	1958,	1959,	1960,	1961,	1962,	1963,	1964,
東ドイツ	24	28	43	43	46	67	78
イタリア	2	3	53	92	32	61	66
チェッコ	28	36	37	46	65	32	32
西ドイツ	19	23	22	23	20	30	29
オーストリア	3	2	3	3	4	5	4
米 国	4	4	4	5	9	7	3
ベルギー	3	2	3	3	4	5	4
世界計	99	125	207	246	216	227	218

3) ひ ま

① 主要国別国内消費および輸出統計

[ 主要生産国 ]

	1958	1959	1960	1961	1962	1963	1964
( ブラジル )							
生産	171	178	221	205	221	236	305
輸出	25	10	-	-	-	-	-
国内消費	146	168	221	205	221	236	305
( インド )							
生産	110	113	105	107	99	101	99
輸出	-	-	-	-	-	-	-
国内消費	110	113	105	107	99	101	99
( タイ )							
生産	28	34	42	32	42	52	44
輸出	15	31	24	32	53	39	36
国内消費	13	3	18	0	11	13	8
( 米 国 )							
生産	18	11	14	12	15	29	36
輸出	-	-	-	-	-	-	-
国内消費	18	11	14	12	15	29	36
( エクアドル )							
生産	18	17	19	20	23	24	28
輸出	9	9	10	18	20	20	26
国内消費	9	8	9	2	3	4	2

〔主要輸出国〕

	1958	1959	1960	1961	1962	1963	1964	1965	1966
タイ	15	31	24	32	53	40 39	16 36	28	46
エクアドル	9	9	10	18	20	20	26 26	16	12
タンザニア	18	14	18	11	13	27 27	14 14	9	17
中共	12	11	16	1	2	9 8	12 12	15	58
パラグアイ	3	5	5	11	13	11	12 12	14	13
エチオピア	3	3	4	4	7	7 7	7 7	7	7
ケニヤ	7	4	3	3	4	7 7	5 5	5	6
世界計	123	108	121	105	144	154	130	106	158

(上段数字は Foreign Agriculture Circular Feb. 1967)

② 主要国別輸入統計

	1958	1959	1960	1961	1962	1963	1964
日本	21	27	27	32	35	37	34
西ドイツ	20	21	28	22	26	24	32
フランス	21	16	25	10	26	31	25
英国	14	12	9	11	21	31	19
イタリア	7	4	10	9	9	11	8
世界計	115	112	131	102	146	148	124

4) 胡 麻

① 主要国別国内消費および輸出統計(単位:千トン)

[主要生産国]

	1958	1959	1960	1961	1962	1963	1964
(インド)							
生産	499	364	313	366	457	432	459
輸出	-	-	-	-	-	2	-
国内消費	499	364	313	366	457	430	459
(中共)							
生産	340	380	350	320	335	335	360
輸出	11	10	8	4	2	2	1
国内消費	329	370	342	316	333	333	359
(スーダン)							
生産	152	176	125	228	140	171	198
輸出	29	44	75	62	76	69	100
国内消費	123	132	50	166	64	102	98
(メキシコ)							
生産	115	123	127	144	153	167	158
輸出	-	-	-	-	2	22	2
国内消費	115	123	127	144	151	145	156
(ビルマ)							
生産	52	66	64	75	84	52	70
輸出	-	-	-	-	-	-	-
国内消費	52	66	64	75	84	52	70

〔主要輸出国〕

	1958	1959	1960	1961	1962	1963	1964	1965	1966
スーダン	29	44	75	62	76	70 69	101 100	69	65
ナイジェリア	12	18	27	21	24	16 15	18 18	21	25
エチオピア	2	2	3	4	9	8	14		
タンザニア	8	11	11	12	8	9	7		
ニカラグア	6	9	9	8	6	6 6	6 6	6	5
中 国	-	-	-	-	-	2	1	4	3
世界計	95	116	153	145	176	163 168	173 181	143	140

(上段数字は国際持油業者大会報告による)

② 主要国別輸入統計

	1958	1959	1960	1961	1962	1963	1964
日 本	17	27	27	22	28	32	33
イタリア	17	19	25	19	20	32	26
ベネズエラ	11	10	32	16	21	14	20
米 国	7	6	8	10	9	11	11
ベルギー	6	5	4	4	4	6	6
世界計	102	113	151	137	154	153	154

5) 油やし(やし核)

① 主要国別国内消費および輸出統計(単位:千トン)

[主要生産国]

	1958	1959	1960	1961	1962	1963	1964
(ナイジェリア)							
生産	455	427	422	430	358	414	401
輸出	441	430	418	411	367	398	394
国内消費	14	- 3	4	19	- 9	16	7
(コンゴ)							
生産	142	159	140	125	115	90	120
輸出	38	39	20	13	19	3	1
国内消費	104	120	120	112	96	87	119
(ダホメー)							
生産	59	43	60	48	43	50	55
輸出	59	43	60	48	13	50	55
国内消費	-	-	-	-	-	-	-
(シエラ・レオネ)							
生産	55	58	56	60	63	53	53
輸出	55	58	55	58	61	53	53
国内消費	-	-	1	2	2	-	-
(インドネシア)							
生産	35	33	32	34	32	32	34
輸出	35	32	33	32	31	31	30
国内消費	-	1	- 1	2	1	1	4



[ 主要輸出国 ]

	1958	1959	1960	1961	1962	1963	1964	1965
ナイジェリア*	441	430	424.9 418	417.2 411	372.5 367	404.7 398	400.5 394	422.2
ダホメー	5.9	43	61.3 60	48.5 48	43.9 43	50.6 50	56.2 55	36.7
シエラレオネ	55	58	55.4 55	58.7 58	62.0 61	53.6 53	53.0 53	49.8
インドネシア	35	32	35.5 33	32.6 32	31.1 31	31.3 31	33.0 30	27.4
アンゴラ	13	7	52 5	102 10	11.6 11	180 18	16.7 16	14.3
東カメルーン	13	22	15.3 15	14.6 14	12.0 12	14.6 14	13.8 14	18.5
ギニア	19	23	23.0 23	18.7 18	20.2 20	21.0 23	23.0 14	14.2
世界計	780	756	725 736	685 706	635 657	660 678	655 653	629

\* 1960年10月以前については、西カメルーンの分を含んで  
る。

② 主要国別輸入統計(単位:千トン)

	1958	1959	1960	1961	1962	1963	1964	1965
英 国	273	234	240.7 237	227.9 225	212.1 209	211.0 208	194.1 191	207.0
オランダ	132	153	121.9 120	143.0 141	130.5 128	127.5 125	134.5 132	112.7
西ドイツ	114	131	155.0 153	127.8 126	124.1 122	122.4 127	131.1 129	125.9
フランス	106	81	95.0 94	82.6 81	82.1 81	78.9 78	89.9 88	66.3
日 本	32	33	30.4 30	26.3 26	29.0 28	25.8 25	25.3 25	22.9
ベルギー	29	31	23.1 23	23.3 23	32.0 32	20.6 20	24.7 24	29.6
ポルトガル	27	24	17.2 17	15.2 15	16.9 17	16.0 16	20.6 20	16.8
世界計	765	746	700 736	658	643 669	626 648	640 658	594

(上段数字はFAO Monthly Bulletin of Agricultural  
Economics and Statistics, Vol16 Jan. 1967)

6) な た ね

① 主要国別国内消費および輸出統計(単位:千トン)

[主要生産国]

	1958	1959	1960	1961	1962	1963	1964
(インド)							
生産	1,026	1,046	1,326	1,325	1,274	888	1,353
輸出	-	-	-	-	-	-	-
国内消費	1,026	1,046	1,326	1,325	1,274	888	1,353
(中共)							
生産	1,065	935	885	835	950	1,020	1,100
輸出	7	20	27	1	-	1	-
国内消費	1,058	915	858	834	950	1,019	1,100
(パキスタン)							
生産	333	318	308	305	357	297	302
輸出	1	1	-	-	-	-	-
国内消費	332	317	308	305	357	297	302
(カナダ)							
生産	173	79	248	250	131	187	295
輸出	127	101	116	121	192	139	81
国内消費	46	-22	132	129	-61	48	214
(ポーランド)							
生産	79	129	144	253	355	223	264
輸出	-	-	-	2	21	4	-
国内消費	79	129	144	251	234	219	264

〔主要輸出国〕

	1958	1959	1960	1961	1962	1963	1964	1965	1966
フランス	18	35	11	31	81	60 70	112 118	122	116
カナダ	127	101	116	121	192	162 139	99 81	275	354
スウェーデン	72	38	25	7	15	30 30	48 48	73	17
デンマーク	-	8	12	27	25	51 43	56 48	44	41
オランダ	5	10	11	12	4	13	12		
中国						1	-	6	3.3
世界計	236	220	214	216	649	335 608	339 324	569	651

(上段数字は国際原油業者大会報告による)

② 主要国別輸入統計(単位:千トン)

	1958	1959	1960	1961	1962	1963	1964
日本	16	26	50	20	36	86	75
イタリア	76	81	39	64	102	97	64
アルジェリア	28	41	55	65	52	72	65
西ドイツ	87	18	2	24	31	45	32
英国	4	4	4	5	7	8	12
フランス	4	4	39	33	15	11	7
世界計	261	215	217	241	278	339	301

なお最近の主要輸出国および輸入国の生産および貿易量は、Oil Worldによれば次のとおり。

主要国のナタネ生産および貿易

(単位：千トン)

		64/65	65/66	66/67	67/68
主 要 輸 出 国	[生産量]				
	デンマーク	51	50	33	37
	フランス	247	338	317	360
	スウェーデン	157	187	82	172
	ポーランド	267	504	435	430
	カナダ	300	513	578	550
	合計	1,022	1,592	1,445	1,549
	[輸出量]				
	デンマーク	40.0	33.0	33	32
	フランス	224.5	190.0	195	230
スウェーデン	110.9	17.0	17	100	
ポーランド	95.4	125.0	130	125	
カナダ	269.2	285.0	400	410	
合計	740.0	650.0	775	897	
主 要 輸 入 国	[生産量]				
	イタリア	8	8	9	10
	オランダ	10	11	13	15
	英国	-	-	-	10
	西ドイツ	109	107	99	120
	日本	135	125	95	100
	アルジェリア	-	-	-	-
	合計	262	251	216	255
	[輸入量]				
	イタリア	88.5	217.8	190.0	
	オランダ	4.1	48.4	19.0	
	英国	20.1	40.0	41.0	
	西ドイツ	38.7	75.0	29.0	
日本 <sup>1)</sup>	88.0	150.5	190.0		
アルジェリア <sup>2)</sup>	85.8	97.8	90.0		
合計	325.2	629.5	559.0		

注) 1) ナタネ油の種子換算量(39%)を含む 2) 粗輸入量を正味として

第二節 主要輸出国の輸出事情および今後の見通し

1) 落花生

1964年度の世界の落花生輸出量は、殻つき換算重量141万トンで

前年度より4万トンの減少となった。このうち、ナイジェリア、セネガル、スーダン、ニジェール、南アフリカの主要輸出国5カ国の輸出量は合計約107万トンで、全世界の76%を占めている。

ナイジェリアは生産量では世界第3位であるが、輸出量では第1位である。1964年度の輸出は、前年の61万4,000トンから54万4,000トンに大巾に減少した。これは国内消費（ほとんど全量搾油向け）が増加したことにもよるが、生産地から積出港までの輸送が困難であったことにもよる。最近3カ年間の主要輸出相手国別推移をみると、次のようになっている。

	1962	1963	1964
英 国	152	147	107
フ ラ ン ス	76	203	106
イ タ リ ア	69	77	58
ビ ル マ	-	-	52
オ ラ ン ダ	52	33	40
西 ド イ ツ	65	18	34
ベ ル ギ ー	32	37	26
ス イ ス	15	22	20
ス ペ イ ン	16	8	20
ポ ル ト ガ ル	-	28	20
そ の 他			
合 計	530	614	544

1964年にはこれまでの主要輸出先であった英国とフランスへの輸出量が大幅に減少したが、いくつかの新しい市場、とくにビルマ、キューバ、スペイン、日本、ポーランドなどに対する輸出が増加した。しかし、落花

生の輸出は全体として減少している。反面、国内での搾油量が増加したことを反映して、落花生油の輸出の方は約8万トンと、前年の1963年度実績を15%上回る新記録をたてた。落花生油についても、英国はナイジェリアにとって最大の輸出相手国で、1964年のシェアは46%であった。1965年度については、暫定公式統計によると、落花生の輸出は54万6,000トンとほとんど前年と変わらず、落花生油の方は8万6,200トンと再び記録的な水準に達した模様である。

セネガルの落花生輸出は、ほとんど全量がフランス向けとなっているが1964年の実績は前年比9,000トンの微増に終わった。しかし、落花生油の輸出は1962年度11万6,700トン、1963年度10万2,000トン、1964年度12万7,500トンと推移し、これもほとんど全量がフランスに輸出されている。いずれもフランスとの間に特別の取引協定が締結されているからである。しかし、1963-64年シーズンはフランスがセネガルに全面的な援助を与えた最後の年である。EECの油脂政策によって、フランスとセネガルとの間の協定はセネガル産落花生および落花生油の対仏輸出価格が国際価格に一致するように修正されるからである。

この点についてももう少し触れておくと、1963年7月に締結され、1964年6月1日から発効したEECとアフリカ18カ国（カメルーン、中央アフリカ共和国、チャド、コンゴ（ブラザビル）、象牙海岸、ダホメー、ガボン、オートボルタ、マラガシー共和国、マリ、モーリタニア、ニジェール、セネガル、トーゴ、コンゴ（レオポールドビル）、ルワンダ、ブルンディおよびソマリア）との間の準加盟協定（Convention of Association） - 期間は5年とされている - により、これらアフリカ諸国産品のフランス市場における価格が、フランスのフランス地域諸国に対する双務援助協定によって国際価格と差異が生じているので、こ

の差異を是正することとされている。やし油を除く食用油および油料種子については、これら産品に関する統一農業政策が実施されるようになったとき(但し、1964-65年シーズンの開始前でなければならぬ)から、こうした価格差是正の措置が講じられることになった。対象産品の中では落花生および落花生油がもっとも重要な位置を占めている。セネガルの1964-65年産品の対仏輸出に関するセネガルとフランスの協定に、落花生、落花生油の保証買入価格を平均6%引き下げられることが規定されたのが、こうした方向に向っての第一歩である。1965-66年産のものについては、さらに前年価格比1.5%引き下げることになっている。

スーダンの落花生輸出は1964に前年比30%伸びた。輸出先は多岐にわたっており、主要なものはイタリア、フランス、西ドイツ、オランダイラクなどである。スーダンが落花生油の輸出を1964年にはじめたばかりである。

ニジェールの落花生輸出は1960年以来増加の傾向をたどっているが、落花生油の方は年によって変動が大きい。1964年の落花生油輸出は5,900トンであった。ニジェールもセネガルの場合と同じように、フランスと協定を結んでいるので、ほとんど全量をフランスに輸出している。

## 2) ひまわり

ひまわりについては、主要生産国は概ね国内消費が大部分で、輸出は少ない。世界的にみても、たとえば1964年にはひまわり種子の生産827万トンに対して、輸出は28万トンで3%強に過ぎない。ひまわり油の輸出も世界的にはひまわり種子とほぼ同じである。

過去10年間におけるひまわり種子およびひまわり油の輸出伸び率は、

他の食用油料種子および油脂に比べて大きく、東欧諸国およびソ連の輸出余力が大巾に増加したことを反映している。1964年度の世界のひまわり種子の輸出は28万トンで、前年比10万トンの増加となり、今までの最高水準に達した。これはブルガリアおよびソ連の輸出が、それぞれ7万2,000トン、1万トン増加したのが大いに影響している。これに反して、ひまわり油の輸出は大巾に減少した。著しく減少した国はソ連、ブルガリア、ハンガリーなどである。

ブルガリアは主としてひまわり種子を輸出しており、生産に対する輸出比率は高い(1964年は約35%)。ほとんど全量をイタリアに輸出していた。しかし、イタリアは1967年9月に国内オリーブ油生産者保護の名目で、植物油の輸入禁止措置をとった。これに対してEEC委員会は、イタリアの措置がEEC域内の植物油も対象にしているので、その対策を検討した結果、イタリアの輸入禁止を認めない代わりに、ソ連、ブルガリア、ルーマニア3国のひまわり油ダンピングに対して、9月25日到着分からトン当たり17ドルの輸入課徴金を賦課する緊急措置をとった。

1967年7月に発足したEECの油脂統一市場がソ連などのひまわり油によって早くも混乱したこと、これをめぐってイタリアとフランス、西ドイツとの対立が表面化したことも注目点であるが、もう一つEECの今回の措置によって、日本に対するソ連などのひまわり攻勢が強まる公算が大きくなった点も見逃せない。事実、ブルガリアでは日本との通商協定の中にひまわりを組入れることを要望してきている。

しかし、EECがソ連などのひまわり油を縮出したとしても、ひまわり種子の対EEC輸出は自由であるから、種子の輸出が増加することはあり得る。ただ、ひまわり種子での輸出を多くしたとすれば、国内の油と粕のバランスをどうするかなどが問題になってくるだろう。



ハンガリーの場合、種子でよりもひまわり油での輸出が多い。油の主要輸出先はオーストリア、スイス、西ドイツなどで、種子の場合は西ドイツが大口輸入国となっている。

なお、ニカラグア、グアテマラ、ホンジュラスなどの中米諸国が日本向け輸出にひまわりを開発しようとする動きが出ている。しかし、ひまわりは綿実のように副産品ではないので、生産者のリスクがそれだけ大きいこと、日本の市場がどの程度開発できるかについて見通しをつけにくいことなどから、実現性を疑問視する向きもある。

### 3) ひま

1950年代を通じての1つの特徴は、世界のひま種子の輸出が減少傾向をたどり、反面ひまし油の輸出が伸びてきたことである。1960年代に入って、近年まで種子の輸出も多少回復してきたが、ひまし油の輸出は一貫して増加傾向をたどり、1964年には世界のひまし油輸出は14万6,000トンとこれまでの最高水準に達した。

こうした傾向の背後にあるのは、ひまの主要生産国であるブラジルとインドが種子の輸出を禁止したからである。これら両国はひまし油の主要供給国になっており、1964年の輸出をみてもブラジル10万9,000トン、インド2万5,000トンで、両者を合わせたシェアは世界の90%弱になっている。これに対して、ひま種子の主要供給国はタイ、エクアドル、タンザニア、パラグアイ、中共などである。近年になって、ひま種子の輸出が回復を示したのは、いくつかの小規模生産国が可成りコンスタントに輸出するようになったこと(エチオピア、ケニア、リビア、ウガンダ、カンボジアなど)タイ、タンザニアなど主要輸出国が若干持ち直してきたことなどが上げられるが、とくに66年は、中共が急速に輸出量を増大した

ことに注目しなければならない。これまでタイが1959~65年の間、ひまの輸出国として世界第1位を占めてきたが、66年には、中共がいきなり首位を奪った。

タイのひま種子主要輸出相手国は日本とオランダ及びフランスで64年には3カ国で輸出総量の90%を占めていた。しかし63年から65年にかけてヨーロッパの需要がなくなったため減少し、66年は日本がほとんど唯一の相手国となった。タイの最近の相手国別ひま輸出推移は次のとおり。

タイのひま 国別輸出品

単位(千トン)

相手国	平均 1955~59	1963	1964	1965	1966 1~7月
日本	18,327	30,529	24,724	27,553	22,175
オランダ	101	7,304	6,050	296	0
フランス	※	1,649	3,389	0	0
英国	816	101	1,196	99	0
イタリア	47	63	455	0	0
スペイン	0	0	100	0	0
西独	604	0	0	0	0
オーストラリア	526	0	0	0	0
香港	1,056	89	0	0	0
その他	131	0	1	3	-
総計	21,608	39,735	35,915	27,951	22,175

※)は5t以下

タイのひまし輸出が逐年減少していることは前記の通りである。66年には一応回復はみせたもようであるが、最近になって供給量は一段と逼迫

し、これがひまし価格高騰の原因になっている。この数年間、タイの農家ではメイズや綿花に押されて、ひまし生産意欲が減少しているといわれる。これに対して、たとえば日本ではひまし油の輸出増加に伴って、ひまし需要が著るしく伸びたことも、需給アンバランスの原因になっている。日本のひまし工業会は1967年2月にタイひまし調査団を派遣し、タイにおけるひましの生産、価格の現状、対策などについて調査を行なったが、当面大きな事態の改善は望めないものとみられる。

参考までに、同調査団の報告書からタイ側関係者の意見を列記してみれば次のとおりである。

(現地商社筋およびサーベヤー)

1. 日本商社も含めてタイ国政府、輸出商は中共ヒマシに対する恐怖心が強く、かりにタイヒマシが増産された場合、中央の政策的な価格により損害を受けるのではなからうか。
2. 最近のタイヒマシ減産理由の一つとして、ヒマシ価格の最近の安定化によってシッパーの投機的要素がなくなり、取扱意欲をなくした。
3. 近年急激な伸長を示したメイズの売込みのためにヒマシがとかく目玉商品にされ易く、その結果価格を抑えるために農家手取りを減少させ、生産意欲の減退を招いている。
4. さらにメイズの耕作規模の拡大はトラクターの使用となり、メイズ畑の間作に栽培されていたヒマシがほとんど切り倒されてしまった。
5. メイズ、綿花に農薬を散布するため間作であるヒマシに他の作物の害虫が移ってきて、虫害がひどくなりつつある。
6. うがった考えではあるが、タイ側はヒマシをなお減産の方向に進め、価格の高騰、シッパーの投機要素の回復を考えているのではないか。
7. いずれにしても価格が上昇すればヒマシの増産は期待し得る。

(タイ国経済省)

1. ヒマシの増産は農民の手取りをふやし、生産意欲を向上させる以外にない。
2. 中共ヒマシの政策的価格を材料にタイヒマシが不当に買い叩かれていないか。
3. 農民に奨励して増産した結果、果して日本が全量引受けるか否か。

(シッパー)

1. 農民はO&F日本換算トン当り46ポンド以上でないと増産意欲を示さない。
2. ただ、日本側がO&F45ポンドで安定買付けできるなら4万トンはおろか6万トンまでは責任をもって供給する。
3. 品質包装については非常に改善され日本側も満足していると思う。現状の輸出検査が揚地検査とダブル検査費用の負担が馬鹿にならない。価格を考慮するから、積地ファイナルにしてもらいたい。
4. 積出港はベトナム戦のために軍事優先となり、民間物質の輸入品滞船は15日が常識となっている。また積期、金利倉敷料の問題からスペースさえあれば老朽船にも積まざるを得ない現状である。
5. 本年度ヒマシ収穫量は3万トン。
6. なお付帯的な事項として、以前は港頭において荷造りをしていたが、現在は仲買人の段階で袋詰めされている。したがって、品質についても信用して頂いてもよいのではないかと思う。

1966年に輸出量第1位となった中共のくわしい事情は分らないが、前記の日本調査団の報告書によると、『中共の数字はその国情よりして、1967年以降も継続的に依存し得るや否やは甚だ疑問し得ざるを得ない』と述べ、日本としては『香港、インドネシア、カンボジア品がそれぞれ生産および流通環境からして、原料供給源となることは不可能であり、結局

タイに依存するところ大』としていることなどから、67年以後の輸出動向に注目していくべきであろう。

その他1万トン級の輸出力を持つ国は南米のエクアドル、パラグアイ、アフリカのタンザニアであるが、供給量は不安定で、とくにエクアドル、タンザニアでは、国内に搾油工場が建設され、これが稼動はじめれば輸出量は急速に減少しよう。

#### 4) 胡 麻

世界の胡麻輸出のほとんど全部は種子の形で行なわれ、胡麻油の輸出は世界で1700トンに過ぎない。ほとんどはスーダンと日本からの輸出である。

胡麻の主要輸出国はスーダン、ナイジェリア、エチオピア、タンザニア、ニカラグアなどで、1964年の全世界の輸入量18万1000トンに対して、これら5カ国の輸出は14万5000トンで、約80%を占めている。主要生産国であるインド、中共、メキシコ、ビルマなどは全く、あるいはほとんど輸出していない。

胡麻の輸出では今やスーダンが世界最大の輸出国で、そのシェアは逐年高まっている。1964年の実績は1958年比3倍以上になっている。前年比では45%程度の増加になる。主要輸出相手国はイタリア、日本、ベネズエラ、エジプトなどである。スーダンは生産量の約半分を輸出しているが、作付面積および生産量ともに近年伸びているので、今後も輸出は増加するものとみられる。

ナイジェリアの胡麻も、ほとんどがベネズエラ、イタリア、日本の3国

に輸出されている。作付面積および生産量ともに近年は横ばい傾向であるから、輸出比率は70%以上と高いが、輸出量はそれほど伸びないであろう。

タンザニアの胡椒輸出はここ数年減少傾向を辿っているが、主要輸出先は日本と英国である。タンザニアは生産量のほとんど全部を輸出している。

エチオピアは生産はそれ程伸びてはいないが、輸出は数量こそ小さいが、1961年以降急ピッチで伸びてきている。

#### 5) 油やし(やし核)

やし核の世界の輸出は1958年以降、減少の一途を辿っている。主要輸出国であるナイジェリア、コンゴ(レオポルドビル)の輸出が減少していることが大きく響いている。生産自体が減少しているうえ、コンゴの場合には国内消費が強含みで推移しているからである。

ナイジェリアは世界最大のやし核供給国で、世界の輸出全体の約50%を占めている。主要輸出先別の推移は、次のようになっている。

	1962	1963	1964
英 国	179	209	160
オ ラ ン ダ	118	113	129
西 ド イ ツ	42	39	57
ベ ル ギ ー	11	9	15
デ ン マ ー ク	4	9	14
ポ ー ラ ン ド	7	8	13

(単位は千トン)

1964年のナイジェリアのやし核輸出は、前年比僅かながら減少したが、1965年の暫定統計によると、輸出高は41万6,000トンと1961年以来再び40万トン台に乗せた模様である。

シエラレオネのやし核輸出量は、ナイジェリアに比べると8分の1の規模である。輸出量は1958年以来ほとんど変わっていない。主要輸出先は英国とオランダである。

ダホメーの輸出も量的にはシエラレオネと同じである。このほか、アフリカではカメルーン、象牙海岸、トーゴ、ギニア、コンゴ(ブラザビル)アンゴラなどがある。

コンゴは国内搾油産業の発達によって、やし核の輸出は減少しているが、これを補う形でやし核油の生産が伸びている。やし核油の輸出先としては、米国(1964年実績1万8,700トン)、イタリア(同じく7,400トン)、オランダ(5,800トン)、西ドイツ(700トン)などが主要なものである。コンゴでは1962年以来、国内搾油産業の原料確保という名目で、やし核の輸出は制限されている。

インドネシアのやし核は、大部分が日本に輸出されており、輸出量はここ数年間ほとんど変わっていない。

なお、やし核の輸出が国の輸出総額に占める割合をみると、次のようになっている。

	ナイジェリア	シエラレオーネ	コンゴ (レオポルト)	ダホメー
1962年	10.5%	14.7	4.8	45.6
1963	11.6	9.6	2.3	53.6
1964	10.2	8.0	-	54.4

(出所) Commonwealth Economic Committee

これで見ると、やはり輸出への依存度もっとも高いのはダホメーで、依存度はますます高くなっている。依存度が低下しているのはシエラレオーネで、これは他の輸出産品の開発に成功したからである。

#### 6) なたね

世界のなたね輸出は、1962年に約65%伸びて35万トンになったが、1963年には30万8,000トンに減少した。1964年には5%増加して32万4,000トンになった。主要輸出国はカナダ、フランス、スウェーデン、デンマーク、オランダで、世界の輸出総額に占めるこの5カ国のシェアは90%強になっている(1964年)。1964年の特徴は、カナダの輸出が40%以上も激減したが、フランス、スウェーデンは逆に大巾の輸出増加を記録し、結局全体としては前年より増加した。

カナダは最大のなたね輸出国で、近年世界の貿易量の50%内外を供給してきた。1964年の輸出が減少したのは、時期的なズレによるもので、1964年産のなたねの大半が1965年に横出されたためである。カナダの主要輸出先は日本で、輸出全体の70%以上を占めている。1962年にはイタリア、オランダ、西ドイツ、アルジェリアなども主要輸出市場であったが、1963年、1964年には日本だけが主要輸出市場にとどまった。1964年には、日本以外ではオランダ、米国、イタリアなどのほか、台湾、インドなどの新しい市場にも輸出された。



フランスのなたね生産は1961年以来急ピッチで伸びており、1963年を除いて毎年新記録をたててきた。主要輸出先はアルジェリアで、1964年の対アルジェリア輸出量は6万5,000トンであった。このほか、イタリアや西ドイツにも相当量が輸出されている。

デンマークは生産量をほとんど輸出しており、1964年の主要輸出市場はオーストリア、イタリア、チェッコなどである。

スエーデンのなたね輸出比率は近年35%ぐらいになっている。過去には50%を越えた年もあった。輸出市場はイタリアが最大で(シェアは、1964年に75%)、これに続くのは格差が大きい、西ドイツ、フランス、英国などである。

最近、フランスやカナダでのなたね豊作によって、カナダなたねの相場が急落し、またフランスなたねの引合いが日本にも寄せられるようになってきている。しかし、日本にとってはカナダの方が、輸送、その他の点で有利ななたね供給源であって、カナダは今後ともなたね供給力を高めていくものとみられる。

### 第三節 主要輸入国の輸入事情および今後の見通し

#### 1) 落花生

落花生および落花生油の主要輸入国は西欧諸国である。中でもフランスは全世界の輸入量の30%に当たる落花生を輸入している。輸入先はセネガルとナイジェリアが重要で、この他にニジェールとスーダンがある。

フランスに次ぐ輸入国、英国の主要輸入先はナイジェリアで、このほかに南アフリカ、インド、マラウイ、ザンビア、ローデシアがある。英国の落花生輸入は、国際価格の高騰もあって、近年では1962年をピークに毎年減少している。とくにナイジェリア製品の買付は大巾に減少しており、1965年の実績は1962年の3分の1にもなっている。

イタリアの落花生輸入は近年、1960年以来毎年増加を続けてきたが、1963年に前年比2倍以上の輸入を行なった反動と国内のオリーブ油の供給が伸びたこともあって、1964年には12万8,000トンと25%の減少になった。主要輸入先はナイジェリア、スーダン、ガンビア、南アフリカである。

1964年の動きとして特徴的なことは、1958年以来落花生を輸入したことのないビルマが5万1,000トンと可成りまとまった量を輸入したことである。ビルマでは国内産の落花生が食用油の主要源とされ、収穫量が不十分なときには必要に応じて油脂を輸入してきた。1963-64年シーズンの収穫が悪かったために、落花生油だけでなく、落花生をも大量に買付けることになったのである。はじめは従来からの輸入先であるインドから買付けていたが、後には他の輸入先にも引合いを出し、これが5月からの落花生および落花生油の急激な価格騰貴をもたらしたのである。ビルマが輸入した落花生油は7万5,000トンであった。

## 2) ひまわり

ひまわり種子の主要輸入国は数が少ない。西欧ではイタリア、西ドイツ東欧では東ドイツ、チェッコがそれぞれ主要ひまわり種子輸入国である。日本も1960年から63年にかけて2万トン内外を輸入していたが67年にはソ連から約6万トンを買付けるなどにわかに注目される。

### 3) ひま

世界のひま種子輸出は増加傾向にあるが、定例的に買付ける国の数は少なくなっており、その他の国の場合には買付量が減少している。今では主要なひま種子輸入国といえば、日本、西ドイツ、フランス、英国ぐらいのものである。しかし、ひまし油輸入国の数は多く、輸入量も一般に多くなっている。

日本では前記のように、ひまし油の輸出需要が増加しているのに、タイなどの主要供給源からの輸入量を十分に確保できないため、原料が非常に逼迫し、その手当てに業界は大いに苦慮している。ソ連、中共からのひま種子輸入も思うようにいかず、こうした状況は当分続くものとみられる。価格はひま種子、ひまし油ともに、国際的に大巾に騰貴している。

フランスのひま種子およびひまし油の輸入が過去10年ぐらい高水準を続けているのは、ナイロンの生産に使用されるひまし油が増加しているからといわれている。フランスのひま種子輸入先は多岐にわたっており、パラグアイ、スーダン、タイ、エクアドル、東アフリカなどが主要輸入先となっている。

西ドイツの主要輸入先は、エクアドル、タイ、パラグアイとなっている。

### 4) 胡麻

胡麻の輸入量は世界的にみて、ここ数年ほとんど増減がない。主要輸入国は日本、イタリア、ベネズエラで、1964年にはこの3国で50%以上のシェアを占めている。

日本では輸入量の半分が胡麻油の原料として使われ、残りは直接食用に消費されているものと推定される。日本の輸入量は1958年以来、ほと

んど毎年のように新記録を更新している。

イタリアが胡麻の主要輸入国になっている主たる理由は、法律によってイタリアで販売される食用油（マーガリンを含む）には、5%の胡麻油が含まれていなければならないからである。

#### 5) 油やし(やし核)

やし核の主要輸入国は英国、オランダ、西ドイツ、フランス、ベルギー、ポルトガルなど西欧諸国である。日本もコンスタントに相当量を輸入している。

英国のやし核輸入は、ほとんどがナイジェリアから(85%)で、シエラレオーネからも12%程度を輸入している。

オランダも主としてナイジェリアからやし核を輸入している。オランダのやし核輸入の大部分は、やし核油として再輸出される。主要輸出先は、米国、西ドイツ、イタリアである。

西ドイツの主要なやし核輸入先はナイジェリアで、全体の6.5%を占める。これに続くのがポルトガル領アフリカ、インドネシア、ダホメーなどである。

フランスの場合は、主としてダホメー、トーゴ、カメルーン、コンゴ(ブラザビル)などからやし核を輸入している。

#### 6) なたね

なたねの主要輸入国は数が少ない。日本、イタリア、アルジェリア、西

ドイツぐらいのものである。

日本は最大のなたね輸入国で、主としてカナダから買付けている。イタリアもカナダから輸入しているが、輸入量は1962年8万1,000トン、63年1万7,000トン、64年3,000トンと大巾に減少している。1964年にはフランスからの輸入が増加した。西ドイツの場合もカナダからの輸入は減少しているが、他の西欧諸国からの輸入はほとんど変わっていない。

このように、日本を除いて他の主要輸入国がカナダからの輸入を減少させているのは、最近フランス、ポーランド、西ドイツなど欧州のなたね生産が増加しているためである。カナダの収穫もいいので、最近になってカナダ産なたねの相場は大巾に下がっている。フランスはなたねの輸出に積極的になっていることは前に触れた通りである。

## 第四章 消費状況

### 第一節 消費統計

#### 1) 油脂生産推移

品目別、国別の油脂生産推移を油料種子の生産統計と結びつけるために、次の算式によって油脂生産量を計算した。

$$\text{油料種子生産量} = a$$

$$\text{〃 輸入量} = b$$

$$\text{〃 輸出量} = c$$

$$\text{平均搾油率} = \alpha$$

$$\text{油脂生産量} = Y$$

とすれば、

$$Y = (a + b - c) \times \alpha$$

なお、 $(a + b - c)$ を国内消費量とみて、これを 2) の項目の「国内消費，輸出入統計」と連結するようにした。

落花生については、直接食用に供される部分が多いので、搾油向け比率が分る国についてはその比率を、分らない国については世界の平均比率 70% を乗じたものを油脂生産のための「国内消費量」とみることにした。

胡麻も直接食用に供される比率がアジア、アフリカの諸国では可成り高いとみられるが、はつきりした国別の数字がつかめないで、国内消費量を全量胡麻油に換算した。

[単位は全部千トン]

① 落花生油

平均搾油率 = 4.5%

	1958,	1959,	1960,	1961,	1962,	1963,	1964
(インド)							
国内消費	4,964	4,471	4,712	4,894	4,720	5,111	6,058
搾油向け(80%)	3,971	3,577	3,770	3,915	3,776	4,089	4,846
製油	1,787	1,610	1,697	1,762	1,699	1,840	2,181
(中共)							
国内消費	2,695	2,181	2,211	2,126	2,346	2,494	2,675
搾油向け(70%)	1,887	1,527	1,548	1,488	1,642	1,746	1,873
製油	849	687	697	670	739	786	843
(ナイジェリア)							
国内消費	403	288	652	643	874	694	589
搾油向け(100%)	403	288	652	643	874	694	589
製油	181	130	293	289	393	312	265
(米 国)							
国内消費	801	693	778	765	802	891	957
搾油向け(20%)	160	139	156	153	160	178	191
製油	72	63	70	69	72	80	86
(セネガル)							
国内消費	437	509	626	702	556	639	702
搾油向け(70%)	306	356	438	491	389	447	491
製油	138	160	197	221	175	201	221
(フランス)							
輸 入	405	414	433	487	454	528	433
搾油向け(70%)	284	290	303	341	318	370	303
製油	128	131	136	153	143	167	136

	1958	1959	1960	1961	1962	1963	1964
(英 国)							
輸 入	210	232	132	163	212	195	147
搾油向け(70%)	147	162	92	114	148	137	103
製 油	66	73	41	51	67	62	46
(イタリア)							
輸 入	89	102	56	72	80	175	128
搾油向け(70%)	62	71	39	32	56	123	90
製 油	28	32	18	14	25	55	41
(南アフリカ)							
生 産	179	197	253	173	262	208	198
輸 出	25	41	46	65	49	74	71
国内消費	154	156	207	108	213	134	127
搾油向け(70%)	108	109	145	76	149	94	89
製 油	49	49	65	34	67	42	40

② ひまわり油

平均搾油率 = 35%

	1958	1959	1960	1961	1962	1963	1964
(ソ 連)							
国内消費	4,507	2,910	3,831	4,595	4,612	4,120	5,788
製 油	1,577	1,019	1,341	1,608	1,614	1,442	2,026
(アルゼンチン)							
国内消費	381	789	576	846	455	453	745
製 油	133	276	202	296	159	159	261
(ルーマニア)							
国内消費	282	522	493	429	433	488	500
製 油	99	183	173	150	152	171	175



	1958	1959	1960	1961	1962	1963	1964
(ブルガリア)							
国内消費	211	219	257	253	257	299	222
製油	74	77	90	89	90	105	78
(ユーゴ)							
国内消費	78	112	97	115	158	227	256
製油	27	39	34	40	55	79	90
(ハンガリー)							
生産 ※	98	113	67	104	129	124	112
輸出 ※※	7	7	7	1	15	16	14
国内消費	91	106	60	103	114	108	98
製油	32	37	21	36	40	38	34
※ 生産, 輸出はひまわり種子							
※※ 輸出は輸入を差引いた正味輸油量							
(東ドイツ)							
輸入	24	28	43	43	46	67	78
製油	8	10	15	15	16	23	27
(イタリア)							
生産	6	4	6	6	4	4	4
輸入	2	3	53	92	32	61	66
国内消費	8	7	59	98	36	65	70
製油	3	2	21	34	13	23	25
(チェッコ)							
生産	7	5	5	2	4	5	3
輸入	28	36	37	46	65	32	32
国内消費	35	41	42	48	69	37	35
製油	12	14	15	17	24	13	12

	1958	1959	1960	1961	1962	1963	1964
(西ドイツ)							
輸 入	19	23	22	23	20	30	29
製 品	7	8	8	8	7	11	10

(注) 国内消費(2-1の表を参照), 輸入はひまわり種子(重量単位  
千トン)

製油はひまわり油生産高(単位千トン)

③ ひまし油

平均搾油率 = 45%

	1958	1959	1960	1961	1962	1963	1964
(ブラジル)							
国内消費	146	168	221	205	221	236	305
製 油	66	76	99	92	99	106	137
(インド)							
国内消費	110	113	105	107	99	101	99
製 油	50	51	47	48	45	45	45
(タイ)							
国内消費	13	3	18	-	11	13	8
製 油	6	1	8	-	5	6	4
(米 国)							
国内消費	18	11	14	12	15	29	36
製 油	8	5	6	5	7	13	16
(日 本)							
輸 入	21	27	27	32	35	37	34
製 油	9	12	12	14	16	17	15

(西ドイツ)							
輸 入	20	21	28	22	26	24	32
製 油	9	9	13	10	12	11	14
(フランス)							
輸 入	21	16	25	10	26	31	25
製 油	9	7	11	5	12	14	11
(英 国)							
輸 入	14	12	9	11	21	31	19
製 油	6	5	4	5	9	14	9

(注) 国内消費および輸入は、ひま種子(重量単位千トン)  
製油はひまし油生産高(単位千トン)

④ 胡麻油

平均搾油率 = 42%

	1958	1959	1960	1961	1962	1963	1964
(インド)							
国内消費	499	364	313	366	457	430	459
製 油	210	153	131	154	192	181	193
(中 共)							
国内消費	329	370	342	316	333	333	359
製 油	138	155	144	133	140	140	151
(スーダン)							
国内消費	123	132	50	166	64	102	98
製 油	52	55	21	70	27	43	41

	1958	1959	1960	1961	1962	1963	1964
(メキシコ)							
国内消費	115	123	127	144	151	145	156
製油	48	52	53	60	63	61	66
(ビルマ)							
国内消費	52	66	64	75	84	52	70
製油	22	28	27	32	35	22	29
(日本)							
生産	5	5	5	5	3	5	5
輸入	17	27	27	22	28	32	33
国内消費	22	32	32	27	31	37	38
製油	9	13	13	11	13	16	16
(イタリア)							
生産	1	2	1	1	1	1	1
輸入	17	19	25	19	20	32	26
国内消費	18	21	26	20	21	33	27
製油	8	9	11	8	9	14	11
(ベネズエラ)							
生産	19	16	24	28	30	46	46
輸入	11	10	32	16	21	14	20
国内消費	30	26	56	44	51	60	66
製油	13	11	24	18	21	25	28
(米 国)							
生産	4	3	2	1	1	1	-
輸入	7	6	8	10	9	11	11
国内消費	11	9	10	11	12	12	11
製油	5	4	4	5	4	5	5

⑤ やし油

(a) パーム油(単位千トン)

	1958	1959	1960	1961	1962	1963	1964
コンゴ(レオポルドビル)	222	241	230	220	225	220	205
インドネシア	145	135	139	143	139	146	158
ナイジェリア	184	190	189	173	129	149	148
マレー	70	72	90	93	106	124	120
アンゴラ	9	9	13	15	15	17	18

(b) やし核油

平均搾油率 = 47%

	1958	1959	1960	1961	1962	1963	1964
(コンゴ)							
国内消費	104	120	120	112	96	87	119
製油	49	56	56	53	45	41	56
(英国)							
輸入	273	234	237	225	209	208	191
製油	128	110	111	106	98	98	90
(オランダ)							
輸入	132	153	120	141	128	125	132
製油	62	72	56	66	60	59	62
(西ドイツ)							
輸入	114	131	153	126	122	127	129
製油	54	62	72	59	57	60	61

	1958	1959	1960	1961	1962	1963	1964
(フランス)							
輸入	106	81	94	81	81	78	88
製油	50	38	44	38	38	37	41
(日本)							
輸入	32	33	30	26	28	25	25
製油	15	16	14	12	13	12	12
(ベルギー)							
輸入	29	31	23	23	32	20	24
製油	14	15	11	11	15	9	11
(ポルトガル)							
輸入	27	24	17	15	17	16	20
製油	13	11	8	7	8	8	9

⑥ なたね油

平均搾油率 = 35%

	1958	1959	1960	1961	1962	1963	1964
(インド)							
生産	1,026	1,046	1,326	1,325	1,274	888	1,353
輸入	5	5	7	6	5	3	6
国内消費	1,031	1,051	1,333	1,331	1,279	891	1,359
製油	361	368	467	466	448	312	476
(中共)							
国内消費	1,058	915	858	834	950	1,019	1,100
製油	370	320	300	292	333	357	385

(パキスタン)							
生産	333	318	308	305	357	297	302
輸入	- 1	- 1	-	-	-	-	11
国内消費	332	317	308	305	357	297	313
製油	116	111	108	107	125	104	110
(カナダ)							
国内消費	46	-22	132	129	-61	48	214
製油	16	-	46	45	-	17	75
(ポーランド)							
国内消費	79	129	144	251	234	219	264
製油	28	45	50	88	82	77	92
(日本)							
生産	263	258	259	271	243	107	132
輸入	16	26	50	20	36	86	75
国内消費	279	284	309	291	279	193	207
製油	98	99	108	102	98	68	72
(イタリア)							
生産	11	10	10	9	10	8	8
輸入	76	81	39	64	102	90	64
国内消費	87	91	49	73	112	98	72
製油	30	32	17	26	39	34	25
(アルジェリア)							
輸入	28	41	55	65	52	72	65
製油	10	14	19	23	18	25	23

	1958	1959	1960	1961	1962	1963	1964
(西ドイツ)							
生産	57	57	68	73	114	94	107
輸入	87	18	2	24	31	45	32
国内消費	144	75	70	117	145	139	139
製油	50	26	25	41	51	49	49
(フランス)							
生産	193	129	82	105	156	131	234
輸入	4	4	39	33	15	11	7
輸出	18	35	11	31	81	70	118
国内消費	179	98	110	107	90	72	123
製油	63	34	39	37	32	25	43
(東ドイツ)							
生産	126	186	180	171	163	126	173
製油	44	65	63	60	57	44	61
(スウェーデン)							
生産	130	178	54	116	142	101	176
輸出	72	38	25	7	15	30	48
国内消費	58	140	29	109	127	71	128
製油	20	49	10	38	44	25	45
(チリー)							
生産	18	33	35	28	50	50	56
製油	6	12	12	10	18	18	20



## 2) 国別油脂消費統計

## ① 落花生油

	1958	1959	1960	1961	1962	1963	1964
(インド)							
生産	1,787	1,610	1,697	1,762	1,699	1,840	2,181
輸出	4	44	8	5	36	81	58
消費	1,783	1,566	1,689	1,757	1,663	1,759	2,123
(中共)							
生産	849	687	697	670	739	786	843
輸出	30	31	31	5	3	3	6
消費	819	656	666	665	736	783	837
(ナイジェリア)							
生産	181	130	293	289	393	312	265
輸出	40	48	47	45	63	69	80
消費	141	82	246	244	330	243	185
(米国)							
生産	72	63	70	69	72	80	86
輸入	1	-	-	1	-	1	1
輸出	1	7	4	3	-	4	36
消費	72	66	66	67	72	77	51
(セネガル)							
生産	138	160	197	221	175	201	221
輸出	106	112	112	124	117	102	128
消費	28	48	85	97	58	99	93
(フランス)							
生産	128	131	136	153	143	167	136
輸入	93	105	111	113	119	121	149
輸出	2	3	5	3	3	13	23
消費	219	233	242	263	259	275	262

	1958	1959	1960	1961	1962	1963	1964
(英 国)							
生 産	66	73	41	51	67	62	46
輸 入	28	48	45	36	39	43	53
輸 出	11	5	2	4	5	14	6
消 費	83	116	84	83	101	91	93
(イタリヤ)							
生 産	28	32	18	14	25	55	41
輸 入	2	1	1	-	1	2	-
消 費	30	33	19	14	26	57	41
(南アフリカ)							
生 産	49	49	65	34	67	42	40
輸 出	13	14	14	15	9	10	11
消 費	36	35	51	19	58	32	29

〔上記以外の主要落花生油輸入国〕

オーストラリア	7	6	5	7	5	9	11
香 港	7	10	9	8	14	13	11
ベルギー	18	15	23	4	6	10	6
ビルマ	8	18	18	2	4	1	75
西ドイツ	42	19	27	18	28	47	41
スペイン	-	-	-	-	31	100	18

② ひまわり油

	1958	1959	1960	1961	1962	1963	1964
(ソ連)							
生産	1,577	1,019	1,341	1,608	1,614	1,442	2,026
輸出	51	81	90	120	150	234	167
輸入	2	-	2	-	-	2	2
消費	1,528	938	1,253	1,488	1,464	1,210	1,861
(アルゼンチン)							
生産	133	276	202	296	159	159	261
輸出	42	4	13	31	15	4	-
消費	71	272	189	265	145	155	261
(ルーマニア)							
生産	99	183	173	150	152	171	175
輸入	7	2	1	1	-	-	-
輸出	-	2	32	33	47	39	37
消費	106	183	142	118	105	132	138
(ブルガリア)							
生産	74	77	90	89	90	105	78
輸入	-	-	1	-	5	-	-
輸出	1	5	9	8	10	17	5
消費	73	72	82	81	85	88	73
(ユーゴ)							
生産	27	39	34	40	55	79	90
消費	27	39	34	40	55	79	90

	1958	1959	1960	1961	1962	1963	1964
(ハンガリー)							
生産	32	37	21	36	40	38	34
輸入	-	2	2	2	3	5	3
輸出	16	20	18	12	22	26	21
消費	16	19	5	26	21	17	16
(東ドイツ)							
生産	8	10	15	15	16	23	27
輸入	40	56	59	82	68	71	61
消費	48	66	74	97	84	94	88
(イタリア)							
生産	3	2	21	34	13	23	25
輸入	-	-	1	2	-	4	2
消費	3	2	22	36	13	27	27
(チェッコ)							
生産	12	14	15	17	24	13	12
輸入	8	16	16	17	28	32	20
輸出	-	1	2	-	-	-	-
消費	20	29	29	34	42	45	32
(西ドイツ)							
生産	7	8	8	8	7	11	10
輸入	10	11	21	40	44	51	56
輸出	1	1	3	3	3	3	4
消費	16	18	26	45	48	59	62

[ 上記以外の主要ひまわり油輸入国 ]

オーストリア	7	5	9	10	12	20	23
キューバ	-	-	-	29	26	40	25
スイス	2	4	3	5	8	11	14

③ ひまし油

	1958	1959	1960	1961	1962	1963	1964
(ブラジル)							
生産	66	76	99	92	99	106	137
輸出	54	47	41	91	60	76	109
消費	12	29	58	1	39	30	28
(インド)							
生産	50	51	47	48	45	45	45
輸出	20	35	58	20	26	38	25
消費	30	16	-11	28	19	7	20
(タイ)							
生産消費	6	1	8	-	5	6	4
(米国)							
生産	8	5	6	5	7	13	16
輸入	37	52	48	53	47	44	43
消費	45	57	54	58	54	57	59
(日本)							
生産	9	12	12	14	16	17	15
輸出	-	1	-	1	4	3	2
消費	9	11	12	13	12	14	13
(西ドイツ)							
生産	9	9	13	10	12	11	14
輸入	3	2	2	2	3	4	4
輸出	2	4	4	1	4	3	3
消費	10	7	11	11	11	12	15

	1958	1959	1960	1961	1962	1963	1964
(フランス)							
生産	9	7	11	5	12	14	11
輸入	16	7	17	26	21	23	24
輸出	-	-	-	1	2	1	1
消費	25	14	28	30	31	36	34
(英国)							
生産	6	5	4	5	9	14	9
輸入	15	13	22	17	13	10	20
輸出	1	1	1	1	1	1	1
消費	20	17	25	21	21	23	28

〔上記以外の主要ひまし油輸入国〕

ソ 連	7	6	6	6	13	11	22	15
-----	---	---	---	---	----	----	----	----

#### ④ 胡麻油

胡麻油の輸出入は世界的にほとんどない(1964年で輸出1,700トン, 輸入900トン)。従って, 主要生産国の胡麻油生産量はそのまま国内消費量とみて差支えない。第1節 1) -④表の製油の数字をそのまま掲げておく。

	1958	1959	1960	1961	1962	1963	1964
インド	210	153	131	154	192	181	193
中共	138	155	144	133	140	140	151
スーダン	52	55	21	70	27	43	41
メキシコ	48	52	53	60	63	61	66
ビルマ	22	28	27	32	35	22	29
日本	9	13	13	11	13	16	16
イタリア	8	9	11	8	9	14	11
ベネズエラ	13	11	24	18	21	25	28
米 国	5	4	4	5	4	5	5

⑤ やし油(やし核油)

	1958	1959	1960	1961	1962	1963	1964
(コンゴ)							
生産	49	56	56	53	45	41	56
輸出	57	59	52	49	41	32	45
消費	- 8	- 3	4	4	4	9	11
(英国)							
生産	128	110	111	106	98	98	90
輸入	-	2	2	2	1	1	1
輸出	4	12	9	3	8	12	4
消費	124	100	104	105	91	87	87
(オランダ)							
生産	62	72	56	66	60	59	62
輸入	2	2	-	-	-	-	1
輸出	10	23	18	14	15	19	20
消費	54	51	38	52	45	40	43

	1958	1960	1961	1962	1963	1964	1965
(西ドイツ)							
生産	54	62	72	59	57	60	61
輸入	19	23	14	11	16	16	13
輸出	-	-	1	5	4	3	4
消費	73	85	85	65	69	73	70
(フランス)							
生産	50	38	44	38	38	37	41
輸入	1	1	1	1	2	3	3
消費	51	39	45	39	40	40	44
(日本)							
生産	15	16	14	12	13	12	12
輸出	-	-	-	1	2	1	2
消費	15	16	14	11	11	11	10
(ベルギー)							
生産	14	15	11	11	15	9	11
輸入	3	3	1	2	3	3	1
輸出	4	3	1	1	1	3	1
消費	13	15	11	12	17	9	11
(ポルトガル)							
生産	13	11	8	7	8	8	9
輸出	1	-	-	-	-	1	1
消費	12	11	8	7	8	7	8

〔上記以外の主要やし核油輸入国〕

米 国	23	32	39	38	38	37	38
イタリア	5	7	11	9	8	7	7
カナダ	-	-	-	-	2	4	3



③ なたね油

	1958	1959	1960	1961	1962	1963	1964
(インド)							
生産消費	361	368	467	466	448	312	476
(中共)							
生産	370	320	300	292	333	357	385
輸出	4	18	14	2	-	-	-
消費	366	302	286	290	333	357	385
(パキスタン)							
生産消費	116	111	108	107	125	104	110
(カナダ)							
生産	16	-	46	45	-	17	75
輸出	1	-	-	-	-	-	-
消費	15	-	46	45	-	17	75
(ポーランド)							
生産	28	45	50	88	82	77	92
輸入	-	-	1	1	-	-	-
輸出	-	-	-	-	-	4	-
消費	28	45	51	89	82	73	92
(日本)							
生産	98	99	108	102	98	68	72
輸出	-	-	-	-	-	3	2
消費	98	99	108	102	98	65	70
(イタリア)							
生産	30	32	17	26	39	34	25
輸入	2	15	22	-	2	1	-
消費	32	47	39	26	41	35	25

	1958	1959	1960	1961	1962	1963	1964
(アルジェリア)							
生産	10	14	19	23	18	25	23
輸入	22	15	6	11	6	10	7
消費	32	29	25	34	24	35	30
(西ドイツ)							
生産	50	26	25	41	51	49	49
輸入	4	6	8	5	5	3	5
輸出	2	3	6	4	9	14	14
消費	52	29	27	42	47	38	40
(フランス)							
生産	63	34	39	37	32	25	43
輸入	-	-	-	-	-	5	-
輸出	23	15	4	11	10	7	12
消費	40	19	35	26	22	23	31
(東ドイツ)							
生産	44	65	63	60	57	44	61
輸出	-	2	3	1	-	-	-
消費	44	63	60	59	57	44	61
(スウェーデン)							
生産	20	49	10	38	44	25	45
輸入	-	-	1	-	-	-	-
輸出	10	11	8	5	18	15	9
消費	10	38	3	33	26	10	36
(チリ)							
生産・消費	6	12	12	10	18	18	20

(上記以外の主要なたね油輸入国)

オランダ	-	4	7	3	5	6	4
------	---	---	---	---	---	---	---

## 第二節 主要消費国の最近の消費状況

ここでは米国、英国、EEC諸国(フランス、西ドイツ、オランダ、イタリア、ベルギー)、ソ連、日本およびブラジルについて、Commonwealth Economic Committee, Vegetable Oils and Oilseedsの資料を中心に、調査対象油脂品目を主として、植物油の消費状況を調べた。

ここでの重点は、植物油の消費傾向とその中における各油脂品目の重要性の推移をみることである。

### 1) 米 国

米国の植物油は主として国産原料を使用する。例外は米国で産出しないコブラ、ココナツツオイル、あるいは生産量が不十分なひまに限定されている。米国の油料種子は、長期的に相当の増産になっており、その結果米国は今や世界最大の食物油輸出国になっている。大豆油がもっとも重要で近年その供給量は急激に伸びている。綿実油の生産も増加傾向にある。

落花生油は、近年落花生の生産が増加しているにもかかわらず消費は少ない。これは直接食用に供される落花生の割合が大きいからである。

近年の1つの大きな特徴として、米国では植物油の在庫が大きくなっているが、これは大豆の搾油が大豆かすの需要によって大きく左右されるため、国内市場ではもちろん、輸出に向けてもなおかつ余剰になるくらい大

豆油が生産されているからである。

1964年の植物油の供給事情は、いくつかの点で異常であった。国産油料種子を使つての油脂生産が、ここ数年来はじめて頭打ちとなった。これと同時に前年比輸出は正味50%程度、国内消費は10%以上増加した。こうした需要増加はすべて在庫で賄われたので、在庫は三分の一近くも減少し、1964年末の在庫は最近4年間の最低水準になった。

米国の品目別の植物油供給推移は次のようになっている。

	1958	1959	1960	1961	1962	1963	1964
・落花生油	31	37	32	41	30	40	19
大豆油	1,363	1,536	1,488	1,714	1,641	1,763	1,639
綿実油	565	522	609	642	703	693	595
コーン油	136	147	164	159	174	180	185
サフラワー油	-	-	-	-	52	52	29
オリーブ油	24	23	23	26	26	15	30
ココヤシ油 <sup>※</sup>	278	284	317	320	331	357	324
・やし核油	23	32	39	38	38	37	38
やし油 <sup>※</sup>	19	14	22	25	18	14	8
亜麻仁油	200	213	139	181	168	171	190
・ひまし油	48	60	56	60	64	64	61
その他							
合計	2,735	2,898	2,914	3,224	3,278	3,396	3,137

原料原産別油脂

生産量							
国産種子	2,807	3,142	3,160	3,201	3,493	3,587	3,589
輸入種子	194	207	222	224	205	164	152

戦略備蓄在庫

放 出	-	-	31	27	30	52	12	
正味輸出	※※	-266	-451	-499	-228	-450	-407	-616
年末在庫	※※※	493	603	591	776	800	1,074	745

(単位は千トン)

※一般調達局 (General Service Administration) の保有している戦略的備蓄在庫からの放出売却分を含む。

※※贈与積出し分は含まない。

※※※G・S・A. から放出された在庫で、未売却分は含まない。

1964年末の在庫減少がもっとも大きいのは大豆油と綿実油であるが、落花生油、コーン油、やし油およびサフラワー油の在庫も相当減少している。

近年の米国における需給関係の一つの顕著な特徴は、一般調達局の戦略的備蓄在庫からの余剰油脂の売却である。この在庫は主としてココやし油であるが、これは1964年はじめに一掃され、残っているのはやし油とひまし油であるが、そのうち1964年にはそれぞれ4,800トンと6,200トンが売却された。

米国では調査対象植物油の消費は相対的に少ない。圧倒的に多いのは大豆油である。しかし、最近では大豆の支持価格が引上げられる傾向にありこれが大豆油の生産を抑制し、代りにひまわり油や魚油の生産を刺激する効果が出てきている。つまり需要欠如のためではなく、農業政策が他の油や蛋白種子との競争を不可能にしつつあるからだといわれている。

## 2) 英国

近年の英国における植物油需給事情の主たる特徴は、全般的な油脂の供給面における植物油の割合が、絶対的にも相対的にも減少していること、また植物油の中でも種類によって相当の変化が生じていることである。英国の供給はすべて海外、とくに英連邦諸国産のものである。

1964年の植物油の総供給量は60万6,000トンで、前年より僅か少ないが、1951年の100万トンの記録をはるかに下回っている。

1964年における他の油脂の供給量は10.9万トンであるが、1963年の99万5,000万トン、1951年の55万トンを上回っている。バター、ラード、獣脂および魚油の伸びが大きい。かくして、英国の油脂供給量における植物油の割合は、1951年の65%から1964年の36%に低下している。工業用食用油、とくにやし油、亜麻仁油は大きく減少している。食用油では、落花生油から一般にそれより安い大豆油および綿実油に需要がシフトしてきている。もう一つの動きは、食用油の全部、その他の油脂の大部分が輸入されるようになったことである。植物油のほとんどは英連邦諸国原産であるが、需要のシフトの影響を大きく受けたのもこの英連邦諸国原産の油脂である。さらに、英連邦諸国は他の油脂の重要な供給国でもあり、とくにバターがそうであるが、動物性油脂の供給が増加した分のほとんどは、それ以外の国から輸入されている。たとえば、ラードや獣脂の場合には米国が主要な輸入先になっている。

英国の品目別の植物油供給推移は、次のようになっている。

(単位：千トン)

	1958	1959	1960	1961	1962	1963	1964
・落花生油	109	139	99	92	112	109	99
大豆油	24	42	62	45	53	65	60
綿実油	19	21	34	29	29	32	30
・なたね油	3	2	1	2	3	6	4
・ひまわり油	-	-	-	3	-	4	5
オリーブ油	2	3	3	3	3	2	3
ココヤシ油	78	58	72	98	81	85	82
・やし核油	128	101	101	103	95	80	90
やし油	182	193	173	159	110	111	114
亜麻仁油	98	108	89	92	88	76	77
・ひまし油	20	18	26	21	22	23	28
桐油	10	9	9	6	5	5	5
その他	5	4	-	-	12	3	9
合計	678	698	669	653	613	601	606
内訳：							
国産油 <sup>※</sup>	369	373	343	340	360	348	302
輸入油	309	325	326	313	253	253	304
搾油油料種子	932	1,030	1,008	925	1,009	1,005	888
年末在庫	85	82	84	78	81	72	56

※すべて輸入油料種子から搾油

1964年の植物油供給パターンには大きな変化はみられない。やし核油の供給は若干増加したが、落花生油の方は減少したぐらいで、他はほとんど保合いである。1964年におけるとくに著るしい特徴は、主として油かすの需要減退を反映して、国内の搾油量が89万トン弱に急減したことである。そのため輸入油が増加する結果になった。年末在庫は油脂価格

の高水準を反映して、数年来の最低を記録した。なお、1965年には主として綿実油の輸入が増加したこと、およびなたねの搾油量が増加したこともあって、植物油の供給は62万6,000トンに増加している。

### 3) EEC

EECの植物油消費は近年急増している。西ドイツ、フランス、オランダおよびベルギーは、それぞれなたねおよび亜麻仁を生産しており、またフランスはひまわりも生産しているが、植物油需要の大部分を輸入に依存している。イタリアはやや独特の立場にあり、国産油、主としてオリーブ油が国内需要全体の50~60%を賄っている。しかし、全体的にみて輸入油の重要性は高まってきている。イタリアを除くEEC各国は、輸入原料から加工した油脂を可成り輸出しており、オランダの如きは油脂生産量の40~50%を輸出している。

EEC全体の植物油供給推移は、次のようになっている。

	1960	1961	1962	1963	1964
落花生油	407	420	455	498	470
大豆油	338	264	311	336	425
綿実油	123	78	48	70	80
なたね油	79	84	104	101	76
ひまわり油	53	95	74	102	109
オリーブ油	472	531	556	462	658
ココヤシ油	340	388	309	347	389
やし核油	184	178	180	179	179
やし油	247	245	201	244	273
亜麻仁油	201	187	178	162	179
ひまし油	45	47	49	57	59
その他	57	49	58	69	78
合計	2,546	2,566	2,523	2,618	2,966



内訳：					
国産油	1,655	1,821	1,889	1,803	2,157
輸入油	891	745	634	815	809

この表から分かるように、EECの植物油供給量は1964年に大巾な増加を示し、約297万トンの新記録をたてた。これには恐らく在庫増の要因も入っているだろう。とくにイタリアでは1963～64年のオリーブ油の生産が多かったために、1964年末の在庫は相当規模になっていたものとみられる。いずれの国も、1964年には相当の供給増加を報告しており、オランダを除いて、すべての国で新記録の水準に達した。品目別にみると、オリーブ油の伸びが非常に大きいが、これは前記のようにイタリアの収穫増によるものである。その他供給増になったのは大豆油、ココヤシ油、やし油、綿実油、亜麻仁油など。反対に供給減になったのは落花生油、なたね油。

輸入はほとんど変化なく、供給量の増加はすべて輸入および国産油料種子を原料とする国産搾油量の増加で賄われた。

国別、品目別の供給推移は次のようになっている。

## ① フランス

(単位：千トン)

	1958	1959	1960	1961	1962	1963	1964
・落花生油	271	279	292	307	305	326	321
大豆油	5	5	10	6	9	17	28
・なたね油	20	18	11	19	9	18	7
オリーブ油	17	22	18	23	19	12	23
ココヤシ油	61	50	51	60	59	59	61
やし核油	48	38	39	41	40	38	40
やし油	27	26	32	29	29	35	38
亜麻仁油	50	44	50	50	42	38	48
ひまし油	22	13	27	29	30	36	34
その他	1	3	11	5	10	7	14
合計	522	498	541	569	552	586	614
内訳							
国産油 <sup>※</sup>	387	350	359	377	377	397	389
輸入油	135	148	182	192	175	189	225
在庫	58	71	79	102	77	92	77

※主として輸入油量種子を原料とする。但し、なたね油の大部分および亜麻仁油およびひまわり油の一部は国産原料を使用したもの。

## ② 西ドイツ

(単位：千トン)

	1958	1959	1960	1961	1962	1963	1964
落花生油	83	49	50	50	74	58	59
大豆油	101	153	194	157	174	191	236
綿実油	53	110	101	72	46	66	72
なたね油	51	27	21	33	43	37	36
ひまわり油	16	18	26	45	47	58	62
オリーブ油	2	2	2	4	4	2	3
ココヤシ油	184	133	195	203	178	191	221
やし核油	72	84	85	65	70	74	70
やし油	71	67	69	73	75	89	105
亜麻仁油	75	84	90	80	78	73	76
ひまし油	10	8	11	11	11	11	15
桐油	5	5	5	5	4	3	3
その他	3	4	-	-	-	-3	-3
合計	726	744	849	798	804	850	955
内訳：							
国産種子搾油量	20	20	21	24	37	32	35
油脂換算輸入種子	414	381	450	451	474	458	545
輸入油	292	343	378	323	293	360	375

## ③ オランダ

(単位：千トン)

	1958	1959	1960	1961	1962	1963	1964
落花生油	18	15	5	7	10	6	5
大豆油	30	55	70	42	51	54	79
綿実油	2	6	9	1	-	1	3
なたね油	7	11	6	3	7	7	4
ひまわり油	2	3	4	10	5	9	5
コーン油	3	4	1	1	-	2	3
ココヤシ油	26	11	38	68	17	39	47
やし核油	52	53	38	51	46	40	41
やし油	80	74	82	84	45	62	66
亜麻仁油	26	31	29	27	25	22	27
その他	5	8	9	5	9	13	12
合計	251	271	291	299	215	255	292
内訳：							
国産種子搾油量	2	1	-	1	-	1	-
輸入種子 "	233	228	246	258	244	229	252
油脂輸入(+), 輸出(-)	+16	+42	+45	+40	-29	+25	+40

## ④ イタリア

(単位:千トン)

	1958	1959	1960	1961	1962	1963	1964
落花生油	43	49	31	31	35	78	55
大豆油	25	42	47	45	59	59	58
綿実油	2	3	1	1	1	1	1
コーン油	9	10	11	15	16	17	18
なたね油	31	49	40	28	44	38	28
ひまわり油	2	3	20	37	13	27	29
胡麻油	8	9	12	10	10	15	13
グレーブシート油	13	14	12	14	19	15	18
オリーブ油	418	349	452	504	533	447	631
ココヤシ油	28	21	35	31	32	32	31
やし核油	5	8	12	9	8	7	8
やし油	19	22	31	25	25	28	28
亜麻仁油	23	21	24	22	22	19	18
ひまし油	3	2	4	4	4	5	4
桐油	1	1	1	1	2	1	1
その他	12	14	18	12	10	13	9
合計	642	617	751	789	833	802	950
内訳:							
国産種子搾油量	445	344	374	461	479	371	636
輸入種子	90	112	126	154	176	229	192
輸入油	107	161	251	174	178	202	122

## ⑤ ベルギー

(単位:千トン)

	1958	1959	1960	1961	1962	1963	1964
落花生油	38	41	29	25	31	30	30
大豆油	5	12	17	14	18	15	24
綿実油	4	4	12	4	1	1	3
なたね油	1	2	1	1	2	1	1
ひまわり油	-	-	2	2	5	6	8
コーン油	2	3	3	4	2	3	6
ココヤシ油	16	10	21	26	22	26	29
やし核油	14	14	10	12	16	11	11
やし油	28	37	33	34	27	30	36
亜麻仁油	5	9	8	8	11	10	10
その他	3	-3	2	+	-	-1	8
合計	116	129	138	130	135	132	166
内訳:							
油脂換算油量種子*	76	82	79	95	102	86	108
輸入油	40	47	59	35	33	46	58

※少量の亜麻仁およびなたね油を除いて、すべて輸入種子からの搾油量

## 4) ソ連

ソ連の植物油供給パターンは、植物油の大部分が単一の国産油料作物(ソ連の場合は、ひまわり種子)を原料として生産されているという点で、米国のそれと類似している。ひまわり油に次いで重要な地位を占めているのは、これも国産油料作物を原料とする綿実油である。植物油は、ソ連で消費されている油脂全体の約半分を占めていると推定される。ひまわり生産量の増加は、1960年以来食用油および油料種子の輸入需要を減少さ

せただけでなく、食用植物油の輸出を増大させたので、今やソ連は正味の油脂輸出国になっている。

ソ連の植物油供給推移は、次のようになっている。(単位:千トン)

	1958	1959	1960	1961	1962	1963	1964
落花生	18	10	7	-	-	-	-
大豆油	83	95	91	-	-	-	-
綿実油	354	375	398	-	-	-	-
ひまわり油	846	1,259	985	-	-	-	-
からしな種子	10	10	10	-	-	-	-
亜麻仁油	77	57	35	-	-	-	-
ひまし油	6	9	7	-	-	-	-
桐油	-	1	-	-	-	-	-
その他	48	40	27	-	-	-	-
合計	1,442	1,856	1,560	1,786	2,081	2,160	2,205
輸出入:							
輸出:							
食用植物油 <sup>※</sup>	51	81	90	120	150	255	187
輸入:							
食用植物油 <sup>※※</sup>	72	70	58	54	15	37	43
ひまし油	7	6	6	13	11	22	15
桐油	19	21	10	4	7	2	2
その他	-	-	-	-	2	1	4
差引輸入(+) もしくは 輸出(-)	+ 47	+ 16	- 16	- 49	-115	-193	-123
総計	1,489	1,872	1,544	1,737	1,966	1,967	2,082

※主としてひまわり油で、これに綿実油および大豆油が若干含まれていると推定される。

※※1960年以前は主として中共からの落花生油および大豆油と推定される。亜麻仁油も含む。

## 5) 日本

日本の植物油の供給量は近年著るしい増加傾向にある。大豆油がもっとも多いが、綿実油、なたね油、サフラワー油、ココヤシ油、亜麻仁油、米ぬか油などの伸びも大きい。米ぬか油およびなたね油は別として、こうした植物油の生産原料は輸入に依存している。国産大豆の収穫量は多いが、これはほとんど直接食用に消費されている。油の輸入は少ない(ヤシ油は例外)。1962~64年には、日本は輸出入差引きで植物油の輸出国になっている。1963年の急伸後、1964年における植物油の供給量は11%と比較的穏健な伸びを示した。大豆油が記録を更新し、また綿実油、米ぬか油、サフラワー油も増産になった。これに対して、なたね油は1963年の最低水準を脱した程度の増産であった。近年なたね油の生産が減少を続けてきたのは、主として国産なたねの収穫減によるもので、その結果、植物油に占めるなたね油の割合は比較的小さくなってきている。

日本の植物油供給量推移は、次のようになっている。



(単位：千トン)

	1958	1959	1960	1961	1962	1963	1964
大豆油	109	121	140	139	160	206	216
綿実油	17	21	21	20	28	36	45
なたね油	102	93	83	97	84	56	66
サフラワー油	10	22	32	31	22	54	79
カボック油	6	7	7	8	9	9	7
胡麻油	3	4	8	4	5	6	8
ココヤシ油	26	34	46	54	53	65	59
やし核油	16	18	13	13	11	11	10
やし油	10	17	13	14	13	16	17
亜麻仁油	19	31	31	38	30	35	36
ひまし油	9	10	12	13	12	13	13
桐油	4	5	6	6	4	3	5
米ぬか油	26	32	38	40	40	48	62
その他	3	2	15*	9	8	14*	10
合計	360	417	465	486	479	572	633
内訳：							
国産種子搾油量	125	118	104	131	117	78	96
輸入	237	300	359	362	356	476	514
差引輸入 (-)							
もしくは輸出(+)	- 2	- 1	+ 2	- 7	+ 6	+18	+23

\*ひまわり油をそれぞれ9および8(千トン)含む。

#### 6) ブラジル

ブラジルでは近年植物油は増産傾向を辿っており、国内需要の増加を賄うだけでなく、輸出を大量に行なうことができるようになってきた。国内

生産がもっとも大きく伸びているのは綿実油である。大豆油は、大豆として可成り輸出されるので、搾油量の伸びはそれ程大きくない。食用油の輸出には変動があるが、ブラジルの輸出油の大半を占めているのはひまし油である。オリーブ油の場合は別として、油料種子はほとんど国産である。しかし、1964年は天候が悪く不作だったために、相当量の食用油を輸入する一方、食用油および油料種子の輸出は禁止された。

ブラジルの食用油供給量推移は、次のようになっている。(単位:千トン)

	1958	1959	1960	1961	1962	1963	1964
落花生油	72	68	62	90	89	69	41
大豆油	7	13	16	21	29	30	36
綿実油	73	83	91	113	131	124	132
コーン油	2	4	3	6	4	5	4
コーヒー油	-	-	4	5	4	2	2
オリーブ油	4	7	12	8	10	3	10
パンプー油	42	33	57	51	55	44	51
亜麻仁油	8	4	9	8	7	9	5
ひまし油	25	28	12	12	18	14	22
その他	35	18	24	22	19	16	24
合計	268	258	290	336	366	316	327
内訳:							
国産油*	325	306	329	433	437	408	421
輸入油	57	48	39	97	71	92	94

\*原料はほとんど全部国産

### 第三節 主要消費国の原料輸入事情

米国が輸入種子に依存するウエイトは小さい。植物油脂原料の約95%は国産種子で、輸入原料はひま、ひまわり、ゴマなどに限られている。

英国は搾油原料の全量を輸入している。それでも植物油脂を国産できるのは、全供給量のおよそ50%で、残りの50%は油脂としてさらに輸入している。

フランスはなたね油の大部分およびひまわり油の一部を除いては、ほとんどが輸入種子に依存しており、油脂供給量の35%も輸入油である。

西ドイツもなたねなど一部（油脂換算で）国産種子を油脂原料とするものは、油脂供給量の僅かに3~4%で、55%は輸入種子に依存し残りの約40%は油脂として輸入している。

オランダでも、植物油脂の原料はほとんど輸入である。しかし油脂の輸入量は15~20%内外である。

イタリアでは主要植物油の約65%がオリーブ油で、これを自給しているが、残りは全て、種子または油脂で輸入しなければならない。

ベルギーもなたねの一部を除いては、全量を輸入種子または油脂に依存しているが、油脂として輸入するものは約35%、供給量の65%は輸入種子の搾油によっている。

ソ連はほとんど全量を自給し、中共から落花生、大豆油などを若干量輸入するほか、ひまし油なども輸入はしていたが、近年ひまの大増産によっ

て、ひまし油の輸入も事実上ゼロに近くなっており、今後はむしろ種子（とくにひまわり）油脂とも輸出を積極的に行なうものとみられる。

日本もまた植物油脂は大部分その原料を輸入種子に依存しており、国産種子の比率は減少している。ただ油脂は積極的な輸出増進で輸出国に転じている。

#### 第四節 主要消費国の品目別油脂供給量と種子輸入状況

品目別に主要消費国の油脂供給量と種子輸入量をみると次のとおりである。

落花生油はフランスを除いて、ほとんど横バイ。英国、西ドイツ、オランダでは減少傾向にあり、落花生の輸入量もこの3国は少なくなっている。イタリアはオリーブの生産によって、落花生油への依存度も決まってくるので需要は不安定である。

米国はほとんど輸入する必要なし。

ヨーロッパでひまわりを輸入しているのはイタリア、西ドイツであるが、西ドイツは供給量の伸びに比して、種子の輸入量は伸びていない。イタリアは種子の輸入量にほぼ比例している。

ひまし油の供給量はイタリア、日本を除いては、米英、西独、フランスともに伸びている。しかしその割にひまの輸入量が各国とも増加していないのは、ひまし油の輸出増加によるものと思われる。この中でもブラジル

は80%以上を輸出、米国はひまし油として輸入している。ひましの輸入増加が目立っているのは西ドイツ、日本となっている。

イタリア、日本に関する限り、ゴマ油の供給量、ゴマの輸入量ともに増大している。

やし核油の供給量は英国、オランダ、フランス、日本、ベルギーいずれも減少しており、やし核の輸入量も相対的に下降している。西ドイツは横バイ、米国も50年代より上昇したものの、ここ5年間の伸びはみられない。

なたね油の供給量は日本、西ドイツ、フランスなどで減少傾向である。それにも拘らず日本でなたねの輸入量が増大しているのは、国産なたねが減少しているからである。イタリア、西ドイツなどの輸入量は不安定である。

1) 落花生油の供給量と落花生の輸入量 (単位千トン)

	1958	1959	1960	1961	1962	1963	1964
米 国	31 1	37 -	32 -	41 1	30 -	40 1	19 1
英 国	109 210	139 232	99 132	92 163	112 212	109 195	99 147
フランス	271 405	279 414	292 433	307 487	305 454	326 528	321 433
西ドイツ	83 95	49 71	50 56	50 82	74 109	58 28	59 46
オランダ	18 76	15 65	5 32	7 45	10 55	6 40	5 52
イタリア	43 89	49 102	31 56	31 72	35 80	78 175	55 128
ベルギー	38 57	41 67	29 25	25 59	31 74	30 61	30 72
ソ 連	18 38	10 35	7 20	- 24	- 27	- 26	- 29

(註) 上段数字は落花生油の供給量、下段数字は落花生の輸入量

2) ひまわり油の供給量とひまわりの輸入量 (単位千トン)

	1958	1959	1960	1961	1962	1963	1964
ソ 連	846	1,259	985	-	-	-	-
英 国				3		4	5
西ドイツ	16 19	18 23	26 22	45 23	47 20	58 30	62 29
オランダ	2 2	3 1	4 1	10 2	5 1	9 2	5 1
イタリア	2 2	3 3	20 53	37 92	13 32	27 61	29 66
ベルギー	- 3	- 2	2 3	2 3	5 4	6 5	8 4

3) ひまし油の供給量とひましの輸入量 (単位千トン)

	1958	1959	1960	1961	1962	1963	1964
ブラジル	25	28	12	12	18	14	22
米 国	48	60	56	60	64	64	61
英 国	20 14	18 12	26 9	21 11	22 21	23 31	28 19
フランス	22 21	13 16	27 25	29 10	30 26	36 31	34 25
西ドイツ	10 20	8 21	11 28	11 22	11 26	11 24	15 32
イタリア	3 7	2 4	4 10	4 9	4 9	5 11	4 8
ソ 連	6	9	7	-	-	-	-
日 本	9 21	10 27	12 27	13 32	12 35	13 37	13 34

4) ゴマ油の供給量とゴマの輸入量 (単位:千トン)

	1958	1959	1960	1961	1962	1963	1964
日 本	3	4	8	4	5	6	8
	17	27	27	22	28	32	33
イタリア	8	9	12	10	10	15	13
	17	19	25	19	20	32	26

5) やし核油の供給量とやし核の輸入量 (単位:千トン)

	1958	1959	1960	1961	1962	1963	1964
英 国	128	101	101	103	95	80	90
	273	234	237	225	209	208	191
オランダ	52	53	38	51	46	40	41
	132	153	120	141	128	125	132
西ドイツ	72	84	85	65	70	74	70
	114	131	153	126	122	127	129
フランス	48	38	39	41	40	38	40
	106	81	94	81	81	78	88
日 本	16	18	13	13	11	11	10
	32	33	30	26	28	25	25
ベルギー	14	14	10	12	16	11	11
	29	31	23	23	32	20	24
米 国	23	32	39	38	38	37	38

6) なたね油の供給量となたねの輸入量 (単位千トン)

	1958	1959	1960	1961	1962	1963	1964
日 本	102	93	83	97	84	56	66
	16	26	50	20	36	86	75
イタリヤ	31	49	40	28	44	38	28
	76	81	39	64	102	90	64
西ドイツ	51	27	21	33	43	37	36
	87	18	2	24	31	45	32
英 国	3	2	1	2	3	6	4
	4	4	4	5	7	8	12
フランス	20	18	11	19	9	18	7
	4	4	39	33	15	11	7



## 第五章 南米の輸出事情

### 第一節 南米の種子生産状況

南米における調査対象油料作物6品目の生産状況をみると次表の通りである。

落花生はブラジルで50～60万トン台、アルゼンチンで30～40万トン台生産され、パラグアイ、エクアドルで1万トン台、ウルグアイでは数千トン台、他の国でも若干量は見込まれる。

ひまわりはアルゼンチンが66年には90万トン台に乗せ、世界第2位の生産国となっており、ウルグアイは数万トン台、チリーは5万トン前後の生産である。その他ブラジルなどでも生産実績はあるが千トン台である。

ひまはブラジルが世界最大の生産国で20万トン台を推移しており、その他エクアドル、パラグアイが1～2万トン、ペルー、アルゼンチンが数千トン生産している。

ゴマはベネズエラ、コロンビアで6～7万トン前後が生産され、その他の国でも生産はされているもようだが、少ない。

油やしはブラジル、コロンビア、ベネズエラ、エクアドルなどにおいて小規模に生産されているが全量が国内消費で、これらの国はむしろやし油を輸入している。

なたねはアルゼンチン、チリーで生産されているが、アルゼンチンでは数千トン、チリーで5万トン台で、世界の生産量に比較すれば1%にも満たない量である。

現在の生産状況を世界的にみた場合、ひま、ひまわり、落花生が南米では注目される油脂原料であるが、このうち輸出されている種子は、ひまお

よびブラジルの落花生のみで、ほとんど他国へ供給されるほどの生産ではないというのが現状である。

種子の生産、輸出入状況一覧

	落花生	ひまわり	ひま	ゴマ	油やし	なたね
	生輸 産出入	生輸 産出入	生輸 産出入	生輸 産出入	生輸 産出入	生輸 産出入
ブラジル	○○	—	○	—	○	
アルゼンチン	○—	○	○			○
コロンビア				○	○	
チリ		○				○
ペルー			○			
ベネズエラ				○ ○	○	
ポリビア						
ウルグアイ	○	○				
パラグアイ	○		○○			
エクアドル	○		○○	○	○	

○印は実績あるもの

—印は少量あるもの

無印はほとんどないもの

油脂の生産、輸出入状況一覧

	落花生	ひまわり	ひま	ゴマ	油やし	なたね
	生輸 産出入	輸 産出入	輸 産出入	輸 産出入	輸 産出入	輸 産出入
ブラジル	○ ○		○ ○		○ ○	
アルゼンチン	○ ○	○ ○		○		○
コロンビア				○		
チリ		○ ○				○
ペルー			○			
ベネズエラ		○		○		○
ボリビア		○	○			
ウルグアイ	○ ○	○ ○ ○		○		○
パラグアイ		○	○ ○			○
エクアドル				○	○ ○	

○印は実績あるもの

—印は少量あるもの

無印はほとんどないもの

南米から輸出される油脂原料（種子）で最も大きく、重要なものはひま  
である。ブラジルが1960年以来輸出を行っていないので、エクアド

ル、パラグアイが中心となっている。ベルーも輸出しているが、輸出量は年々減少し、64年には26.0トンと量が少ない。世界的な供給状況をみると中国、タイを中心としたアジアがほぼ55%（66年推定）を占め、タンザニア、スーダン、ケニアなどのアフリカが約30%、残り15%内外が南米となっている。一方輸入国は日本（約35%）および英国西ドイツ、フランス、イタリアなどヨーロッパ諸国であるが、タイ、中共が、日本を主要相手国としているため、アフリカ、南米ともヨーロッパが主要仕向国となっている。ヨーロッパといっても、種子を輸入している国は前記の4カ国とベネルックス3カ国にほぼ限定されつゝあり、特に4カ国が主体である。

Foreign Agriculture Circular (FFO567, Feb, 1967) によれば、1966年度のひまおよびひまし油の生産、貿易における主要な要因として①ソ連におけるひまの急激な増産がひまし油の輸入を事実上不要とした②世界の主要ひま生産国として中共が出現した③ひまの輸入が増加したこと、以上の3点を上げている。しかしひまの輸入が増加したといっても、これは、大部分日本およびフランスの輸入増によるもので、他はほとんど変化がなかった。

（なお英国も急増したが63年の水準と同じである）

ブラジルが、種子の輸出から油脂の輸出に切り換えたように、エクアドルでも国内搾油の方向に進んでいる。ブラジルはひまの輸出が増大して安値となり、外貨収入が減少したため、ひまの全量を搾油する計画で1960年にひまの輸出を禁止したが、このためアメリカ人のグループが計画していたひまの合理的作付の促進を廃棄させ、ひまし油の輸出によって米国市場を制圧しはじめた。参考までに米国のひまおよびひまし油の輸入推移をみると次のとおり。

米国のひま輸入推移

(単位 トン)

	1955 ~59(平均)	1963	1964	1965	1966
南 米					
ブラジル	16,655	0	0	0	0
エクアドル	1,738	1,648	0	504	810
パラグアイ	246	0	0	0	0
その他	20	0	0	0	0
計	18,659	1,648	0	504	810
その他	1,417	658	15	5	40
統 計	20,076	2,306	15	509	850

米国のひまし油輸入推移

(単位 トン)

	平均 1955-59	1963	1964	1965	1966
北 米	12	0	0	0	27
南 米					
アルゼンチン	401	0	231	1,010	0
ブラジル	25,775	37,307	41,661	35,652	37,359
その他	186	0	0	0	0
計	26,362	37,307	41,892	56,662	37,359
ヨーロッパ	1,847	298	2	301	1,199
アフリカ	1,331	491	0	0	0
アジア					
インド	15,881	15	16	15	73
日本	59	3,791	1,469	1,287	8,197
計	15,940	3,806	1,485	1,302	8,270
総 計	45,480	41,903	43,379	58,265	46,828

第二節 品目別輸出状況

1) 落花生 (面積=千エーカー, 生産=千トン)

	1960 —61	1961 —62	1962 —63	1963 —64	1964 —65
ブラジル					
面積	1,078	1,177	1,045	1,137	1,160
生産	575	638	594	447	660
輸出(種子)	—	4	22	14	—
(油)	—	—	0.2	8.3	—
アルゼンチン					
面積	496	714	690	895	960
生産	262	426	307	325	432
輸出(種子)	—	—	—	—	—
(油)	49.8	30.3	96.9	35.9	0.1
パラグアイ					
面積	25	26	25	27	30
生産	9	9	8	10	11
輸出(種子)	—	—	—	—	—
(油)	—	—	—	—	—
ウルグアイ					
面積	21	25	23	19	16
生産	7	8	7	7	1
エクアドル					
面積	17	17	27	35	—
生産	11	8	9	14	12

落花生はブラジル、アルゼンチン両国にとって油脂原料として、主要な産物となっており、年々その生産量は増大している。両国とも大部分を搾油に向け、ブラジルの輸出量は生産量の1.5%内外、その相手国はオランダ、イタリアなどであるが、輸入国がブラジルに依存しているウエイトは小さい。アルゼンチンの輸出量は1965年度でもイタリア、スペインなどに550トン程度で、アルゼンチンとしては、むしろ落花生油を輸出している。

#### アルゼンチンの落花生油輸出状況

(単位：千トン)

	1962	1963	1964	1965
オランダ	50.6	23.1	0.1	36.7
スペイン	29.2	7.2	—	—
西ドイツ	12.6	3.9	—	15.1
英国	0.8	—	—	0.5
ベルギー	0.9	0.8	—	1.4
フランス	0.7	0.4	—	—
その他	2.1	0.5	—	8.2
計	96.9	35.9	0.1	61.9

Commonwealth Economic Committee及び  
Comercio Exterior Argentinoより作製

## 2) ひまわり

(単位:千トン)

	1962 —63	1963 —64	1964 —65	1965 —66	1966 —67
アルゼンチン					
(生産)	462	460	757	782	900 ~925
(輸出) 種子	—	—	—	—	—
油	14.7	4.3	—	35	77
ウルグアイ					
(生産)	87	63	39	99	...
(輸出) 種子	—	—	—	—	—
油	—	—	—	—	—
チリー					
(生産)	40	45	47	50	...
(輸出) 種子	—	—	—	—	—
油	—	—	—	—	—
輸入油	0.5	0.2	—	—	—

アルゼンチンは世界第2位のひまわり生産国となっているが、第1位のソ連に比べると生産量は少なく、およそ1/6程度にすぎない。しかし年々作付面積が拡大し(66年度2,919,000エーカー)生産量も増加しているが、そのほとんど全量が国内消費され、輸出は1965年にウルグアイに158トン供給されたにすぎない。

ウルグアイ、チリーでもひまわりは生産されているが、種子は輸出して



いない。ウルグアイでは67年には、干ばつ、洪水、霜害などで7万トンに減産するものとみられ、ひまわり油の輸出も皆無になるものと予想されている。

世界的にみて、種子の輸出はソ連を除いてはほとんど増加しておらず、ひまわり油の輸出量が急激に増加している。現在一部東欧圏を除いては、ヨーロッパでも種子を輸入しているのはイタリア、西ドイツなどに限られている。

### 3) ひま

南米のひま生産推移

(単位 トン)

	1962	1963	1964	1965	1966
ブラジル	223,178	327,958	396,000	352,211	229,500
エクアドル	21,924	22,820	25,803	16,866	12,897
パラグアイ	13,597	10,729	11,682	13,876	12,870
ペルー	7,416	7,668	7,938	—	—
アルゼンチン	6,052	6,052	4,860	4,365	—
その他	992	994	990	992	990
計	273,159	376,221	447,273	388,310	256,257

南米のひま輸出推移

(単位 トン)

	1962	1963	1964	1965	1966
ブラジル	0	0	0	0	0
エクアドル	21,195	20,829	24,888	16,257	11,700
パラグアイ	13,597	10,729	11,682	13,876	12,870
ペルー	1,113	860	258	—	—
計	35,905	32,418	36,828	30,133	24,570

南米のひまし油輸出推移

(単位:千トン)

	1962	1963	1964	1965	1966
ブラジル	90,115	60,300	110,134	139,041	90,000
パラグアイ	123	61	143	30	—
	90,238	60,361	110,277	139,071	90,000

(以上 Foreign Agriculture Circular Feb. 1961)

ひまは南米で最も注目されるべき油脂原料である。対象6品目のうち、油脂原料として積極的に輸出されているものはひま以外にない。

ブラジルが世界の生産国であり、64年には大豊作によって、世界の全生産量の45%を生産した。かつてはブラジルでも、ひまは重要な輸出品目であったが、価格ダウンによって政府は60年以後、種子の輸出を禁止して、ひまし油の最大輸出国に転じ、66年には世界の82%を供給した。

ひまは多くの生産国で他の作物と混播されている。ブラジルでも例外ではなく、至る所で耕作されているものの、そのほとんどは綿花または一般にはとうもろこしと播種されている。この点は油料作物として選定する場合にひとつの重要なポイントで、単一の栽培では常に大きなリスクを併なう。

だが両作物の組み合わせが効果を上げるのは第1年で、第2年に入るとひまの落すカゲが食用作物の成長を妨げるため、ひまの栽培に向けられる面積が制限されるなどの問題はある。

ブラジルでは、ひまの生産が急ピッチで増大してはいるが、実際にはブラジル政府はひまを無視しているといわれる。わずかにブラジル銀行がその農林部を通じて行なっている融資があるが、組織だった専門化した栽培

が行なわれていないので、これを利用することは難しい。ブラジル政府農業省の機関である東部農業および畜産試験研究所もサンパウロ州カンピナスの農業研究所も何もしていないし、その非合理的で体系をなさない栽培法のまゝ、安値で、しかも増産を続けている。

ブラジルの州別ひま生産状況

(単位 トン)

州名	1959	1960	1961	1962	1963
バイア	62,912	103,600	75,939	70,166	85,892
サンパウロ	35,125	29,622	41,212	49,211	50,862
ペルナンブコ	30,093	37,348	26,800	44,005	38,680
セアラ	21,472	23,215	30,615	79,123	29,363
パラナ	9,340	10,152	11,268	13,685	17,143
ミナスジェライス	11,723	11,895	11,643	8,393	8,184
計	180,619	224,695	207,801	224,961	239,860

ブラジルの州別ひま栽培面積

(単位ヘクタール)

州名	1959	1960	1961	1962	1963
バイア	70,484	80,167	91,253	76,298	88,098
サンパウロ	40,192	32,340	42,071	46,459	53,292
ペルナンブコ	59,491	62,009	63,950	70,674	68,463
セアラ	36,778	44,274	48,581	52,639	57,565
パラナ	7,722	7,881	8,017	11,059	14,266
ミナスジェライス	13,766	13,737	13,391	12,008	11,154
計	243,576	254,595	283,405	284,180	307,187

(The Brazilian Geographical and Statistical Institute 推計)

ブラジルのひまし油は、輸出が基本的な重要要素となっているので、ひまの安値を維持しなければならない。1959～63年の輸出比率をみると次のとおりとなっている。

1959	1960	1961	1962	1963
62%	76	86	76	84

しかし64年の増産に比し、65、66年は大巾な減産をみたため、原価高となり、1967年1月にはひまし油1ブラジルタンクもの、ニューヨーク瘦しの1ポンド当り卸価格は15.8セントにまで上昇した。(1965年13.4セント、1966年1月14セント、1966年平均15.セント)

ブラジルにおける最大のひまし油製造会社はSANBRAで生産量の全量を輸出しているが、63年の輸出量はブラジル総輸出量の約40%を占めた。SANBRAが事実上ひま市場を支配し、指導的地位を占めているといわれる。

次に会社別の輸出量を記した。

1963年ブラジルの会社別ひまし油輸出状況 (単位トン)

会社名	米 国	カナダ	フランス	スウェーデン	西 独	英国	ハンガリー	合 計
SANBRA	600	—	7620	—	200	357	2030	11107
Indiustria Coelho S/A	4050	—	—	—	—	—	—	4050
Ceros & Oleos da Bahiadtda	1650	—	—	—	600	—	1100	3350
CiaIndiustrial da Bahia	650	—	150	400	200	300	1610	3310
Indiustria Resegue de Oleos Vegetais S/A	3000	—	—	—	120	—	—	3120
Cia Tabril de Najare	1476	—	—	—	—	—	250	1726
Oleos Vegetais da Bahia	880	—	—	—	390	—	330	1600
OIPEL	300	—	—	—	450	—	—	750
Oleifera piantan S/A	100	—	—	—	100	—	—	200
州 計	12706	—	7770	400	2060	657	5320	29213

ブラジルとインドのひまし油輸出シェアは次のとおりである。

(世界輸出量に占める比率)

	1962	1963	1964	1965	1966
ブラジル	5.5	6.0	7.6	8.2	8.3%
インド	2.4	3.0	1.6	7	0.8%

エクアドルは1965年度においては世界3位のひまし油輸出国であり、政府の食用油料種子生産拡大策が進められているにも拘らず、減産傾向にあ

り、66年は64年の約2分の1程度になるものとみられている。これは近年エクアドルではひまに代わる農産物、綿花やコーヒーの方が農民に対してより多くの報酬をもたらすことが原因となっている。農業畜産省でも、油料種子増産計画の中にひまを加えて増産対策をたてており、国内市場価格の上昇や需要増大などの条件の好転があれば、生産は増大するであろう。

ひま生産量のほとんどが輸出されているが、現在国内に搾油とひまし油輸出を目的とした工場が2社設立されており、これが稼働をはじめれば、ひまの輸出はなお減少する見込である。

エクアドルの主要輸出国は西ドイツ、オランダ、ベルギー、フランスなどで、対米輸出は、1962年の5950トンから、1963年には1809トン、1964年にはついに0となってしまった。

#### 4) 胡 麻

	(単位：千トン)				
	1962	1963	1964	1965	1966
	-63	-64	-65	-66	-67
ベネズエラ					
(生産)	28	31	47	54	65
(輸出)	—	—	—	—	—
コロンビア					
(生産)	20	35	49	71	
(輸出)	—	—	—	—	

ゴマはベネズエラ、コロンビアで主に生産され、ブラジルでも生産はみられるが1,000トン前後である。ベネズエラではゴマ油が主要油脂であ

るため、南米では唯一つの種子輸入国となっており、域内貿易ということでは最も注目される。コロンビアでもゴマは綿実と共に主要な油脂であるが、生産も急ピッチで種子を輸入した実績はない。

### 5) 油やし (やし核)

油やしはブラジル、コロンビア、ベネズエラなどで小規模に栽培されているが、信頼すべき資料は全くない。少なくとも現在までのところ輸出された実績はない。南米ではむしろココやし油が使用され、アルゼンチン、コロンビア、ペルー、エクアドル、ウルグアイでは油脂を輸入している。やし種としては、ブラジルでババノー油が大量に生産され、ベネズエラも大量のやし油輸出があるが、これも *Acromia Sclerocarpa* とよばれるコブラ種であるとされている。パーム油はエクアドル、ベネズエラ、アルゼンチンでも生産されているとみられ、若干量の油脂輸入もある。またパーム核油はブラジルで輸入実績がある。

### 6) な た ね (面積=千エーカー, 生産=千トン)

	1960	1961	1962	1963	1964
	-61	-62	-63	-64	-65
チリ					
面積	71	73	104	109	119
生産	35	28	50	50	56
アルゼンチン					
面積	3	2	4	7	5
生産	1	1	1	4	2

なたねはチリーで毎年 5 万トン前後が生産され、増産傾向にある。しかし国内需要を充分満たすほどではなく、油脂を輸入しなければならない状態であるから、もちろん種子の輸出は考えられない。

### 第三節 国別油脂、種子の輸出入状況

#### 1) アルゼンチン

アルゼンチンはひまわり油、落花生油が主体で、これを油脂としても輸出しているが、種子としては全く輸出していない。油脂の輸入はひまし油、パーム油があるが、主な輸入油脂はココヤシ油である。

#### 2) ブラジル

ブラジルは綿実油が中心で、落花生油、大豆油、パプア油とよばれるやし油の一種が主要国産油である。ひまは全量国内搾油され 80% 以上が輸出されている。種子としては落花生が輸出されている。油脂の輸入で注目されるものはオリーブ油で国産量と同じ程度輸入されている。主要油脂である綿実の減産があった場合油脂が輸入されている。

#### 3) コロンビア

コロンビアでは食用油の 50% 近くを輸入しているが、種子としているものはコブラのみで、大豆油、綿実油を輸入している。

国産種子で油脂を生産しているものはゴマ、綿実、コブラなどである。



#### 4) チリ

チリーでは近年、ひまわりおよびなたね油の生産が急増しているが、種子の輸出、輸入を行なっているものはなく、ひまわり油を主としてアルゼンチンから輸入していた。しかし国産の増加により、輸入量は急減している。

その他に大豆油、綿実油を米国から、オリーブ油をスペインから輸入している。なお輸出油脂は魚油のみ、

#### 5) ベネズエラ

ベネズエラではゴマ油が重要な植物油となっており、国内生産では供給不足のためスーダン、ナイジェリアからゴマを輸入しており、南米では唯一の種子輸入国となっている。

1966年の油脂生産量は次のとおりであった。

ゴマ油	32,035	トン	(8社)
やし油	746	トン	(17社)
植物油脂	31,767	トン	(10社)

( )内は、国内搾油業者数

上に示す如く、ベネズエラではゴマ油が植物油脂の50%を占めているのである。政府は国内需要を満たすため、ゴマの生産を奨励しており、生産量も急ピッチで伸びている。

	1960	1961	1962	1963	1964
生産量	24	28	30	46	46 (千トン)
輸入量	32	16	21	14	20

ベネズエラは国産油脂の他に、落花生油を輸入していたが、輸入量が年々増加する傾向にあるため、政府では米国から技術者を招き国内搾油を行

なり方針で、すでに67年に稼働をはじめたと伝えられる。なおベネズエラでは落花生油は主として海産物の缶詰用に使用されている。

#### 落花生油の輸入推移

1960	1961	1962	1963	1964	1965
2.6	1.8	3.1	4.5	3.0	5.2 (千トン)

ベネズエラの1965年植物油脂の輸入状況は次のとおりであった。

落花生油	5,159,049kg	1,818,366ドル
ゴマ油	5,132	3,884
その他	1,935	2,606

種子及び油脂の輸出はほとんどない。1965年の輸出量は次のとおりであった。

ゴマ油 (クラサオ向)	520kg	477ドル
(オランダ領向)	23	20
植物油	440	277

#### 6) エクアドル

エクアドルでは生産される植物油脂はローヤルパーム油およびコブラ油で、両者で約5千トン、その他に綿実油、ゴマ油が合わせて千トン内外生産されている。

ひまは全量輸出されており、国内ではまだ搾油されていない。輸出先はオランダ、西ドイツ、ベルギー、その他英米国となっている。

植物油で輸入される主要なものはコブラ油(ココヤシ油)で国産量にほとんど匹敵する。その他大豆油、パーム油が各千トン前後、綿実オリーブ油その他が輸入されている。

7) ウルグアイ

ウルグアイの主要植物油はアマニ油およびひまわり油で、ほぼ5万トンが年間に生産される。アマニ油がひまわり油より若干多い水準を維持している。この他に落花生油が千トン内外生産されている。

アマニ油のほとんど90%が、オランダ(40%)西ドイツ(28%)イタリア(12%)その他南ア連邦、スウェーデン、英国などに輸出される。

油脂の輸入は工業用に限られ、食用油は1%内外である。主にセイロンなどからパーム油、ココナシ油が輸入される。

第四節 生産、輸出入統計

1) アルゼンチンのひまわりの生産量 (単位:千トン)

	1962 —63	1963 —64	1964 —65	1965 —66
ブエノスアイレス	267.0	285.0	378.4	495.0
コルドバ	57.0	30.8	81.2	76.4
チャコ	23.0	15.8	63.9	26.0
アントレリオ	17.7	21.6	22.8	27.3
サンタフェ	81.6	97.7	183.4	143.0
その他	15.7	9.1	27.3	14.3
計	462.0	460.0	757.0	782.0

BOLETIN DE ESTADISTICA

ENERO/MARZO 1967

ひまわりの輸出量

相手国

ウルグアイ	157,800 Kg	32,240 ドル
計	157,800 kg	32,240 ドル

COMERCIO EXTERIOR ARGENTINO 1965

2) アルゼンチンの落花生の生産量

(単位：千トン)

	1962 -63	1963 -64	1964 -65	1965 -66
コルトバ	307.2	329.7	435.9	407.5
サンタフェ	1.1	1.2	0.2	0.4
その他	3.7	2.1	3.1	2.9
計	312.0	333.0	439.0	410.8

BOLETIN DE ESTADISTICA

ENERO/MARZO 1967

落花生の輸出量

① 殻付落花生

相手国

カナリヤ諸島	49,408 Kg	7,987 ドル
スペイン	79,424 Kg	12,992 ドル
イタリア	50,000 kg	8,428 ドル
計	178,832 Kg	29,407 ドル

② 落花生

相手国

スペイン	79,493 Kg	17,426ドル
イタリア	264,779 Kg	46,660ドル
ベルギー	28,920 Kg	7,357ドル
計	373,192 Kg	71,443ドル

COMERCIO EXTERIOR ARGENTINO 1965

3) アルゼンチン植物性油脂輸出実績

(1965年)

	数量 Kg	金額 ドル
ひまわり油		
西独	4,837,013	1,224,281
ベルギー	445,960	103,882
ポリビア	189,780	50,454
オランダ	13,828,918	3,308,995
パラグアイ	105,226	3,2850
ベルギー	13,576,906	3,521,354
スイス	395,650	107,627
ウルグアイ	2,098,820	613,568
計	35,478,273	8,963,011
落花生油		
西独	15,052,310	4,134,196
アルジェリア	1,100,000	297,835
ベルギー	1,380,400	377,074
トミニカ	7,000,290	1,872,700
オランダ	36,705,117	10,138,992
パラグアイ	52,215	19,254
イギリス	468,996	131,946
アジアにおける イギリス領	96,260	26,370
計	61,855,588 Kg	16,998,367ドル

(Comercio Exterior Argentino 1965)

4) ブラジルの種子生産量

(単位：千トン)

	1963	1964	1965
落花生	78,034	41,551	102,885
ひまわり	1	54	1,589
ひま	91,213	133,492	170,671
胡麻	37	1,086	1,376
油やし			
Bafacu	45,170	51,851	54,102
Buriti	3	3	3
Coco-da-baia	289	552	707
Devde	5,340	6,429	8,491
Licuri	2,554	465	2,703
Macau fa	327	486	204
Murumuru	43	17	41
Piacava	2	2	2
Tucum	1,511	1,230	2,568

ANUARIO ESTATISCO DO BRASIL 1966

## 第六章 総括

### 第一節 種子の需給事情

世界的に主要な油料種子の需要国は、その種子を主要油脂の原料としている国である。

しかし、原則として各国の主要油脂となっているものは、国内自給される種子となる。例えば米国の大豆油、ソ連および東欧諸国のひまわり油、イタリアのオリーブ油、ブラジルの綿実油などである。ところが落花生およびココヤシ、ヤシ、ヤシ核油を主要油脂とする英国、フランス、ベルギー、また大豆油とココヤシ、ヤシ、ヤシ核油を主要油脂とする西ドイツ、オランダなどのヨーロッパ諸国は、その油脂原料ほとんど全量を輸入せざるを得ず、オリーブ油を主要油脂とするイタリアもオリーブ以外の油脂原料は全く国産されていない。大豆油を主体とする日本もまた植物油脂は大部分が輸入原料なのである。このように主要種子輸入国は英国およびEEC諸国、日本となるのである。安定的な輸出を行なうためには、当然これらの国をマークしなければならない。

だが種子の主要輸入国となり得る国は、前述の国々に限られているわけではない。国内種子を原料として主要油脂としている国でも時によっては、天候の不順などによって思いがけぬ不作となり、大量の輸入手当を行なわなければならないことがある。例えば1964年のビルマがそうであった。ビルマは1958年以来落花生を輸入したことはなかったが、64年には5万トン以上を輸入した。これらの国が出現することを、輸出国としてはむしろ警戒している。一時的な需給ひっ迫によって価格が騰貴する。このため栽培農民が急速に増え、翌年は利益を生み出さなくなることがある。

対抗策としては国内搾油設備を建設することである。世界的にはこの方向にある。すでにこの措置を講じたのは、ブラジルのひま、コンゴの油やしなどにみられ、落花生ではスーダン、ひまではエクアドル、油やしではナイジェリアなどの主要輸出国にその動きがある。

いま、栽培面での条件を考慮せず、植物油脂原料としての将来性を検討するには、次の7つの面から考察すべきであろう。

#### ① 油脂の生産傾向

油料作物であるから、油脂の生産が伸びているかどうかが問題となる。伸びている場合は需要が旺盛であることをも示す。しかし油脂の生産が伸びている場合は当然種子も増産されている。また生産が停滞している場合は原料ひつ迫による場合があるから注意すべきである。

#### ② 種子の生産傾向

油脂の生産を支えるものは種子の生産であるから、前記の点を思慮しながら、その相関関係をみる必要がある。

#### ③ 種子の輸出傾向

原料の海外依存度はどのように推移しているか、相対的に国内需給体制がどのように進められつつあるかが問題となる。

#### ④ 油脂の輸出推移

需要国は種子ばかりでなく、油脂によって需要を補う場合も多いし、種子供給国が油脂供給国に転じることもある。したがって種子の輸出推移と油脂の輸出推移の関連性をみななければならない。

#### ⑤ 種子の生産に対する輸出比率

輸出比率が高いことは、生産国に搾油設備または国内需要が低いことを示し、輸出ウエイトが小さいことは国内消費度が高く、各国の目給体制が比較的進んでいるとみることができる。

#### ⑥ 種子生産国および輸出国と輸入国の関係



供給国と需要国の関係はどうなっているか、それはどのように動くか、また動きつゝあるか

#### ⑦ 主要輸入国の油脂生産傾向と種子の輸入傾向

世界の主要な油脂消費国の主要油脂は何か、当該油脂の生産傾向はどうか、以上によって今後の海外依存度はどうなるかをみることが出来る。

以上は長期的な展望をもって、将来油脂原料を大量に世界貿易市場に送りこもうとする場合に検討しなければならない事項である。

しかし現状は、世界的に輸出、輸入のバランスがとれているようでも、油脂原料の需給はひっ迫気味であり、しかも生産はその年の天候に左右されることが大きいから、原料手当に苦慮している国は多い。であるから数年の傾向を検討することは、長期的な計画策定には欠かせないが、近い将来の予測ないしは問題を解決することにはならない。この点を加味して、以下に項目ごとの総括を行なった。

### 第二節 種子および油脂の生産状況

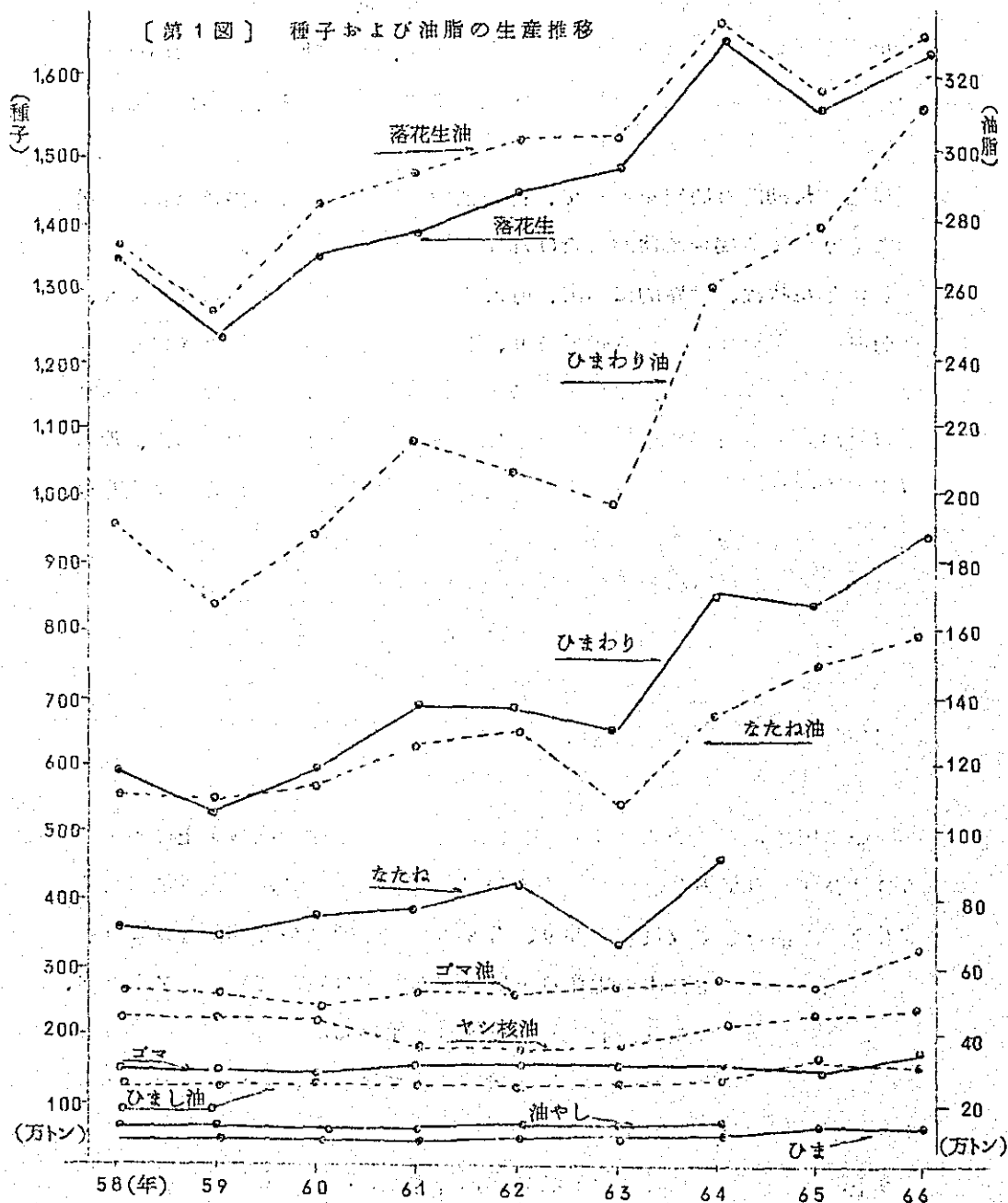
油脂の中で最も顕著な伸びを示し、しかも種子の生産推移を上回っているのはひまわりである。すでに66年には落花生油と並んで大豆油に次ぐ重要な植物油として成長しており、今後も生産量では最も期待されよう。

落花生油は落花生自体の生産量とほぼ平行して伸長しており、フランス、英国、ベルギーでは主要油脂として輸入されている。

なたね油もヨーロッパ中心に生産量が伸びているが、ヨーロッパ圏内の供給体制もまた進められている。

以上、生産量でみる限り、3品目が期待される、中でもひまわりは油脂

として成長商品の最大のものである。



(註) 1964年度まで英国統計  
1965年以降は米国統計による。

### 第三節 種子及び油脂の輸出推移

種子および油脂の輸出推移を比較してみると次のようなパターンに分けることができる。

- ① 種子、油脂とも増加傾向にあるもの＝落花生
- ② 種子、油脂とも輸出が減少傾向にあるもの＝やし核
- ③ 種子、油脂とも横バイ傾向にあるもの＝ゴマ
- ④ 種子は横バイ、油脂が増加しているもの＝ひま、ひまわり
- ⑤ 種子は増加、油脂は横バイ傾向にあるもの＝なたね。

それぞれのパターンについて主なる原因と考えられるものをチェックすると、第一の落花生は多くの栽培国で油脂が生産され、余剰分が輸出されていること。したがって種子の生産、輸出、油脂の生産、輸出はいずれも平行的である。

やし核は種子の生産国、油脂の生産国がはっきり分れており、一方が輸出国、一方が当然輸入国となっている。油脂の再輸出は少なく、コンゴが種子の生産国から、油脂の生産国となったために、油脂輸出量の50%を占めて、油脂輸出量を支えている。ナイジェリアが本格的な搾油を始めれば、種子の輸出は減少し、油脂は増大し、第4の型に入る。

種子、油脂とも大きな変化のないのがゴマであるが、ゴマ油の輸出量は62年を除いては1000トン台で、輸入国では食用または油脂として使用され、再輸出は少ない。

ひま、ひまわりは同型で、種子は横バイ、油脂が増加しているが、歴史的な変遷は異なっている。ひまは最近中共の出現によってバランスがくずれつつあるものの第2型から第4型に移向したものである。

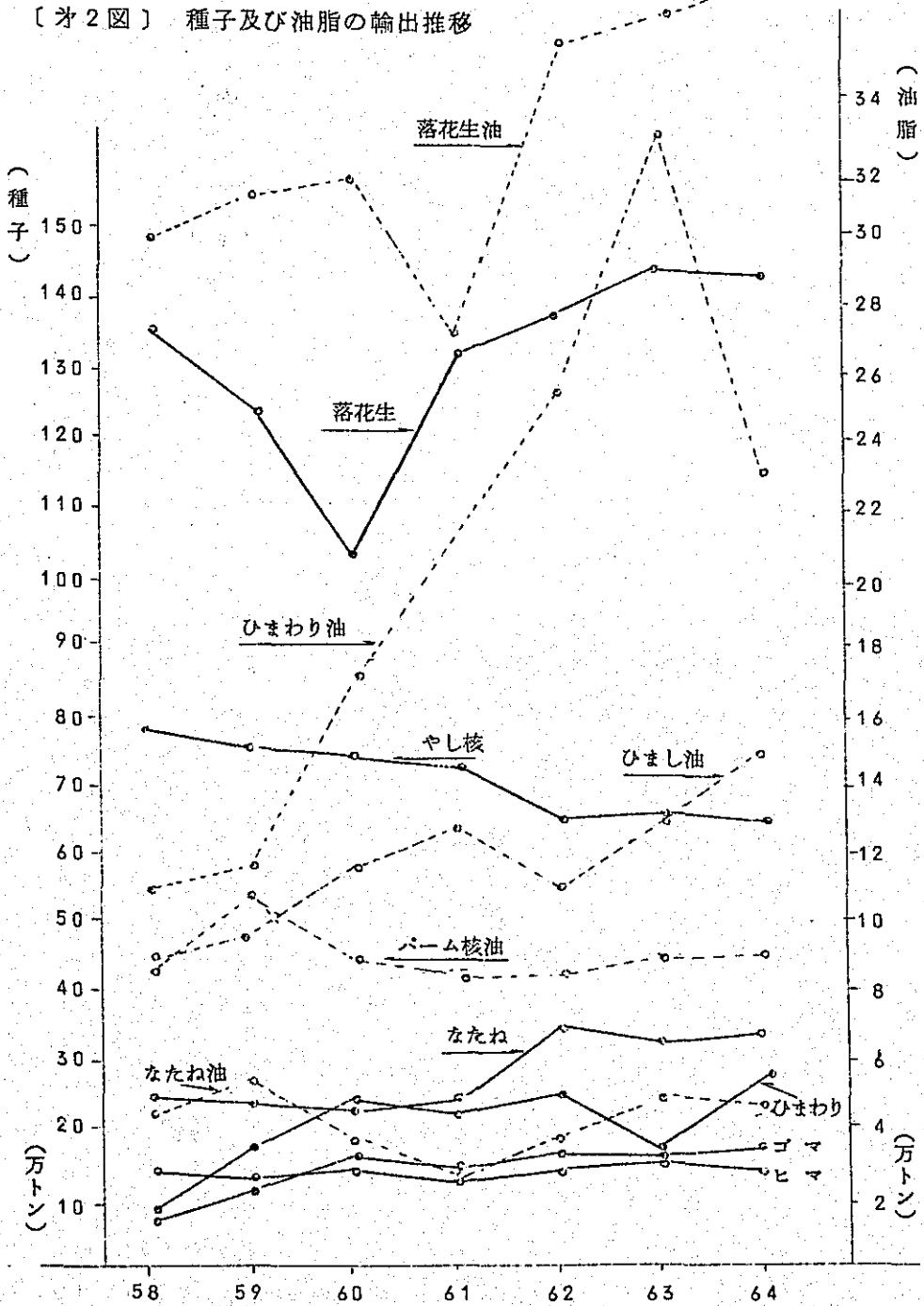
しかし、ひまわりは第1型からの移向で、余剰分が輸出される傾向にある。

ある意味では、第5型のなたねが最も後進スタイルである。つまり主要輸出国に国内搾油の動きがまだない。したがって増産があれば直ちに輸出増加に結びついてくる。アフリカ諸国の落花生についても同じことが云える。

栽培国として重要な輸出品目となっており、生産量が増加すれば輸出増加に直ちにスライドされるものは、アフリカ諸国における落花生、やし核、ゴマ、カナダのなたね、タイおよびエクアドル、パラグアイのひまである。この他にソ連のひまわり、中共のひまは目が離せない。

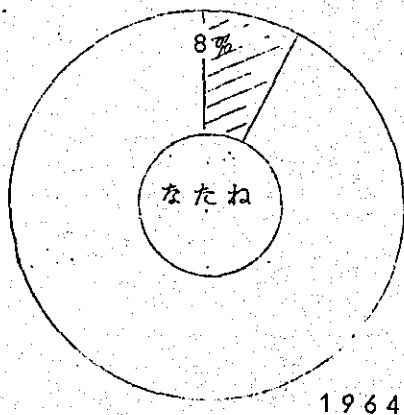
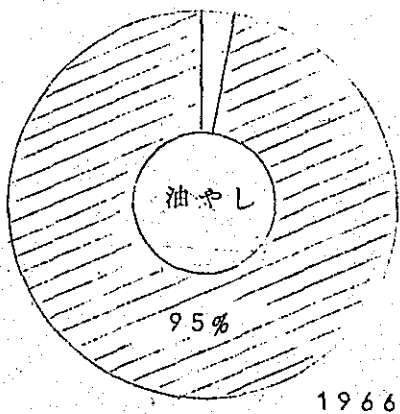
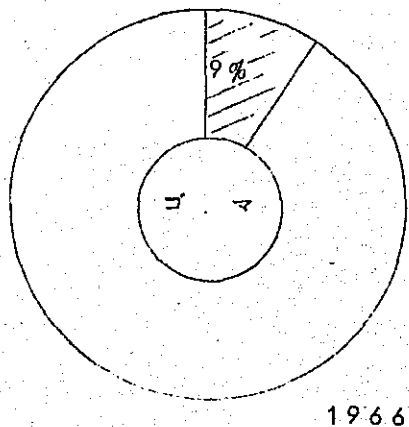
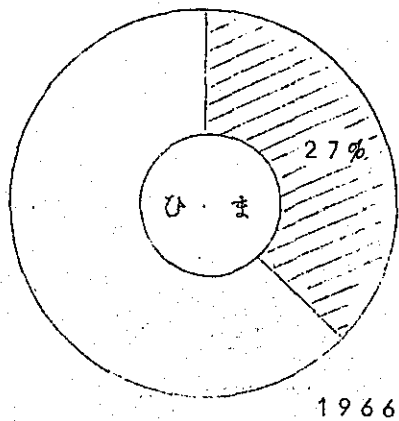
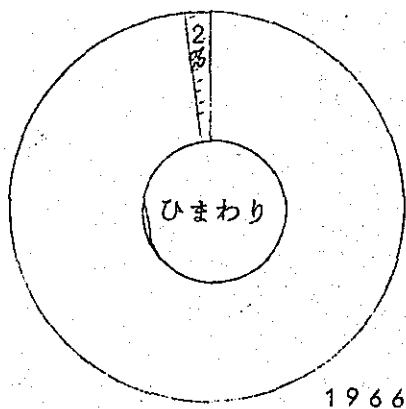
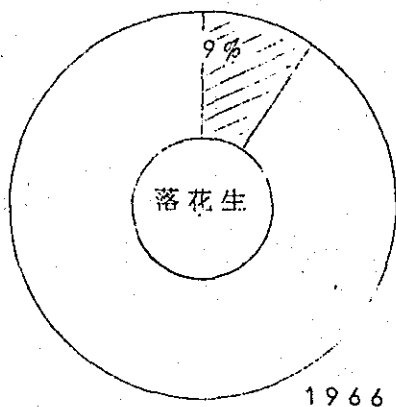
特にソ連ひまわりは Oilworld によれば、67年は急激に輸出が増大したもようである。

[ 才 2 図 ] 種子及び油脂の輸出推移



Commonwealth Economic Committee Vegetable Oils and Oilseds より作製

表3図 生産量に占める輸出量の比率



#### 第四節 種子の生産と貿易

輸出状況を見ると、次の図のようにやし核の輸出比が最も高く、ひまわりの輸出比率が最も少ない。

油やしは、栽培地でやし油が採取されたのち、やし核は全量輸出され、アフリカ諸国の重要輸出品目となっている。

次いで輸出比率の高いものはひまである。ひまは最大輸出国であるタイおよび南米のエクアドル、パラグアイでは全量を輸出している。注目されるのは中共である。

落花生、ゴマ、なたねの輸出比率はいずれも10%弱であるがなたねの輸出増加が最も目立っている。落花生はヨコバイ、ゴマは減少している。

ひまわりの輸出量は今後伸びよう。

#### 第五節 輸出国と輸入国の関係

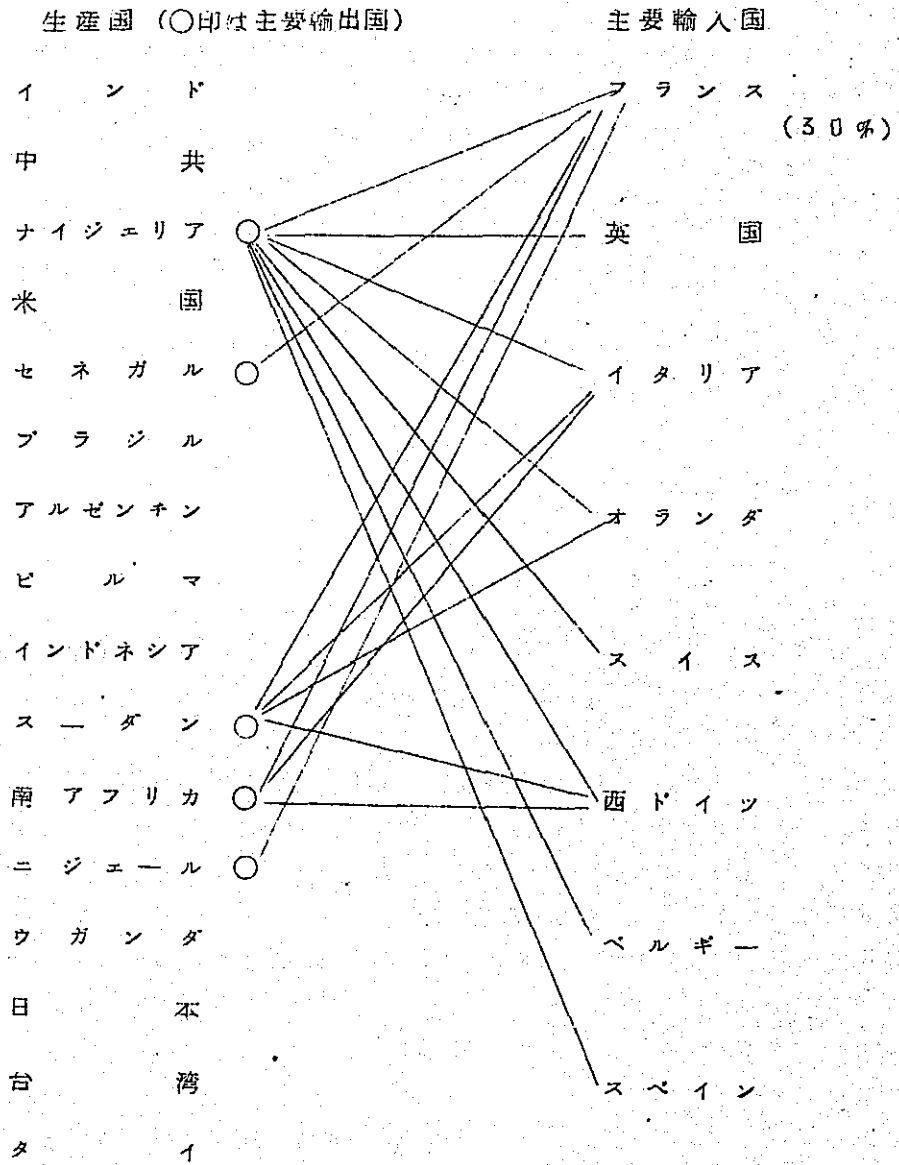
輸出国と輸入国の関係をみよう。第3図以下にみるとりりで、落花生と油やし（やし核）は、典型的なアフリカ→ヨーロッパ型、これは供給国の自立タイプ（国内搾油）である。

ひまわり、なたねは域内取引の傾向、つまり前者は東欧共産圏、後者はヨーロッパ圏内の需給関係である。しかし両者とも、ひま型に移向する気配である。つまりひまはアジア→アジア、南米→ヨーロッパと取引関係が限定的となりつゝある。なたねはカナダ→日本、ヨーロッパはヨーロッパ内取引となる。ひまわりは予断を許さないが、東欧圏内取引以外は、ソ連ブルガリアが日本にアプローチしている。EECの出方にかゝっている。

ゴマは輸入国いずれも、ベネズエラを除いて主要油脂とはなっていないので関係は多岐にわたっている。

これら品目のそれぞれに、シェアの高い国がある。落花生はナイジェリア、ひまわりはソ連、ひまは中共、ゴマはスーダン、やし核はナイジェリア、なたねはカナダである。とくにソ連、中共はこの品目の勃興国として注目する必要がある。他の国は従来の取引があつて、主要相手国がほゞ決まっているが、両国には特定の相手国がまだないので、市場の変化要因をもっている。

1) 落花生

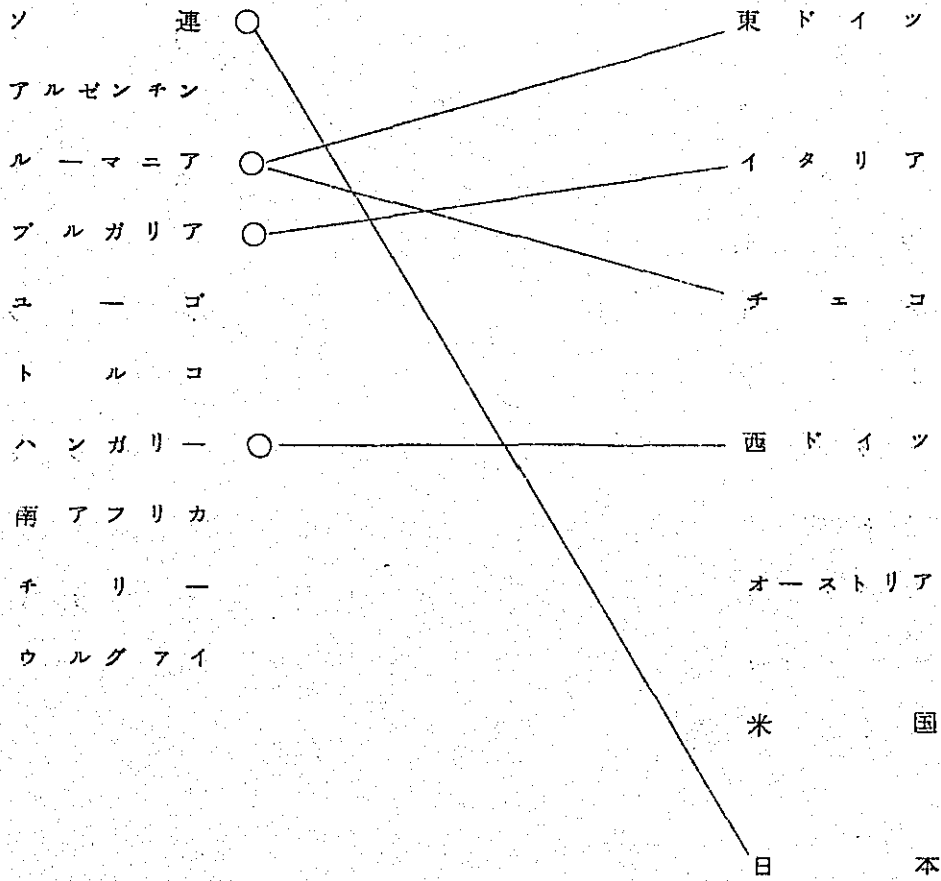




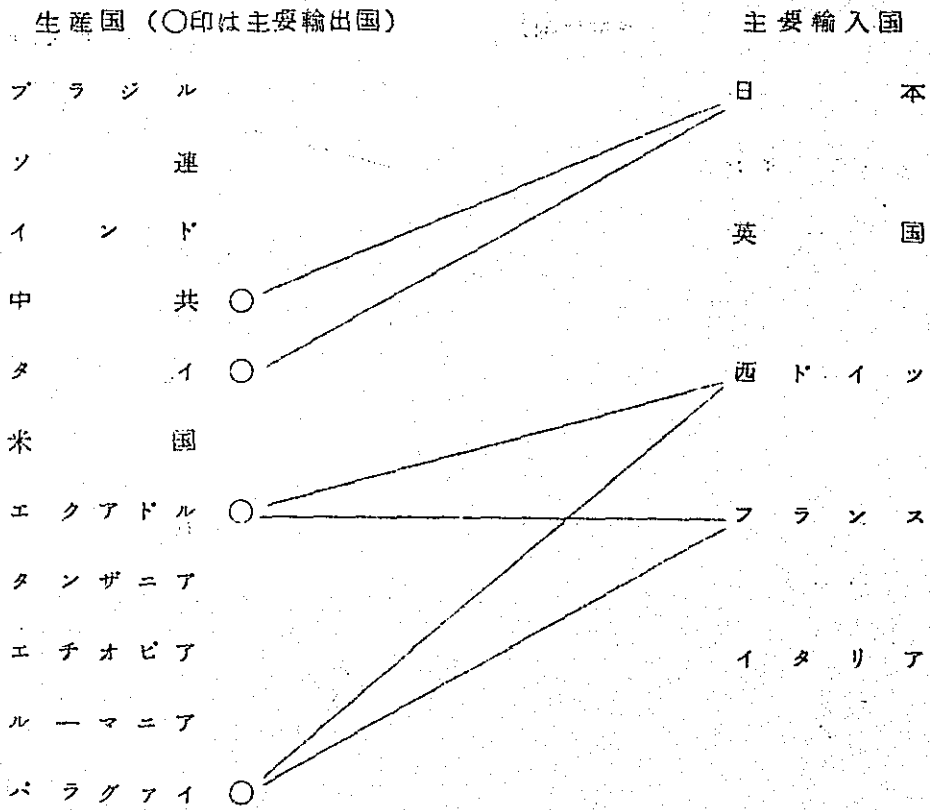
2) ひまわり

生産国 (○印は主要輸出国)

主要輸入国



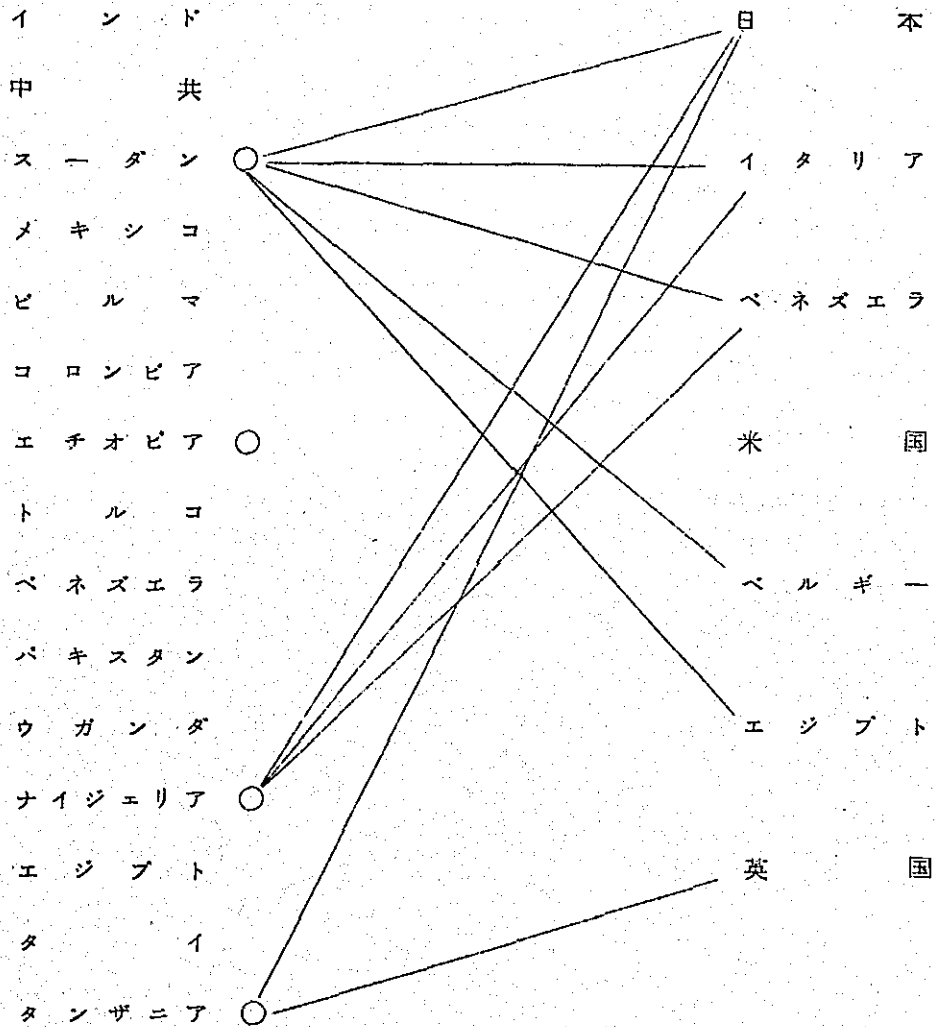
3) ひま



4) コ マ

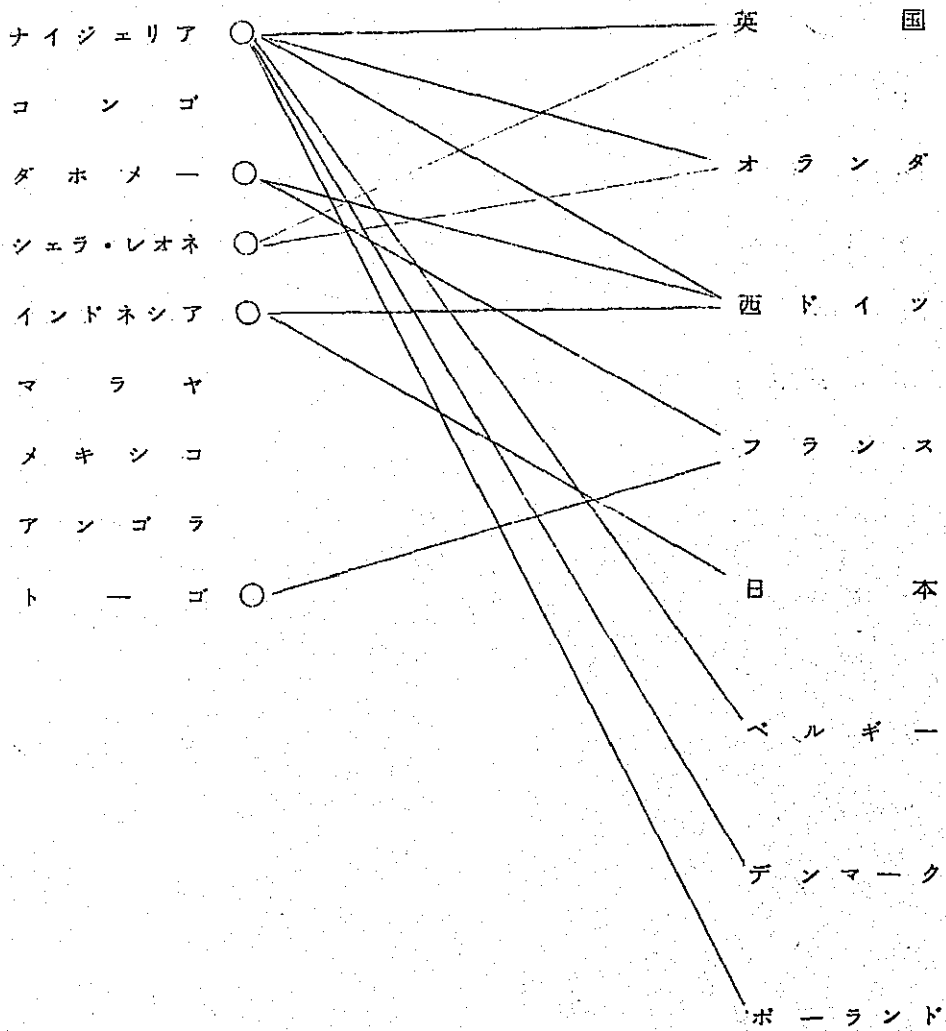
生産国 (○印は主要輸出国)

主要輸入国

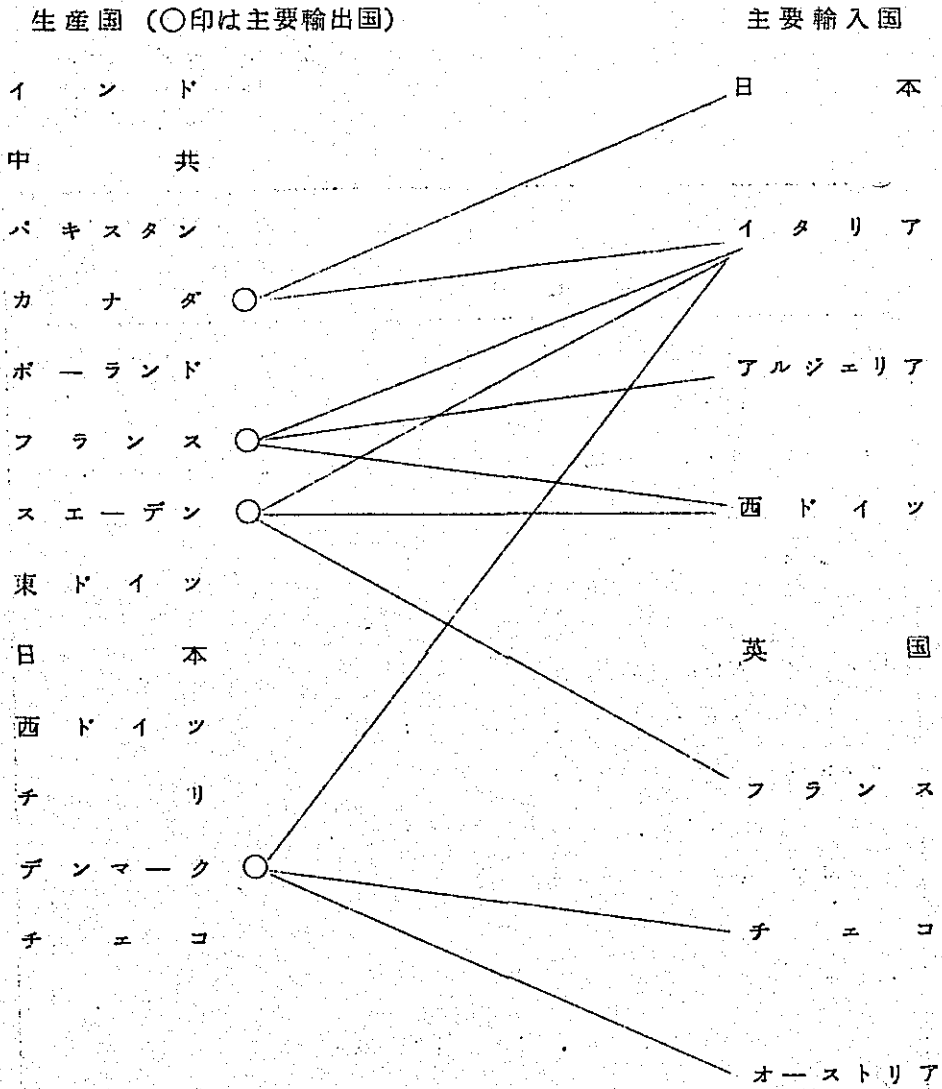


5) や し 核

生産国 (○印は主要輸出国)



6) な た ね



第六節 油脂の生産傾向と種子の輸入

生産傾向 上 昇 ↗  
横 バイ →  
下 降 ↘  
○印は  
主要輸  
入国

	主要油脂	落花生	ひまわり	ひま	ゴマ	やし核油	なたね
米 国	大豆油 (50%) 綿実ココヤシ油	→	n	↗	n	↗	n
英 国	やし、やし核、ココヤシ油 落花生	↘	n	↗	n	↘	n
フランス	落花生 (50%)	↗	n	↗	n	↘	↘
西ドイツ	大豆油 (20%) ココヤシ、ヤシ、ヤシ核 (40%)	↘	↗	↗	n	→	↘
オランダ	大豆油 (25%) ココヤシ、ヤシ、ヤシ核 (50%)	↘	→	n	n	↘	↘
イタリア	オリーブ油 (65%)	↗	↗	→	↗	→	↘
ベルギー	落花生 (20%) ココヤシ、ヤシ、ヤシ核 (50%)	↘	↗	n	n	↘	→
ソ 連	ひまわり油 (60%) 綿実 (25%)	↘	↗	↗	n	n	n
日 本	大豆油 (30%)	n	↗	↗	→	↘	↘

## 第七節 南米の輸出相手国

南米からの輸出相手国は、ほとんど域内または北米、ヨーロッパに限定される。過去のブラジルおよび現在のエクアドル、パラグアイのひま輸出状況からでも推察される。また現在のブラジルのひまし油、アルゼンチンの落花生油の輸出先からもわかる。一つには需要先の主な国がヨーロッパであるからだが、もう一つの条件は輸送の問題、とりわけフレートの問題であろう。これをカバーできる有利な条件が生まれれば日本なども市場圏と考えられるが、当面は困難である。

域内の貿易であるが、現在のところ種子の実績はほとんどない。たゞ需要としてはベネズエラのゴマがあり、これをヨーロッパから輸入しているから、価格面で対抗できれば、域内貿易は成立しよう。域内の貿易は、国内搾油工場の設備状況および油脂と種子の価格差によって決定してくる。これらの条件が整った場合を仮定すれば—

落花生はベネズエラ、ポリビア、パラグアイ、ひまわりはチリー、ペルー、ポリビア、ウルグアイ、パラグアイ、ひまはアルゼンチン、ベネズエラ、ウルグアイ、ゴマはベネズエラ、油やしはブラジル、アルゼンチン、ベネズエラ、エクアドル、なたねはチリーなどつまり現在これらの油脂を輸入している国が必要国となることが考えられる。

これらの需要量はその国の人口、油脂消費量によって決まってくるが、多くは各国の主要油脂のその年の生産状況に左右される場合が多いのである。

## 第八節 所 見

思い切った推論をなせば、全ての品目は増産をし、輸出すれば、輸入国はある。なぜなら油脂の生産が伸びをやんでいるのも、それは油脂の需要が停滞しているのではなく、むしろ原料生産に負うところが大きだからである。したがって種子の増産があれば油脂の生産は必ず伸びる、要は価格の安定策である。国内搾油にまで進む長期計画と、時々刻々の需要国および供給国の情報をキャッチし、これに国内生産者が左右されぬ生産体制がつくられねばならぬ。

しかし、近い将来にどれか一つを選ぶとすればひまわりではなかろうか。ソ連などが開発している高含油分の品種を採用することが条件である。すでに米国でも、ひまわりの油脂用種子を栽培する動きがあり、近隣諸国からのオッフアがあれば、ひまわり油の生産も増大するであろう。ひまわり油は大豆油、落花生油より高品質であり、食用にはもちろん加工食品にも多く使用される。

ひま、落花生も有望ではあるが、すでに南米ではその実績があり、今日では油脂輸出に切り換えられ、あるいは切り換えられつつある。ひまは米国の輸入が減じており、落花生はフランスがカギをにぎる。すでに英国では大豆油へのウェイトが高くなりつつある。

ゴマは今日までのところ種子として南米に輸入されている唯一の原料である。ベネズエラがスーダンおよびナイジェリアから年間2万トン前後を輸入している。したがって域内貿易の可能性が最も強い種子ではある。しかしベネズエラとしても、国内の重要植物油原料と積極的な増産対策を進めており、輸入量は必ずしも増加していない。この他ヨーロッパではイタリアが主要輸入国となる。



油やしは現地で採取するやし油および粕の処理が先決問題である。

なたねはカナダが大増産を続けているにもかかわらず、ヨーロッパが域  
内需給にウエイトをおいているところに問題がある。

<参考資料>

米国内でも油脂用ひまわりを生産

最近、アメリカでもソ連の高油分品種のひまわり大增産に刺激されて、ミネソタ州、ノース・ダコタ州、レッドリバーバレーなどで油脂原料としてのひまわりを生産するようになった。

これまで、アメリカではひまわりを油脂用に使用することはほとんどなく、種用（鳥餌、肥料、その他食用）として使用されてきた。

ひまわり及びひまわり油はカナダを中心として輸入してきたが、その輸入量は国産の増加によって減少する傾向にある。

ひまわりは1960～66年の間、年間平均1200万ポンドが輸入され、その75%はカナダから。1966年は1600万ポンド（うちカナダから1400万ポンド）が輸入されている。

またひまわり油の輸入は1961年に3万ポンド、63年には38.9万ポンドと大巾に変化した。66年は10.9万ポンド（うちカナダから9.4万ポンド）となっている。

1966年ミネソタ、ノースダコタ両州におけるひまわりの収穫量は1エーカー当り、ミネソタ平均920ポンド、ノースダコタ平均880ポンドであったが、たいていの農民は1000ポンドの収穫量を上げ、中には1500～2000ポンドの収穫を上げた農民もあった。

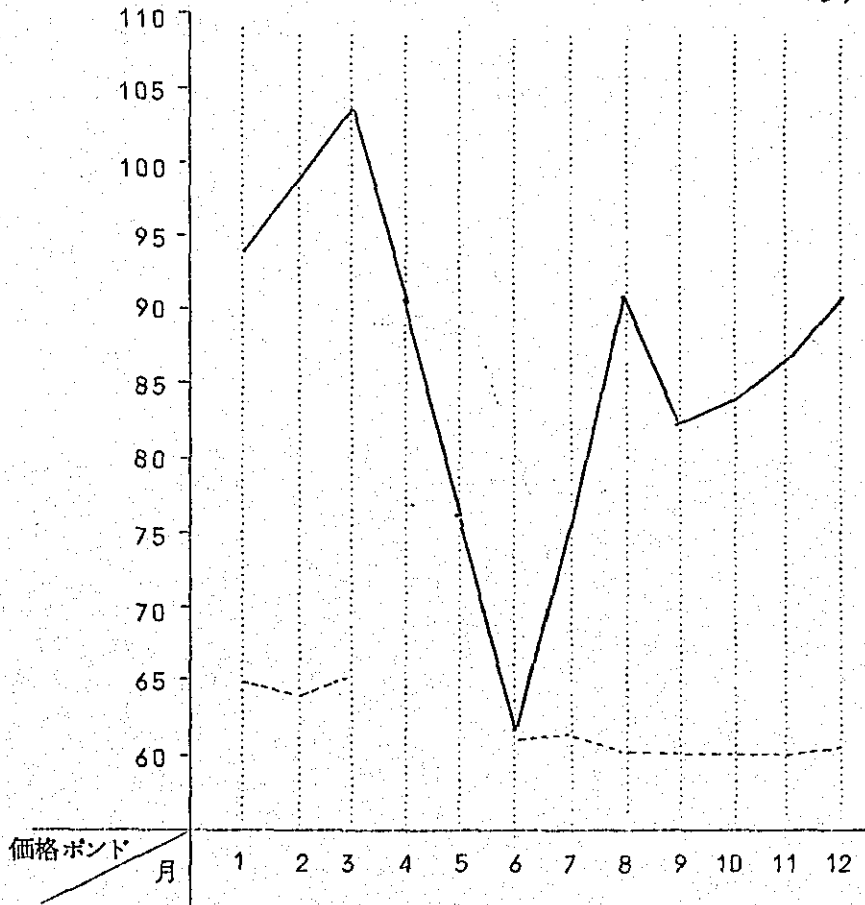
1エーカー当り1000ポンドの収穫があれば、油分40%として、ひまわり油は400ポンド、大豆油270ポンド、アマニ油200ポンドと、ひまわり油の生産が多くなり、前記両州の1エーカー当りの報酬はひまわり48ドル、アマニ27ドル、大豆62ドルとなったことなどから、今後のひまわり増産がみこまれている。

〔参考資料〕 種子の価格推移

1) 落花生

1967年ナイジェリア落花生相場

(CIF トン当り)



※ 注1. 食用も含む

…… は製油用ナイジェリア落花生のCIF相場

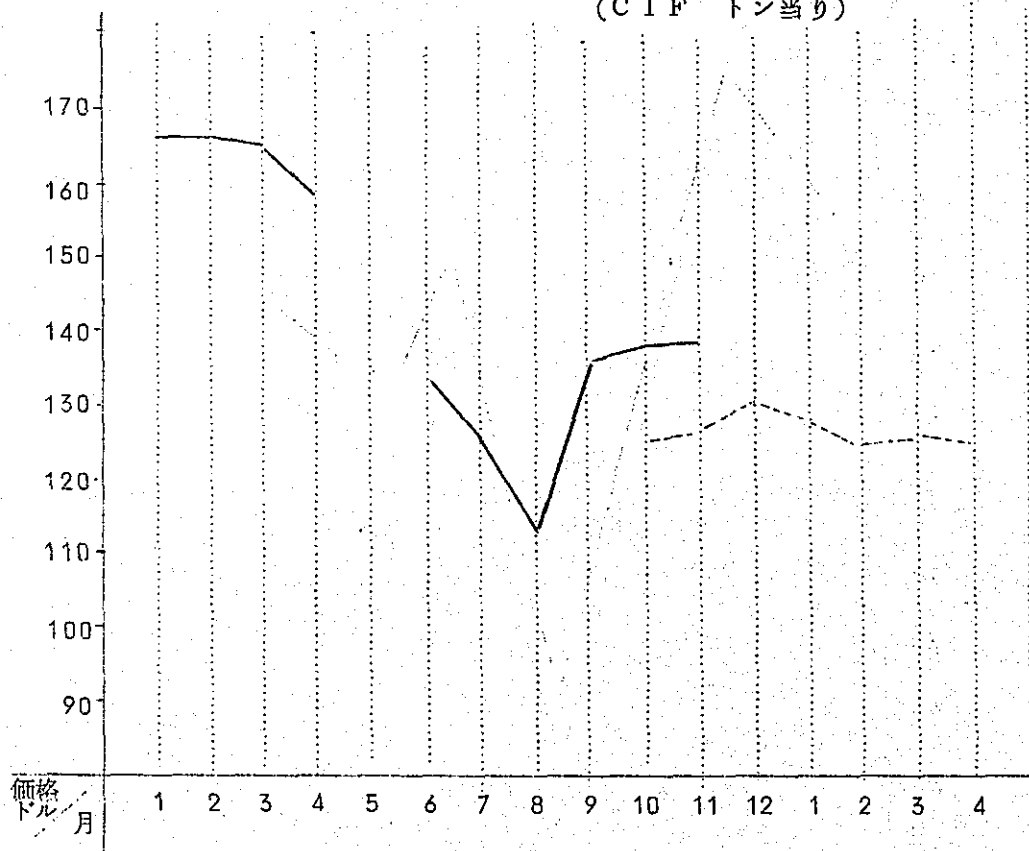
吉原製油調

—— は大蔵省関税局調べ

2) ひまわり

1967~68. ソ連ひまわりの価格

(CIF トン当り)



— ひまわりの平均価格

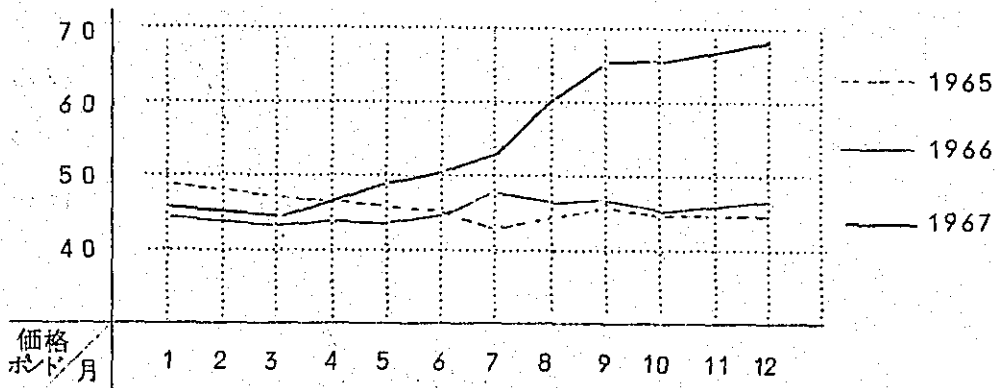
大蔵省関税局

..... ソ連製ひまわり

日清製油調

3) ひ ま

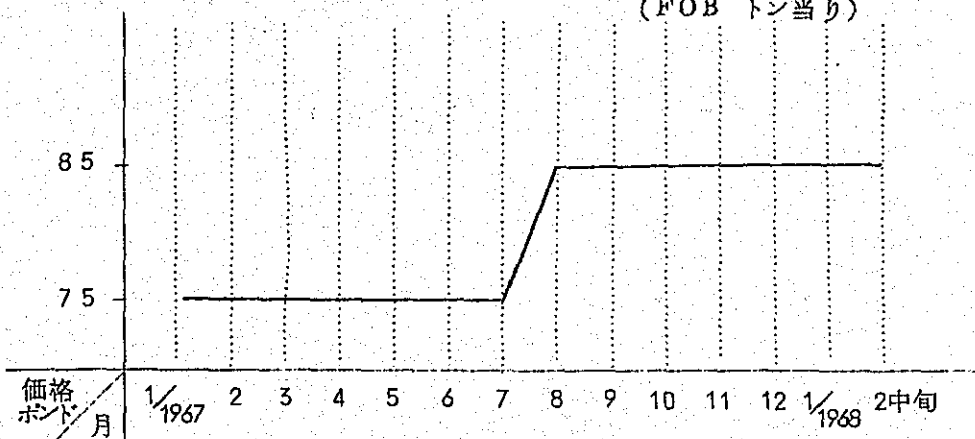
1965~67. タイひまの原料相場  
(CIF トン当り)



伊藤製油調

4) ゴ マ

1967~68. スーダンゴマの平均積出し価格  
(FOB トン当り)

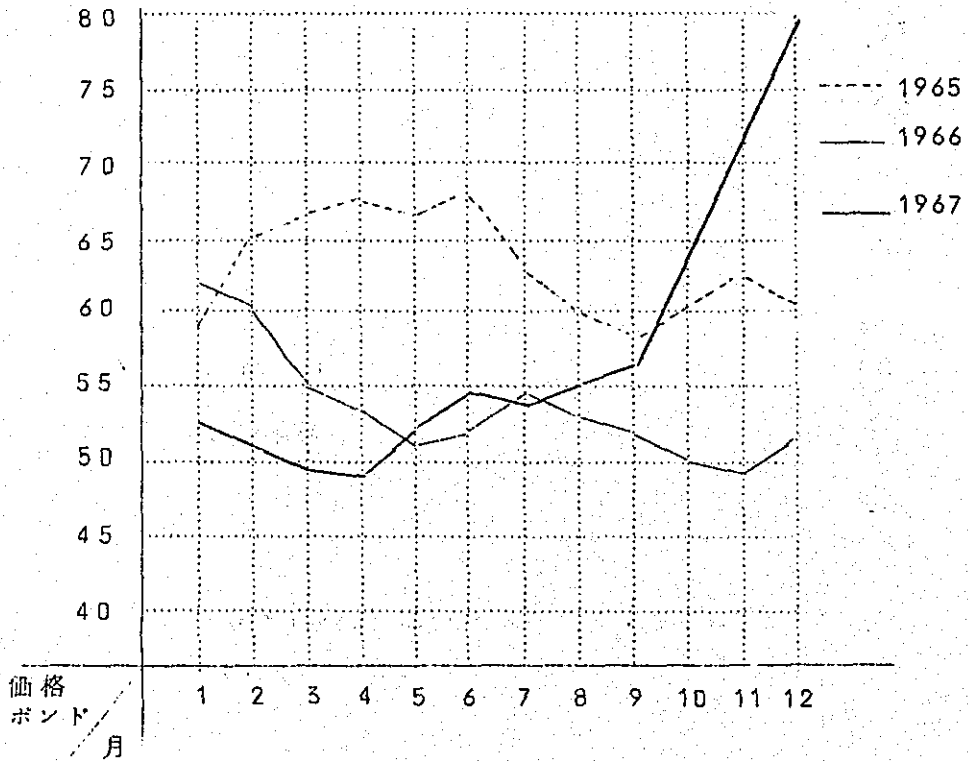


三菱商事調

5) パーム核

1965~67 マレーシア パーム核相場

(CIFトン当り)

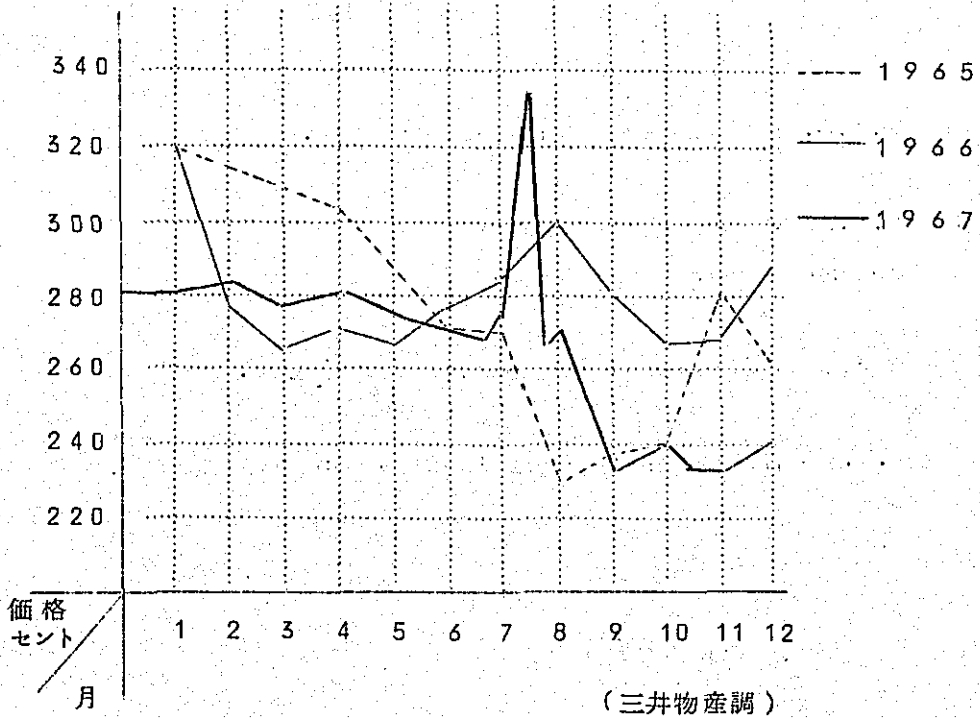


(不二製油調)

6) な た ね

1965~67 カナダなたね相場

(ブッシェル当り)



< 参 考 資 料 >

次の資料を主に参考にしました。

- 1) Common wealth Economic Committee  
Vegetable Oils and Oilseeds.
- 2) Congress of the International Association  
of seed Crushers.
- 3) F.A.O. Foreign Agriculture Circular.
- 4) U.S.D.A. Foreign Agriculture  
Economic Research Service.
- 5) World Agricultural Production and Trade.
- 6) U.N. Yearbook of International Trade Statistics.
- 7) Oil World
- 8) The Trade News Service

なお関係各国の大使館および関係協会ならびに次の方々のご協力を得ました。

日 本 油 脂 協 会  
油 料 輸 出 入 協 議 会  
三 井 物 産 株  
伊 藤 製 油 株  
不 二 製 油 株  
そ の 他

以上。



